
ボーダーライン

ムライリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボーダーライン

【Nコード】

N6150V

【作者名】

ムライリカ

【あらすじ】

河村礼二は田舎のG校に通う、健全な男子高校生。二学期の始め、礼二のクラスに埼玉から転校生がやってきた。彼の名は久瀬美紀夫。大きな瞳に長いまつ毛と可愛い顔つきで、体も小柄で華奢とまるで女のような奴だった。礼二はそんな久瀬とひよんな出来事から親しくなる。やがて部活動も一緒になり、二人は一緒に登下校する仲になった。

ある日、礼二は電車で偶然一人の女性に会う。彼女の名前は久瀬みお。なんと久瀬美紀夫の双子の姉だった。その整った容姿に、

礼二は思わず一目惚れしてしまう。しかし、彼女にはある秘密があった。

line 1・転校生

九月の始まり、即ち二学期の始まり。高校二年の夏休み中、碌に勉強するわけでもなく、部活とアルバイトに勤しんでいた俺にとって、今日の夏休み明け実力テストなど上の空だった。

一人みかん畑の広がる通学路を歩く。登校時刻にギリギリ間に合う電車に今日は乗ってきた為、他の生徒は皆暑い中忙しく足を動かしていた。俺も負けじと手で汗を拭いながら緩やかな傾斜を上る。俺の通うG高は、山と海に阻まれた辺鄙な所だった。周りは畑に囲まれており、毎年わが校からみかん泥棒が出没する。そんなのどかな学校だ。

登校するだけで汗だくになった俺は、教室に入るとまっ先にタオルで顔を拭き、制汗スプレーを駆使して早く汗を食い止める。たまらず駅前で貰った『光ファイバー』の宣伝うちわも使う。

「礼二、お前の席そこじゃねえよ」

クラスメートに言われ、俺は自分が座っている机の中を見た。中は空っぽで、何も入っていない。前の机の中を見ると、俺の筆箱が入っていた。前の机が俺の席だった。

「あれ？机が増えたのか？」

俺は席を立つて前から机を数えてみた。やはり机が一つ増えている。昨日の始業式の後、今日は夏休み明けのテストだからと席を名簿順に移動してから帰ったのだった。その時、俺は一番後ろの席だったはずだ。

「な、増えているだろ？ 噂じゃ転校生が来るらしいぜ」

転校生。こんな田舎の学校では珍しいと思った。何せこのG高は、地元の中学で平均ラインの奴らが募って来るような所だ。よっぽど頭のいい奴か、馬鹿な奴、専門科業は地方に行くので、クラスの三分の一程は中学校からの顔見知りだった。

「女子か？」

「残念。ちらつと職員室を覗いた奴が言うには、男だよ」

「何だ、男かよ」

俺はがっかりして前の席に移動した。どうせ自分の後ろの席に座るのなら、女子の方がいいに決まっている。

俺はようやく自分の席に着くと、シャツのボタンを開け、一生懸命涼もうと努力した。いくら三階で窓が開けられているとはいえ、教室の中は蒸し返すように暑い。都心部では教室にクーラーが義務付けられている所もあるらしいが、こんな田舎の学校ではクーラーなんて夢のまた夢だった。

「礼二、放課後は部活出てくれるよね？」

そう言っただけの横に立ったのは四組の及川美裕。首に黄色のタオルをかけ、今日は暑苦しい前髪をピンでとめ、額を露にしていた。おかつぱ頭でちょっと気が強い、陸上部のマナージャーという名のお節介女だ。及川とは去年同じクラスだったのだが、こうして離れてもちよくちよく俺のクラスにまで来る。及川の世話好きがマナージャーとして適正ではあるが、俺は及川が少し苦手だった。

「放課後は絶対行くよ。今朝は寝坊したからな」

「もう、そんないい加減じゃ困るわよ！ 礼二は陸上部の時期部長候補なんだから」

「はいはい」

俺は及川を適当にあしらうと、機嫌悪そうに教室を出て行く後ろ姿を見送った。女子の制服は男子の学ランとは違い、厚手の白い半袖ブラウスに、紺のスカート。派手な下着を付けた女子の、ブラジヤーがうつすらと見えるのも特徴だった。ちなみに及川は黄色だ。

全く、見たくない物を見せられるこっちの身にもなれよな。俺は眠気を感じて欠伸をかました。本当は今朝五時に起きているのだ。実は今朝から内緒で始めた、朝のスーパーの品出しアルバイトをしてきた所だった。

進学校のG高では、原則アルバイトは禁止されている。それでも俺の友達の何人かはこっそりアルバイトでお金を貯め、月の小遣いの足しにしている。俺もそんな友達に進められて、夏休みからバレにくい朝方の業務アルバイトを始めた。放課後は部活に専念し、早く寝て、早く起きる。今時の高校生にしては規則正しい生活をおくっていると思う。ただ一つ間違っているとすれば、そこに勉強がない事だけだ。だから俺はなるべく授業中に宿題を済ませてしまい、家には教科書を持ち帰らない主義だった。それに自宅に帰った所でプライベートはない。

俺の家ははつきり言って貧乏だった。川原近くの古い木造二階建てに家族七人で暮らしている。両親と、六人の兄弟。今時六人兄弟つてのも珍しい。一番上の兄は現在東北の大学に行っており、実質

二番目の俺が兄弟の中で最年長だった。

五人も兄弟がいれば当然一人部屋はなく、下の中学三年生の弟と同部屋となる。兄貴としては、受験を控えている弟に部屋を優先させてやりたい。それに、自分はあまり勉学に興味がなかった。兄の様に賢い訳でもなく、弟の様に努力家でもない。進路も宙ぶらりんな俺は、ただ早く自立したいと願っているだけだった。

チャイムが鳴り、テスト用紙を持った先生が教室に入ってきた。特に教科書を出して勉強していなかった俺は、うちわけしまう。

「今からテストの前に、転校生を紹介する」そう言って手まねきをした。「埼玉から来た、久瀬美紀夫君だ」

一瞬にして教室が静まり返った。皆がドアを凝視する中、一礼して入ってきたのは華奢な女の子のような面構えの男だった。真新しい半袖のカッターシャツから飛び出た腕は色白で細く、目もくつきり二重で大きい。都会から来た割にはちゃらちゃらした雰囲気もなく、洗礼された容姿端麗を感じさせた。

「久瀬美紀夫です。埼玉でも普通科の進学校に通っていました。部活動は特にしていません。趣味は……えっと、ゲームです。皆さんよろしく願います」

小さくお辞儀をし、皆に注目を浴びて照れくさくなったのか、少しはにかむ。男とも女とも取れそうな中性的な声で、女のような男だった。可愛い、そんな言葉がぴったり当てはまる。

可愛い？ 俺は男に対して何を考えている。名前も美紀夫だなんて。みきちゃんとか、女かよ。先生の紹介に俺は面倒臭そうに肘を

つく。ふと、その心情を悟られたのか久瀬と目が合った。俺は思わずどきつとして、心臓が縮み上がる。

「久瀬の席は窓側の一番後ろだ。河村、テストが終わったら、久瀬に校舎案内してやれ」

「えっ、俺ですかあ？」

よっぽどすつとんきょうな声が出たのか、クラス中に笑いが起きた。俺は恥ずかしくなって咳払いをする。

「河村、お前は仮にも学級委員長だろうが。たまにはそれらしい事をしろ」

先生に後押しされ、久瀬が席に着く。俺の側を通った時、ちらつと横目で見られた気がした。

「転校生には悪いが、実力も兼ねてテストを受けてもらう。夏休みだからと言って、勉強を怠った奴はすぐ分かるからな」

生徒を脅しながらテスト用紙を配り始める。俺は何だか緊張した。テストにではなく、後ろの久瀬の気配に。何だか先程から見られているような気がしてならない。

前の席からテスト用紙が送られ、俺は平然を保とうと、一呼吸置いてから後ろを振り返る。待っていた久瀬と目が合った。

「ありがとう」

久瀬はにこやかに微笑むと、すぐに真剣な面持ちに変わった。何だ、結構真面目なタイプじゃないか、何を気にしているんだ。一応

テストだぞ、テスト。そう自分に言い聞かせ、机に向かった。

line 2・学校案内

五教科全てのテストを終え、俺は椅子に座ったまま伸びをした。テストは勉強していようが、していまいが緊張するな。ついでに欠伸をかました所で、後ろから「河村君」と声をかけられた。

「学校案内、お願いしてもいいかな」

久瀬が大きめのシオルダーバックに教科書を詰めながら尋ねる。そういえば先生にそんな事を言われていたのだった。テストですっかり忘れていた俺は「ああ、そうだった」と曖昧に返事をする。

「ごめん、もしかして用事があつたの？」

久瀬が悲しそうな顔をする。

「いや、ないない。それじゃ行こうか」

大きな瞳に長いまつ毛。サラサラとしたショートヘア。まるで猫みたいな奴だなと、一瞬軽視してから席を立つ。

「礼二！ちゃんと学校案内してやれよー」

クラスメートの野次を他所に、俺と久瀬は廊下に出た。廊下に出ても、皆物珍しそうに久瀬の姿を見る。それもそうだ。地元の連中からしたら、久瀬はまだ異質の存在、注目の的だった。当たり前と言われれば当たり前なのだが、随分と居心地が悪い。久瀬も緊張しているのか、低めの背を更に低くして縮こまったように歩いていた。

「まずは南校舎から見て回ろうか」

南校舎には職員室や理科室、音楽室など所謂移動教室で行く所が多い。とにかくまだ生徒が従来している北校舎から離れたかった。無言で歩く訳にもいかず、俺は適当に久瀬に話しかけた。

「久瀬は埼玉から来たんだよな？」

「うん、そうだよ」

「最初田舎だと思ってびっくりしなかったか？　ここ」

俺はそう言つて渡り廊下から裏山を見上げた。涼し気な山の緑のふもとには、みかん畑がこれみよがしに段々と連なっている。また歩いて十五分とかかる、普通列車しか止まらない最寄りの駅は最近ようやく自動改札が設置され、コンビニも近くに出来たばかりだった。

「そうかな。山も海も一望できて凄いと思うよ」

久瀬はそう言つて反対側に見える海沿いを指した。日光に照らされてキラキラと眩しく輝いているが、実際に近づくとゴミの掃き溜めが幾つも点在している。それを久瀬が知る余地もないが。

「久瀬はどの辺に引つ越して来たんだ？」

「うーんと首を傾げ、あっちの方と東を指す。勿論分かるはずもない。」

「電車通学か？」

「そう。M町から乗つて来たんだ」

「へえ、俺もM町から乗つてんだ。案外自宅も近いかな」

久瀬が仲間を見つけたように明るくなった。その様子に何だか照れ臭さを覚え、思わず顔を逸らす。今の、そんなに喜ぶ事だったか？

「ここが理科室だ。国語、数学、英語以外の教科は教室移動が多いかな」

「分かった。場所だけは把握しておかなくちゃ」久瀬はメモを取り出すと、簡単な地図を描き始めた。「ここが、理科室つと」

背を縮めてメモを取る様が、何だか小動物を連想させる。俺は誰もいないのをいい事に、久瀬に理科室に入るよう誘った。

「どうせならここで座って書けよ。何なら俺が黒板に描いてやろうか？」

そう言っただけで教卓に上がりチョークを取り出すと、大きな長方形を描く。

「河村君、歪んでるよ」

久瀬の笑い声を他所に、俺は思い出しながら校舎の地図をでかくと描いてやった。久瀬が一生懸命写す中、俺は四階の理科室から運動場を見渡す。陸上部のメンバーは、既に外周ランニングに出ってしまったらしく、一人マネージャーの及川が道具の準備をしていた。そう言えば、今日の放課後は絶対行くと及川に約束したのを思い出した。

「河村君って、何の部活に入っているの？」

写し終えたのか、いつの間にか久瀬が自分の隣に来ていた。間近

で見ると本当に色白く、まつ毛も人形みたいに長い。俺は思わずたじろいだ。

「俺は陸上部だ。久瀬は何も部活動していなかったんだろ？」

「うん、でもせっかくだから部活動しようかな」

「だったら陸上部に入れよ。お前、ちよっと腕細すぎるぞ」

そう言つて久瀬のはみ出た細い腕を掴む。その行為に驚いたのか、久瀬が顔を赤くする。俺も何だか悪いことをした気分になり、慌てて放した。

「悪い、びっくりさせたな」

「う、うん」久瀬が自分の細い腕を見つめる。「でも僕、走るの遅いよ」

「だから鍛えるんじゃないか。少しは筋肉付けとかなないと、女にモテないぞ」

俺はからかうように頭を撫で付けてやったが、久瀬は不快に振り払う。本人も少し気にしているようだった。

「河村君はいいよね。背も高いし、腕だつてごついし」

先程の行為への当て付けなのか、腕を労るように撫でる。確かに夏休みの品出しで重い荷物を運んだせいか、腕の筋肉も多少ついたと思う。しかし、その言い方は僻みではないか。久瀬の露骨な態度に眉をひそめた。

「誘つて悪かったな。まあ文化部もあるから色々見学してみたら？」

冗談の通じない久瀬に、正直付き合うのが面倒臭くなった。俺は

黒板に描いた図面を消して、理科室を後にする。

「待つてよ。まだ案内してもらってないよ」

シオルダーバッグを下げ、慌てて理科室から久瀬が出てきた。色々持ち帰る物が多いのか、ずるずると重そうに引きずっている。

面倒臭い奴だ。さつさと校舎案内を終わらせたかった俺は、久瀬のシオルダーバッグを無理矢理奪うと自分が背負った。

「何するの、自分で持てるからいいよ！」

「じゃあこっちを持ってくれ」

その代わりに自分の財布とファイルしか入っていない鞆を渡す。久瀬が不服そうに俺を見上げた。

「悪いが早目に案内するぞ。マネージャーに放課後の部活は絶対出るって言うてあったからな」

「そう……」

何を期待したのか、久瀬は少しショックを受けた様子だった。こんなもやし野郎に陸上は無理だな。そう決め付けると、素早く教室を案内する。職員室を通り過ぎた所で、野次が飛んできた。

「河村ーっ！ ついに彼女が出来たのかぁ？」

声のした方を振り返ると、隣のクラスのよく騒ぐ男子達からだった。俺は言っている意味が分からず、久瀬を見た。彼女？ ひよっとして久瀬の事を言っているのか。

「やったな、彼女が出来て！」

くすくすと久瀬の方を見て笑っている。この女顔を馬鹿にしているのか。

「いいだらーっ、お前らには指一本触れさせねー」

適当な返事を返すと、久瀬を庇うようにその場を立ち去った。久瀬は下を向き、またかと涙を堪えているようだった。

「あいつらの事は気にするな。最初だけだ、あんなの」

久瀬の様子からして、前の学校でもからかわれていたのは一目瞭然だった。女みたいに綺麗な容姿をした男。どちらとでも取れそうな中性的な身体に声。きつと前の学校でも色々あったに違いない。転校してきた理由も、そこにあるような気がした。しかし、あれこれ詮索するのはまだ早過ぎる。

俺は久瀬の小さな背中を軽く叩く。もし久瀬が女だったら、さっきの奴らも羨む美人に違いないと思った。

line 3・陸上部

校舎を一通り案内した所で、俺は久瀬を外へと連れ出した。

「悪いが、陸上部を少し見学していつてくれないか？」

「いいけど、どうして？」

「お前がいたら遅刻の理由が正当化出来るからだよ」

こつそり耳打ちすると、久瀬も「女子は怖いもんね」と言って同意してくれた。俺の遅刻に協力してくれそうだ。ついでに外で活動している運動部を紹介しながら歩いていると、水をくみに来た及川と出会った。

「あ！ 礼二遅い、何していたの？ もうみんなウォーミングアップは終わっちゃったわよ」

俺に文句を言ってから、隣にちょこんとすました久瀬の方を見る。

「初めまして、久瀬と申します」

そして礼儀正しく及川の前でも挨拶をした。

「実は今までこいつに校舎案内していて――」

「へえ、あなたが噂の転校生ね。中々可愛い子じゃない！」

俺の話を無視して一人で盛り上がり始める。これだから女って奴は。久瀬も苦笑いで返す。

「部活は何していたの？ 良かったら陸上部に入らない？」

及川が期待を込めた目で久瀬を見ている。久瀬はどうしようと、視線を俺の方に寄越した。

「そんなに詰め寄るなよ、及川。久瀬は今日、陸上部を見学しに来ただけだ」

「見学希望者なのね、了解。私達の部室はプールの横にあるプレハブの、右から二番目の所よ。荷物はその中に置いてもらって構わないから。ほら、あんたも早く着替えて部活に参加しなさいよ！」

そう言つて久瀬のショルダーバッグごと俺を押し退ける。おお、怖い怖い。俺はわざと慌てるふりをして、二人で部室目がけて走った。

「あのマナージャーさん、確かに怖いね」

久瀬が笑いながら振り返る。及川がまだこちらを睨んでいた。

「だろ？付き合わせて悪いな。もう適当に理由つけて、帰ってもらつていいから」

「分かった。少し見学したら、抜けさせてもらつよ」

はあはあと、息を漏らしながら答える。俺の走りについて来るのがやつとの様子だった。部室で予め置いてあつた青いジャージに素早く着替える。その間、久瀬が部室を眺めながら、こっそり俺の身体も眺めている事に気付いた。

もしかして自分の身体がひ弱な事を気にしているのか？俺は時折久瀬が見せる不思議な視線に戸惑いながらも着替えると、久瀬を連れて他の部員の所に駆け足で向かった。久瀬の顔を見ると、少し辛そうだ。

「遅いぞ、河村。お前は背が高いから、いないとすぐバレるんだぞ？」

部長の長谷川が背中を叩きながら歓迎する。

「すみません、遅くなりました。部長、こいつを見学させてもいいですか？」

久瀬が恥ずかしそうに俺の後ろに隠れた。

「いいよ。どうせ見学と言っても、みんな好き勝手に得意競技やっているだけだから、見飽きたら自由に帰ってもらいな」

「了解です。って事で、久瀬はその辺に座って、見飽きたら帰っていいから」

そうなの？ と笑いながら答える。そこに及川も戻って来たので、後はマネージャーに任せる事にした。

「じゃ、トラック十週行ってきます」

及川にタオルを預け、俺は二百メートルトラックを走り始めた。俺の得意競技は長距離走だった。この陸上部では俺が一番いいタイムを出し続けている。ふと久瀬がいた方に目をやると、及川と親しげに話し込んでいた。よく及川と話す気になるな。あいつもマネージャーの方が向いているんじゃないか。そんな事を思いながら、俺は今日のテストの復習をし始めた。

俺は走っている時、必ず今日の授業内容を振り返りながら走っている。それが俺の勉強法であり、家に帰ってまで勉強しない方法で

もあり、時間を有効活用した方法だった。無心で走るのも好きだが、考えて走るのも楽しい。そして授業を復習し終えたら、今度は妄想の旅に出かける。もし、俺に彼女が出来たら。もし、デートで映画館に行ったら。俺は頭の中でも常に走り回っていた。

俺は彼女が欲しかった。好きな人が欲しかった。恋をしたいと思っ
ているし、あわよくばセックスまでしたいと思っている。そう思
うのは俺だけじゃない筈だ。思春期真っ只中で彼女のいない男は皆
女に飢えている。キスもまだな俺は、エロ本とかそういう媒体では
なく、もつと生身に触れたエッチな事がしたいと思っていた。大学
生の兄貴には中学から付き合っている彼女がいるらしい。ずるいな
あ。友達にも彼女が出来、最大の難関であるセックスまでした奴も
いる。つまり童貞を卒業したのだ、羨ましい限りだ。

あまりに妄想が飛び過ぎると、下半身が反応してしまう。今日は
妄想が過ぎたなと反省の意を込めて、俺はもう一周余分に走った。

「一周多かったわよ。はい、お疲れ様」

俺の罪滅ぼしを見破った及川が、タオルとスポーツドリンクを差
し出す。久瀬の姿はもう見えなかった。

「久瀬は帰ったのか？」

「うん。久瀬君って、結構真面目な子ね。真剣に部活動に勤しんで
いるあんたの邪魔をしちゃ悪いから、先に帰るって。久瀬君、今日
は案内ありがとうって言っていたわ。じゃ、確かに伝えたから」

及川は他の部員にもタオルやスポーツドリンクを渡しに行ってし
まった。真剣に部活動に勤しんでいた？ 俺が？ さっきの頭の中
を見られるものなら見て欲しいぜ。

及川のジャージでも透けて見えるブラを横目で確認してから、俺

はスポーツドリンクを一気に飲み干した。及川は何点だろうか。容姿は普通だから平均ラインくらいか。

もし、俺が及川と付き合ったら。考えられなくもないが、そうなれば俺は絶対及川に振り回されるに決まっている。

「ほら、飲み終わったなら貰うわよ」

及川が勝手に人の手から空の紙コップを奪い取った。彼女と言うより、まるでおかんだな。俺は一人納得して、久瀬が無事に帰れたかどうか心配になった。

line 4・文化祭の出し物について

久瀬が転校してきて一ヶ月が経とうとしていた。流石に一ヶ月も経てばクラスの皆も久瀬の存在に馴染み、久瀬もこの学校生活に慣れた頃だった。

久瀬は真面目な生徒だった。宿題や教科書などを忘れる事はまずしなかったし、授業中当てられても、顔色一つ変えずに正解を述べる。物事に対しても順応らしく、男子にも女子にも卒なく話し、同じ真面目そうな友達と一緒に弁当を食べる。普通の高校生活を楽しんでいるように思えた。

真面目な久瀬に対し、どちらかと言うと不真面目な俺は、久瀬に近寄り難かった。それまで久瀬と話していない訳でもない。挨拶くらいはしたし、他愛もない日常会話もいくつかした。宿題で分からない所だっけを見せてもらった事もある。しかし、決定的に友達になつたのは、文化祭の出し物について決めた後の事だった。

G校では毎年十月末に文化祭が行われている。文化祭といっても費用や電機器具関係もあり、食べ物屋を出店出来るのは一番上の三年生のみと決まっていた。だから一年生と二年生はクラスで出し物を用意するのが相場となっている。

この日は朝からクラス中が文化祭の出し物の話でもちきりだった。黒板に赤のチョークで太く『文化祭の出し物について』と書かれているからだ。あの字は担任の字だ。朝のホームルームが始まるまでに、ある程度考えとけて事かよ。俺は学級委員長の自分にいささか面倒さを覚えながらも、席に着いていくつか黒板に書かれた名目をチェックする。ダンスやら仮装大会やら作品展やら。黒板の隅に

は関係の無いんこの落書きまでされていた。

「おい礼二、もう一度去年と同じ出し物をやろうぜ！」

「俺も礼二のダンス見てえな」

後ろから高橋と山本の二人がそう言っただけ俺の背中を叩いた。彼らはクラスの中でも一番騒がしい連中と言っても過言ではない。中学から一緒の俺はもう慣れているが、二人とも派手なシャツにだらしない学ランを着こなし、ワックスで固めた頭はつんと上を向いている。山本に至ってはパンツが見えるほど腰パンをしていた。

「おいおい、またあんな格好して踊んのかよ」

去年俺達のクラスでは、男子が全員女装してチアガールを演じたのだった。目立つというだけでセンターに抜擢された俺は、下手くそながらも一生懸命に舞い、パンチラまで披露させられたのを覚えている。まあ、あれはあれで面白かったが。

「流石に去年と同じ出し物は出来ないだろ」

「チアガール以外なら大丈夫だって。今年はいいつもいるのにさあ」

「あいつ？」

そう言われて指名されたのは久瀬美紀夫。

「久瀬、顔可愛いしちっさいからきつと似合うぜ。てか男なのが勿体無いよな？」

わはは、とつられて山本も笑う。

「せっかく女装にうってつけの男がいるんだ。な、礼二も久瀬の女

装姿、見てみたいだろ？」

確かに見てみたい。元々女顔の久瀬のことだ、その辺の女子より美人になるに違いなかった。俺は久瀬の後ろ姿を見つめながら想像力を働かせてみる……………結構タイプだ。

「そう言われると、確かに見てみたいが」

「ぜってえ美人だって、なあ！」

二人がくすくすと久瀬の背中を笑う。

「お前ら、そんな目で久瀬の事見ていたのかよ」

「ちげえよ、俺ホモじゃねーし。ただ面白そうだろ？ ついでに礼

二のポニール姿も見せてくれよ」

「でも、あれは超絶似合ってたよな！」

「ぎやははははっ！」

二人は爆笑しながら、他の男子にも説得に向かった。俺だって好きであんな格好したんじゃないよ。不貞腐りながらも、もう一度久瀬の方を見た。久瀬は自分が話題に上がっているとも知らずに、呑気に本を読んでいる。あいつに女装なんてさせたら駄目だ。ただでさえからかわれやすい容姿なのに、女装なんてさせたらそれこそ高橋や山本の思うつぼじゃないか。どうせ写真でも撮って、からかい続けるに違いない。

しかし俺の考えとは裏腹に、クラスの出し物は再び女装ものに決まりそうだった。

「河村、お前から何とか言ってやれ。もっとましな出し物を思いつかんのか」

担任も呆れてふんぞり返っている。仕方なく前に引つ張り出された俺は、面倒臭そうにチヨークを手にとった。

「女装は去年もやった、だから他の出し物にしようぜ。女子はいいが、男子でもそういうのが嫌な奴だっている」

「何だよ礼二、それって自分が女装したくないだけだろ」

「そーだ、そーだ！」

野次を飛ばしたのは勿論高橋と山本。このままチヨークを投げつけてやるうか。俺は今しがた飛ばされた野次に応答した。

「ああ、俺はやりたくない。もうパンチラで笑われるのはごめんだ。それに一回うけたからといって、もう一度うけるとも限らない」

助け舟を出すかのように、副学級委員長の遠藤薫が挙手をした。綺麗な黒いストレートヘアを揺らしながら、静かに立ち上がる。

「私も他の出し物をやった方がいいと思う。女装ものは、きっと他のクラスと被って却下されるわ」

そう述べるなり、また静かに席に着く。遠藤とは中学から一緒だが、あまり話したことはなかった。それでも俺が困っていると、静かに手を差し伸べてくれる。まあ、自分が副学級委員長だからって理由だけかもしれないが。遠藤は真面目な女子で、容姿もそこそこ可愛いので普通に好きだった。

「遠藤の言うとおりだ、去年のマネをしてくる所だっ出てくる。もう一度ちゃんと決めようぜ」

「ちえーっ、せっかく久瀬の女装姿が見られると思ったのになあ」

くすくすと山本が笑い、それにつられて他の男子数名も笑った。全く、そんなくだらない事させるかよ。久瀬を見ると悲しそうに俯き、この状況に必死で堪えているようだった。俺はそんな久瀬に背を向けると、黒板にもう一度出し物案を書き始めた。

line 5 . ゲームコレクター

結局文化祭の出し物はタイルアートに決まった。展示なら文化祭当日に遊び放題だし、タイルなので個人の出来る範囲で完成させることが出来る。高校二年生ともなれば塾に通っている奴も多く、もし出し物が歌や踊りになれば勉強時間まで練習に回さなくてはならない。展示は無難な選択だったといえよう。

その日の掃除当番中、俺は先程から久瀬の姿を見かけない事に気付いた。校舎外の溝周りを掃除していたが、ゴミ捨てに行つたにしても遅すぎる。もしかして、今朝の一件で高橋や山本に絡まれてはいやしないか。ありえなくもない。

心配になった俺はスコップを放り出して久瀬を探した。一応肩書きのみではあるが、俺は学級委員長だ。万一の事があつてはまずい。注意深く辺りを確認しながら校舎裏まで行くと、何と久瀬は涼むように木陰に腰をかけ、携帯をいじくっていた。

何だよあいつ、掃除サボってただけかよ。俺は安堵しながらも怒りを露わにして近づいた。学校での携帯所持は認められているが、それを表立って使用してはならない。こんな姿を見られたら、即取り上げられること間違いなしだった。

「おい久瀬、何やってんだよ！」

サボっている久瀬に文句をいってやろうと声を荒げたが、俺の姿を見るなり久瀬は嬉しそうに顔を上げた。そして手招きする。

「河村君、見て見て！ やつとこいつが手に入つたんだ」

久瀬がそう言って見せたのは、今流行りの携帯ゲーム『ルナイト・

ハント』。クラスの男子達の間でも流行っており、授業中にこそそそと先生に隠れて遊んでいる奴もいる。そこに出るレアモンスターの画面だった。

「すげえ！ これ出現率そうとう低いんだろ？ どうやって捕まえたんだよ」

思わず興奮して覗き込む。実は俺も流行りに乗って『ルナイト・ハント』で遊ぶ内の一人だった。自分でも何匹かレアモンスターを捕まえたが、久瀬のはその比じゃない。そうとうやり込まないと出現しないモンスターの類だった。

「こいつを捕まえるのに、三日はかかったよ。これで図鑑がコンプリート出来た」

「えっ！ お前全種類捕まえたの？」

「いくつかは交換してもらったけど、大体は」嬉しそうにピースサインを出す。「こいつ、出現時間かなり限られているから、どうしてもこの掃除時間中じゃなきゃ駄目だったんだ」

「何だよ、俺てつきりクラスの奴に絡まれたのかと心配したぜ」

久瀬は一瞬不思議そうな顔をしたが、やがて今朝の事かと行き着き、黙って俯く。

「あれくらい、平気だよ。河村君心配し過ぎだった」

「そ、そうか。悪い、思い出させて」

「ううん、でもありがとう」

照れくさそうにはにかむ。この時になって、俺は久瀬の趣味がゲームだったのを思い出した。

「お前、よっぽどゲーム好きなのな」

「うん、家に大体のハード機種は揃えてあるし、ソフトも色々あるよ」

「へえ、だったらあの話題のゲームソフトもあるのか？」

「ああ、グレイスでしょ？ 勿論あるよ」

グレイスとは、最近出た新作RPGソフトの中でも絶大な売れ行きで、今ほどのゲーム屋に行っても完売状態の代物だった。

「マジで！ いいなあ、俺もハード機持っていたら絶対買ったのに！」

俺は悔しそうに拳を握った。家にある唯一のゲーム機は、もう十年ほど前の代物だ。持っているゲームは相当やりこんでしまったし、もうソフト自体が発売されていない機種だった。金に余裕のない家では当然ゲーム機を買ってもらえる訳も無く、今では携帯ゲームが、唯一のゲーム機と言っても過言ではない。

「だったら家来る？ 色々ソフトも揃っているし、やりたいのがあったら貸すよ」

「本当か？ よっしゃあ！」

こうして俺は新作ゲームのやりたさに、部活をあつさり仮病でリタイヤしてしまった。及川や他の陸上部員を避けての下校に成功すると、俺達は同じM町の駅で降りた。M町の駅は快速列車も停まる広い駅で、無駄に長い階段を急いで下りる。

「久瀬、お前の家って駅から近いのか？」

駐輪場に来たものの、自分の自転車をとって来ない久瀬が「そう

だよ」と行つて笑つた。

「目の前の大きい道路を曲がつた所が、家だよ」

少しずつ涼しくなつてきた夕暮れ時の中、俺と久瀬は自転車を挟んで一緒に歩く。自宅とは反対方面になるが、この程度なら帰宅になんの差し支えもない。毎日でも通えそうな距離だ。

「自転車はその辺にとめてもらつて大丈夫だから。さ、上がつて」

久瀬に案内されたのは、俺の家の二倍はありそうな立派な平屋だった。手入れの行き届いた庭もあり、久瀬はぼんぼんだつたのかと驚かされる。

「お前ん家、すげーなあ。何か手土産くらい持つてくるべきだったか？」

俺は慌ててタオルを取り出すと、顔や手に浮かんでいた汗を拭いて回つた。そんなの要らないよ、と久瀬が静かにスリッパを置く。正直スリッパなんて滅多に履かない俺は、戸惑いながらも久瀬の家に上がった。家からは、奥ゆかしい木の香りが立ち込めており、静かすぎるほど物音一つ聞こえない。

「元々お母さんがM町出身で、ここは母方のお爺ちゃんの家なんだ」久瀬がリビングらしき襖を覗く。「まだ二人とも帰ってきてないみたい。俺の部屋はこっち、一番奥なんだ」

久瀬が平然と先に廊下を歩く。廊下からは外の庭が一望でき、何故かボウリングも出来そうな長さではないか。俺は何だかとても無い家に来てしまったと後悔し始めていた。

予想通り久瀬の部屋自体も広く、ベッドに机、大きな本棚にはぎつしりと詰まった参考書と攻略本。極めつけは三十二型テレビとその壁一面に飾られたゲームソフトの数だった。軽く千本くらいあるのではないか。

「すつげえ……俺の家じゃ考えられねえよ」

床に荷物を置くと、俺は興奮を抑えきれずにゲームが収集されている棚に向かった。かなり古いファミコンのゲームから、最新のゲームまで。各々ジャンルごとに集約されている。

なんて奴だ。これは単にゲーム好きと言っか、コレクター魂まで入っているではないか。目についた赤のパッケージを取り出す。1989年に発売された、スーパーマリオシリーズの数量限定パッケージだった。俺は何だか恐ろしくなって、それを慎重に棚に戻した。

「元々お父さんが趣味で集めていたんだ。今ではすっかり僕が引き継いでいるけどね」

「へえ、親父さんも、こっちに來ているのか？」

「うつん、お父さんは埼玉にいるよ。流石に仕事は簡単に辞められないからね」

お父さんは埼玉にいて、久瀬とお母さんは実家のこの家に来ている。……もしかして離婚か、別居か。どちらにせよ軽々しく他人が聞いている問題ではない。俺が次の言葉を探していると、ゲーム機の配線を繋ぎ終えた久瀬が顔を上げた。

「何からやる？ グレイスでいいかな？」

「あ……ああ、そうだな」

割とそっけない表情の久瀬に戸惑いながらも、俺はもう一度ゲームソフトが集約されている棚を見上げた。よくもまあ、これだけ集められる金とスペースがあったものだ。俺は自分の部屋を思い返すだけでも、恥ずかしくてたまらなかった。

どこから出てきたのか、久瀬がテレビから一メートルほど離れた場所にクッションを置く。ここに座れと言いたげにクッションを叩いた。

「ごめん、何だか自慢みたいだね……気分悪くさせちゃってごめんね」

本当に申し訳なさそうに久瀬が謝る。

「いやいや、自慢してもいいだろ、これは。俺もこんなに遊びつくせるかなあ」

冗談で言っただけだが、久瀬から「毎日来てくれたら、卒業までにはやれるよ」と意気込まれた。いやいや、毎日遊びに来られる距離だが、實際来る訳にもいかないだろ。俺は曖昧に返事をして笑った。

line 6・ベッドの下秘密

しばらく俺達はゲームをして楽しんだ。基本的に俺がプレイして横から久瀬がアドバイスを出す。久瀬は既にこのゲームをクリアしていた。

「ここにあるゲーム、もしかして全部クリアしたのか？」

「まさか！」久瀬が自分で用意したお菓子とジュースをつまみながら言う。「自分が面白そうだと思ったゲームしかクリアしてないよ」
「だ……だよなあ」

俺は再び視線をテレビに戻した。テレビの横には専用のスピーカーが備え付けてあり、ゲーム音がクリアに反響される。何だこの素晴らしいゲームプレイ環境は。ここまでのゲーム好きとはよっぽどだな。俺がもう一度隣の久瀬に目をやると、ちょうど席を立つ所だった。

「ちょっとトイレに行ってくるね。ついでにトイレは玄関の奥にあるから」

「わかった、大きい方か？」

「違う、小さい方！」

久瀬がむっとして部屋から出て行った。どうやら下ネタは嫌いらしい。俺は久瀬の態度に苦笑するとポーズボタンを押し、ゆっくりと立ち上がった。

「男の部屋と言ったらず、エロ本探したよな」

あんな真面目な久瀬でも男だ。エロ本やDVDの一つや二つ、隠

し持っているはず。すまし顔の真面目な美少年、久瀬美紀夫の正体を暴いてやろうと、俺はまずベッドに近き下を覗いた。衣類の入っている箱をずらすと、奥から明らかに女物と思われる、ピンクの花柄小箱が現れた。

「何だ、あれ？」

引っ張り出すと紙製で靴箱程の大きさ。俺は興味本位でその箱を開けると、中にはブラジャーとパンティーが四組、柄ごとに収納されている。

「こ……これはっ！」

俺は中から白いレースのついたブラジャーを取り出す。真新しそうなブラジャーだった。ブラジャーの構造に興味はあったが、実際に取って調べた事はなかった。流石に母親のブラジャーを手にする気にはなれない……なるほど、裏で詰襟みたいに引っ掛けていたのか。

「河村君っ！？ 何しているの！」

試しに胸にあてがった所で久瀬が戻ってきた。赤面した顔で俺を睨んでいる。

「いやっ、違うんだ、俺はエロ本でも探そつかと……」

しっかりとブラジャーを掴んだまま弁解する。久瀬が慌てて箱ごとひったくった。

「酷いよ、河村君！ 酷いよ……」

そして今にも泣きそうな顔を歪ませた。

「そんなに恥ずかしがるなよ、お前も男なんだから気にするな。誰だってブラジャーの構造を一度は知りたいと思うさ」

何という慰めの言葉。俺は慌てて次の言葉を繕う。

「ほら、今は雑誌の付録でも下着が付いてくる時代だろ？ 久瀬がブラジャーやパンティーを持っていようがおかしくないじゃないか」

久瀬が真っ赤な顔をして俯く。俺はもう次の言葉が見つからず、手持ち無沙汰のようにブラジャーを振り回した。

「でも河村君……引くでしょ？ 僕が女物の下着を持っているなんて」

「まさか、むしろ男として正常だろ。いつも真面目な姿しか見せないからさ、俺は久瀬のこんな一面を知れて嬉しいよ」

頭をわしゃわしゃと撫で付けてやると、物凄い勢いで払いのけられた。

「だからって、勝手に人の部屋を探索していい訳ないじゃないかっ！」「返せと言わんばかりに俺からブラジャーを奪い取ると、二つに折り畳んで箱にしまう。「もう最悪っ……俺、明日から学校に行けないよ」

「何で？」

「何でって、河村君！ この事皆に言いふらすつもりなんだろう？ 違うの！？」

血相を抱えて怒鳴り散らす。一先ここは謝った方がいい。どう考えたってこれは100%俺が悪い。

「言いふらすわけないだろ。下着を隠し持っていたなんて、逆に尊敬したいくらいだぜ」名残惜しそうに箱を撫でた。「勝手に詮索したのは悪かった、悪かったよ。俺は久瀬がエロ本持っていたら、ついでにそいつも借りられたらなと思ったただけだ」

「エロ本エロ本って、河村君、そういうのが好きなの？」

「好きに決まっているだろ？ 健全な男子ならばな」

堂々と白状する俺に久瀬は呆れた。

「だったら自分で買えばいいじゃないか」

「買っても置いておく場所がないんだよ、弟と同部屋だし。友達から借りるのが手っ取り早いんだ」俺は久瀬の部屋を見渡した。「久瀬の部屋みたいに下着を隠すスペースすらないよ」

久瀬は俺の言葉に納得したのか、してないのか曖昧な表情で首を傾げる。ところで久瀬の持っているブラジャーは一体誰の物だろう。

「久瀬、そのブラジャー、何処から調達したんだよ」

経緯を思い返したのか、久瀬はまた顔を赤くした。

「そんなのどうだっていいだろ、言っておくけど、下着泥棒なんてしてないからな！」

この状況でまだ隠し事をするらしい。俺はにやりと笑いかけると、久瀬に飛びついた。

「この際正直に言っちゃえよ。おら、白状しろ！」

そう言って久瀬の首を腕で締め付ける。

「や、やめてっ……分かった、分かったから言うよ！」ギブギブと床を叩く。「引越しの時に、姉が捨てたのを拾ったんだ」

俺が手を放すと、久瀬がわざとらしく咳き込んだ。って事はあのブラジャーは久瀬のお姉さんの物だったのか。久瀬の綺麗な顔から姉の像を思い浮かべる。ちえ、匂いでも嗅いでおけば良かった。

「なんだ、久瀬も結構変態なんだな」

「エロ本探した河村君に言われたくないけどね」

「何だと？」

「何だよ」

俺と久瀬はしばらく睨み合った。そして互いに吹出し、笑い出す。

「あはは、河村君っていつも友達の部屋でエロ本探しているんだ！」

「へへっ、まさか久瀬にそんな趣味があるなんて思いもしなかったぜ」

趣味という言葉が引つかかったのか、久瀬が慌てて確認する。

「まさか河村君、ベッドの下以外にも詮索したんじゃないだろうね？」

「あ、ああ。俺が調べたのはベッドの下だけだ。本当だ」

久瀬の表情が陰しくなった。何だ？ まだ知られたくない物が、この部屋に隠されているとでも言うのか。

「なら、もういいよ。悪いけどエロ本は諦めて。僕、全部パソコンで見ているから」

指された机の上には、大型のノートパソコンが置かれている。パソコンなんて代物を持ち合わせていない俺はがっくりした。

「何だよ、久瀬は使えねえなあ」

「それは悪かったね。エロゲーも中々面白いのになあ」

ぶつぶつ文句を言いながら、花柄の箱を奥にしまい入れる。俺はこの際久瀬に男同士の話でもしてみようと思った。

「なあ久瀬……お前キスした事、あるか？」

なんて事をいきなり聞くのだと、久瀬が耳まで真っ赤にして振り向いた。

「えっ、もしかして河村君はあるの？」

逆に聞き返されて俺は恥ずかしさで顔を赤くする。あるわけ無いだろ、まだ彼女すら出来た事ないのに。

「ねえよ、無いから聞いたんだよ」

「僕だって無いよ。彼女すらいたことないし」

残念そうに頂垂れる。何だ、男のポジショニングとしては久瀬と同類か。俺は仲間を見つけて安心した。

「そもそも久瀬は女に興味あるのか？」

久瀬の女顔をちやかしたつもりだったが、逆に怒らせてしまったようだ。

「失礼な、僕だって好きな人くらい——」

口に出してから、しまったと恥ずかしそうに目を伏せる。好きな人？ 久瀬に？ 俺は思わぬ情報に興味を抱いた。

「何だよ、久瀬。もう好きな人見つけていたのか？」俺は久瀬が逃げないように肩に腕を回した。「ほれ、この学級委員長に言ってみ？」

「学級委員長は関係ないでしょ！」

久瀬が首だけは締められまいと両手でカバーする。

「じゃあ掃除さぼった事、先生にチクるぞ」

「そんな脅しには乗らないね」

「生意気な奴っ！」

久瀬の手が首元にあるのをいいことに、俺は脇腹をくすぐってやる。弟と喧嘩した時も俺は相手の脇腹目がけてくすぐり攻撃をかますのだった。久瀬はそこが弱点だったかのように床に笑い転げる。

「あははっ、やめっ……やめてってば！」

ひーひーと涙を流しながら許しを乞う。どうだ、まいったかと俺は勝ち誇った笑みで手を放した。

「くすぐりは反則だよ、酷いなあ」蹴飛ばしたクッションに座り直

す。「そういう河村君はいないの？　好きな人」

好きな人？　俺は今まで出会った女子を思い返した。好きになった事が無いわけではない。現に俺の初恋は保育園の先生とかなりのマセガキだった。ただ、今は思い当たる人物が浮かばない。向こうから責め寄ってきたならば、よっぽどの不細工ではない限り承諾してしまうだろう。

「今はいないかな。大体俺が好きになった人は、もう彼氏がいたりするんだよなあ」

昨年のクラスを思い出す。当時の俺はクラス一可愛いと囁かれた村田さんが好きだった。背が低い割にスレンダーで、セミロングのふわふわした髪がとても似合う女の子。何とか話したいと俺がやきもきしている内に、年上の大学生と付き合っているという噂を耳にした。そこで俺の熱は冷めた。村田さんはもう誰かの所有物だったのだ。

「河村君のタイプって、どんな子なの？」

今度は久瀬が興味津々に尋ねる。俺はそうだなあと村田さんの事を告げると、いかにもつまらなさそうな顔をした。

「河村君って、結構メンクイなんだね」

「悪かったなメンクイで。でも顔も重要だろ？」

俺は久瀬の用意してくれたオレンジジュースを飲む。

「じゃあ及川さんはどうなの？」

「！……げほっげほっ！」

オレンジジュースが変な所に入り、思わず涙目になる。吹き出さなくて良かった。

「何で及川が出てくるんだよっ！ あいつはただの陸上部のマナージャーだろ」

「そうなの？ てっきりそういう間柄だと思っていただけ」

「よせよ、及川はそういう目で見れねえよ」

「ふーん」

久瀬が安堵したように頷く。何だ？ こいつもしかして及川の事が好きなのか？

「お前、ひょっとして及川の事が好きなのか？」

あの気取りおかつぱ少女を思い浮かべる。今日は確かピンクだったな。

「……さあ、それはどうかな？」

久瀬が意地悪く歯を剥き出して笑う。わからない、どちらとでも取れそうな反応だった。

「ちえーっ、勿体振りやがって」

俺は再びコントローラーを握ると、ゲームを再開し始めた。しばらく隣の久瀬から視線を感じたが、やがて画面の方へ切り替えられた。

line7・ブレザー派

「今日はありがとな。グレイス、やっぱりすげえ面白いな！」

玄関で興奮を抑えながら靴を履く。俺はやっと一ステージのボスを倒して、セーブをしてきた所だった。

「でしょ？僕なんか三日でクリアしちゃったんだから」

薄暗くなつた玄関先で笑う。学ランでも着ていないと、男か女か区別もつきそうになかった。

「三日で？俺も家にあつたらそれくらいでクリアできそうだなあ」

名残惜しそうに廊下奥の部屋を見つめる。俺の気持ちを悟つたのか、久瀬がぽんと背中を押した。

「また来ればいいよ。河村君ならいつでも歓迎するし。……あ、でも部屋を詮索するのだけは止めてよね」

「わかったよ。久瀬の部屋で下着を発見したのは、俺とお前だけの秘密だ。お前だけ損したから、今度俺の持っている凄い奴でも貸してやるよ」

「凄い奴？」

「いわゆる無修正って奴だ」

「うわっ、河村君のドスケベ！」

久瀬が笑いながら遠ざかった。

「ドスケベで結構！遅くまでお邪魔して悪かったな」

俺は玄関脇にある置き時計を確認した。もう八時過ぎだ。

「ううん、本当にまた来てよ。引っ越してきたばかりだから、友達とゲームで白熱したのなんて久しぶり。今日は嬉しかった」

久瀬の笑顔に俺は照れくさくなりながらも、また遊びに来ると約束した。

「じゃあな、久瀬。また明日学校で」

「うん、河村君もまた明日ね」

「もう礼二でいいよ。みなそう呼んでるしな」

「……わかった。じゃあ僕の事も下の名前で読んでもらっていいかな？」

久瀬が恥ずかしそうに告げる。下の名前？ 確か美紀夫だったよな。

「美紀夫……でいいのか？」

「うん、ありがとう礼二君」

「ああ。じゃあな、美紀夫」

みきおみきお。俺は忘れないように連呼しながら自転車をまたいだ。変な奴。男に下の名前で呼ばれて嬉しいものなのか？ 俺は首を傾げながら自宅へと急いだ。

この日を境に、俺は美紀夫の家に遊びに行くようになった。部活がない日や土日の部活帰りに寄り、一緒にゲームをする。ゲームを

している美紀夫はとても楽しそうだった。男兄弟のいない美紀夫にとって、俺はその代わりなのだろう。こうして気兼ねなく一緒に遊べる友人は必要に違いない。

少し心配していた文化祭も無事に終わり、その頃になると俺達は自然と一緒に登校する仲になった。

「礼二君、今日がテスト最終日だからって、気を抜いちゃ駄目だよ」

美紀夫が電車の中で英語の教科書を手に説教する。きつと今欠伸をしたから怒られたのだろう。

今日は中間テストの最終日。季節は十一月を迎え、みな夏服から冬服に衣替えを完了していた。我が校の生徒が車両を占領する中、俺はちらつと隣の女子のグループを覗いた。男子は学ランであり見栄えがないが、女子は紺のブレザーと初々しい。俺はセーラー服より、ブレザー派だった。

「礼二君、聞いているの？もうすぐ下りるよ」

「なあ美紀夫、お前ブレザー派？それともセーラー派？」

美紀夫がまたかと眉をひそめる。

「礼二君の頭の中って、いつもそんな事考えているの？勿論僕はセーラー派だけど」

文句を垂れながらも、美紀夫はきちんと質問に答える。

「何だ美紀夫、お前ブレザーの良さが分からん男だな」

特に真冬のブレザーからはみ出る、黒や紺のセーターのラインに俺は非常に惹かれるのだった。袖から少し見えるセーターの裾も、

また魅力的だ。

「わからなくても結構　！」美紀夫が先に電車から降りた。「もう置いてっちゃうよ」

「待てって、美紀夫」

美紀夫は背が低いので集団の群れの中に簡単に溶けこんでしまう。以前俺が見失った時も、美紀夫をかなり怒らせてしまったのだ。

「待っているよ。また見失って先に行かれても嫌だしね」

不貞腐れたように呟く。美紀夫は結構生意気で、嫌味ったらしい所がある。物事を引きずりやすいタイプらしく、顔に似合わず結構しつこい。ゲームでもその性格っぷりが露になっていた。

「あの時は悪かったって。それより今日の帰り、お前の家に行ってもいいか？午前中でテストも終わるし、今日は部活もない。な、いいだろ？」

美紀夫が困った顔をした。

「ごめん、今日はどうしても外せない用事があるんだ。だからまた今度でいいかな？」

美紀夫の家を断られたのはこれが初めてだった。俺はがっくりと項垂れる。

「ちえ、分かったよ。デートとか抜かすんじゃないだろうな？」

「そんなんじゃないって。ただゲームを買いに行くだけだよ」

「なんだ、じゃあ仕方ないな」

美紀夫のゲーム魂には敵わないのであっさり引き下がる。俺は美紀夫の事が割りと好きだった。気が許せる相手というか、美紀夫が俺に合わせてくれるというか、とにかく一緒にいると楽しい。おまけに美紀夫の家でゲームも出来る。お菓子も食べられる。

「本当にごめんね、早く帰って来たらメールするから」

「いいって、いいって。そのかわり美紀夫がクリアしたら俺にもやらせるよ」

「うん、勿論やつてもらうよ！」

こうして今朝も俺達はくだらない会話をしながら登校する。美紀夫の奴、何だかそわそわしていたが、きつとゲームをしたくてたまらないのだろう。そんなオーラが全身から滲み出ていた。可愛い奴だ。

弟……そう、弟だ。美紀夫とは弟の様な感覚なのだ。背も低いし、童顔と言ったら失礼だが、きつとそうに違いない。俺は美紀夫の楽しそうな背中を確認すると、あまり勉強してこなかったテストに挑んだ。

line 8・美紀夫の分身、みお

テストも終り、部活も美紀夫の家に遊びに行く予定もなくなった俺は、一人M町とは反対方面の電車に乗り込んだ。美紀夫に触発され、俺も中古のゲームショップで何か買おうと思ったのだ。何て単純なのだろう。

「お、新刊も出ているな」

書店で漫画を何冊か買い、ついでに古本屋で立ち読みしてからゲームを買う。合計三千円程の買い物。スーパーの時給が八百円だから、四時間ほどの労働賃金がこれで消えていった事になる。

「ちえ、もつと遊ぶ金が欲しいぜ」

今頃美紀夫は金の出し惜しみすることなく、新作ゲームを買っているに違いない。一人駅の切符券売機で軽くなった財布を覗き、なんだか物悲しくなった。何だよ、ぼんぼんの美紀夫と比べたつてしょうがないじゃないか。

午後四時十五分発の快速特急に急いで乗り込む。この時間は比較的空いている時間帯だと踏んでいたが、どうやらそうではないらしい。俺は前の車両に移動しつつ空いている席を探す。M町まで二十分程だが、いろいろ歩き回ったので少し座りたい。そんな心情を悟られたのか、一人の人物と目が合った。列車の構造上、仕方なく進行方向とは逆向きに座っている。

「あれ？ 美紀夫じゃないか」

前の座席で目元から上の部分しか見えていないが、間違いなく美

紀夫だ。なんだ、美紀夫の奴もこっちに来ていたのか。おまけに美紀夫の隣の席はまだ空いている。

ラッキー、美紀夫の隣に座らせてもらおう。俺は他の人に席を取られまいと慌てて声をかけた。

「美紀夫！ お前もこっちに来ていたなんて奇遇……」

すぐ側の通路まで来て、俺は美紀夫の髪の長さに目を疑った。前髪と同じくまっすぐに、綺麗な黒のロングヘア。薄手のグレーのジャケットに、秋らしい茶色の小綺麗なロングスカートをはいている。ジャケットから覗く白のブラウスからは、胸の膨らみが確認出来た。

女だ。美紀夫の顔をした女性が座っている。俺も驚いたが、話しかけられた女性も当然驚く。

「あ……す、すみませんっ！ 俺……」

俺は困惑してどうしたらいいのかわからなくなった。美紀夫だが、美紀夫じゃない人が座っている。どういう事だ？ 俺があたふたしながら通路に突っ立っていると、女性は俺の仕草が可笑しかったのか、笑い出した。

「もしかして美紀夫のお友達？」 女性はわざわざ席を立つと、窓際の方へ座りなおした。「私はみお。美紀夫の双子の姉です」

「ふ、双子！？」

電車が発車したので、とりあえずみおの隣に腰をかけた。俺が隣に来た途端、みおの表情が強ばったので、つられて俺も緊張する。隣のみおからは、何かつけているのか花のようなとても良い匂いが

した。

「ごめんね、なんだか紛らわしくて」

みおが申し訳なさそうに、黒のバッグを抱きしめた。

「いえいえ、そんな事ないですっ！」

俺も全力で否定する。美紀夫が双子だったとは初耳だ。俺はじつくりと美紀夫にそっくりなみおの顔を見た。長いまつげはマスカラでも付けているのか、美紀夫よりボリューミーで、くるくるしている。うつすら化粧も施しているらしく、頬がファンデーションか何かでキラキラしていた。少しぶつくらとした唇もいやらしく輝き、俺は思わず生唾を飲んだ。

「美紀夫にこんな綺麗なお姉さんがいたなんて……知らなかったです」

ふふ、と少し照れくさそうにみおは微笑んだ。

「美紀夫は私の事、少し毛嫌いしているから。顔が同じ事にコンプレクを抱いているみたいなのよ」

美紀夫と同じ顔。だが、ワントーン上の可憐な声をしたこの人からは美紀夫を感じられない。美紀夫のもう一人の分身、みおなのだ。男女の双子でもここまで似るものなのかと、俺は驚きを隠せずにした。

「いや……それにしてもよく似ていますね」

美紀夫の女バージョンがいたら、さぞ可愛いだろうと思った事がある。美紀夫の女装姿さえ想像したこともあった。しかし、まさか実在していたとは。前に座っているスーツの中年男性が、先程から意味深くみおの顔を伺っている。それ程までにみおが可憐だということのか。

「そうなのよ。中学まではよく間違えられていたから、気にしないで」

そう言つて長い髪の毛を手で弄る。その仕草に俺はドキつとして目を逸らした。おいおい、美紀夫の女バージョンなんて反則じゃないか。手汗を握りながら、俺はチラツとみおの胸元を見た。標準のＣカップくらいだろうか。ふと美紀夫の部屋で見つけたブラジャーの事を思い出した。確かあのブラジャーはＣの７０だったはず。そうか、あのブラジャーはこの人のだったのか！ 思わず下半身が反応しそうになったので、俺は慌てて漫画の入った袋を抱き寄せた。

「俺、よく美紀夫の家に遊びに行きますけど、一度も会った事ないですよ？」

そうなのだ。美紀夫の家に一番出入りしている筈の俺ですら、会った事がなかった。

「私、今女子高の寮に住んでいるから。美紀夫とは違う学校に行つたのよ」

「そうだったんですか。美紀夫も早く教えてくれればよかったのになあ」

こんなに可愛い双子の姉を隠していたなんて。美紀夫の奴、明日問い詰めてやる。

「あなた、美紀夫と凄く仲がいいのね。もしかして礼二君かしら」
「えっ！ 俺の事知っているんですか？」

心臓が縮み上がる程驚いた。冷や汗が頬をつたう。どう転んでも美紀夫が俺の事良く言っている筈がなかった。

「ええ、一番遊ぶゲーム仲間だっけ聞いていたわ」

「そ……そうですね」

「あとスケベだっけ」

「スケっ……！」

確かにその通りなのだが、初対面の女性にそう思われていたのは心外だ。

「お、男はみんなスケベなんですよ。現に美紀夫だっけ……」

美紀夫だっけあなたのブラジャーやパンティーを盗んでいる。そう出そうになった言葉を慌てて飲み込んだ。この事は絶対に知らない方がいい。

「美紀夫がどうかしたの？」

「あ……えと、あいつもかなりマニアックというか何というか」

駄目だ、墓穴を掘ってどうする。

「へえ。男の子って楽しそうね」

みおは俺の心情を悟ってか、とぼけた様に視線を逸らした。

「そ、そうですね、割と。あははは」

俺も苦笑いをして話を逸らそうとする。

「……………」

「……………」

そしてお互いに沈黙してしまった。やがてみおは俺の話し相手に飽きたのか、窓の外を眺め始めた。まずい、何か話題を提供しなくては。

「み、みおさんも、埼玉から引越して来たんですよね？」

「ええ、そうよ」

「だったらここ、田舎すぎてつまらないですか？」

窓から見える景色だって、殆どが田んぼだった。あれ？ 前にも同じような質問を美紀夫にもしたような気がする。

「そう？ 海が見えるなんて素敵だと思うけど」

そう言ってみおが遠くを指した。沈む夕日を歓迎するかのように、水面がキラキラと反射していて眩しい。

「海、好きなんですか？」

「見るのはね。私、泳げないから」

恥ずかしそうに照れ笑いをする。やっぱり可愛い。可愛すぎる。俺のクラスの女子や及川だってこの子には敵わないと思った。それ程までにみおが魅力的に見えたのだ。

「降りる駅、ここじゃない？」

みおが不思議そうに俺の顔を覗き込んだ。現実に戻された俺は慌てて荷物を手に席を立つ。

「もう着いたのか。隣、ありがとうございました」
「いえいえ。美紀夫によろしくね」

俺が電車から降りた後も、みおは窓越しに手を振っていてくれた。俺も慌てて振り返す。それを断ち切るかのように電車は予定時刻に出発した。俺は電車が見えなくなるまで、手を振り続けた。これが俺とみおとの、最初の出会いだった。

line 9・恋焦がれる

帰り道、俺は自転車にまたがるとゆつくりとペダルを踏み付ける。そしてのろのろと川沿いの道を進んだ。

「みおさん……」

秋風に紛れて彼女の名を呟く。まさか美紀夫が双子だったなんて。おまけにあんな可愛らしい人だなんて。馬鹿らしいかもしれないが、運命だと思った。美紀夫が俺のクラスに転校してきた事、そして仲良くゲームで遊ぶようになった事、今日偶然にも乗り込んだ電車でおに出会ったのも運命のように感じられた。そう関連付けてしまふ事で、俺は顔がにやけるのを止めなかった。

「礼二兄ちゃん、何かあったの？ 随分顔がにやけているけど」

自分の部屋に入るなり中学三年生の弟、考二が俺の顔を見て鋭く察した。孝二は兄弟の中でも中間ポジションを保ち、上と下双方の態度に対応してくる。人の顔色を伺うタイプだった。それにしても俺は顔に出やすいタイプなのか？ 俺は頬を当てながら「何でもねえよ」と鞆を置いた。

「勉強中だったか。悪いな、邪魔して」

「うっん。もうじき晩ご飯だからそろそろ切り上げようと思っ
たし、丁度いいよ」

そう言いながらも孝二は机の上から辞書を取り出し、パラパラと捲り出す。これだから自分の部屋は居心地が悪い。真面目に勉強に励まない俺への当て付けかのように思え、一先携帯電話を取り出す

と、弟の邪魔にならないよう静かに退散した。すると廊下で小学四年生の弟と三年生の妹が、俺の手に使っていた携帯電話に鋭く目を付けた。

「あ！ 礼ちゃんがまた隠れてゲームしようとしてる」

「ずるい！ 俺にもやらせろよ」

二人に携帯ゲームをしている所を見られてから、事あるごとに自分達にも触らせるとせがんでくる。小学生で携帯電話を手になんとうとは生意気だ。俺は群がる二人に対し、携帯電話を高く掲げて自分の部屋を離れた。

まったく、うるさい弟達だ。この家にプライバシーなんてあったもんじゃない。よく孝二はこんな状況で勉強できるものだ。いや、俺が舐められているだけなのか？ 下の兄弟たちを適当にあしらいながら、リビングへと向かう。

「ほらほら、そろそろ晩ご飯の時間だろ。席につけ席に」

俺の家の晩ご飯は比較的早い。何故ならこの後兄弟で順番にお風呂に入らなければならぬからだ。なので部活動も美紀夫の家に遊びに行くこともなく、夕方に帰ってきた今日の俺は、珍しくみんなで食卓に着いた。

「礼ちゃん、いるなら手伝って」

母親が背の高い俺を見つけて手招きする。俺は面倒くさそうに立ち上がって、母親が注いだカレーをスプーンと共に運んでやる。俺の家のカレーには、必ずと言っていいほどスナップエンドウが入っている。母親がベランダの一角で栽培しているからだ。

ふと時刻を確認する。午後六時過ぎ。みおはもう寮に帰っている

だろう。寮って事は、ちゃんと食事も出ているよな。そう言えば何処の女子校なのだろう。後で美紀夫に聞いてみるか。

「礼二退けよ！ テレビが見えねえじゃんか」

俺を呼び捨てにするのは生意気盛りの小学二年生の弟。俺は「はいはい」と口でいいつつ、睨みつけてやる。ああ、俺も早く兄貴のように一人暮らしとかしてみたいなあ。そしたら、ゲームだろうがオナニーだろうが何でもやりたい放題出来るのに。

「礼兄ちゃん。さっきからにやついてて、キモイよ」

どこでそんな言葉を覚えたのか、真正面に座る小学一年生の妹が毒つく。それに便乗して周りの兄弟達が「キモイキモイ」とはやし立てるので、俺は急いでカレーを平らげると、わざわざ電話をかけるために外に出た。

しかし留守番電話サービスに接続されただけで、美紀夫とは繋がらなかった。

翌朝、俺は夏から続けているスーパーの品出しアルバイトをしていた。緑色のくたびれたエプロンをつけ、何箱もあるダンボールの中から商品を取り出し、綺麗に陳列していく。流石に毎日とは異なるが、今は週に三日程手伝いに来ていた。

「礼ちゃん、ここの商品、出してもらっていいかしら」

俺にこのアルバイトを紹介してくれた雅美おばさんが手招きした。家も近所で、お母さんとも仲が良いので昔からかなりお世話になっ

ている。俺が未だにこのアルバイトを続けられているのも、実は雅美おばさんの御陰だったりもする。もともと短期募集で採用されたのだが、上に継続出来るよう話を通してくれたのだった。

「この箱全部ですか？」

「上の棚に出す商品だけでいいわ、お願いね」

雅美おばさんは女性の中でも背が低い。だが、見かけによらず力持ちだった。なんせ男の俺と同じ箱数の品出しを、毎日やってのけるから凄い。俺が上の商品を出している間、雅美おばさんは背の高い俺がやりにくい下の商品を補充していく。雅美おばさんと組んだ日は、決まって早めに終わるのだった。

「それにしても礼ちゃんが来てくれて本当助かるわ。私一人だったら、一々台を持ってこなくちゃいけないもの」

そう言っただけで慣れた手つきで商品を並べていく。雅美おばさんの息子達は、皆社会人になり家を出てしまった。だから俺の事を息子のように慕ってくれるのだろう。小さいながらも、しっかりと背中からは母親の強さを感じる。

「ふあ……」

思わず欠伸がでた。昨日は美紀夫の姉、みおのせいですっかり寝不足だった。ドキドキして眠れないとか、小学生じゃあるまいし。俺は短い髪を掻きむしりながら、昨日から美紀夫と連絡がつかない事も気になっていた。あの後も何度か、美紀夫に姉のみおの事を問いただそうと電話したのだが、繋がらなかった。メールも送ったのだが、未だに返信はない。いつもはすぐ返信をよこす癖に。もしかしてあいつ、携帯の電源を切ってまで新作ゲームをクリアし

ているのか？

「礼ちゃん、どうかしたの？」

俺の手が止まっていたのか、雅美おばさんが下から心配そうに声をかけた。

「あ……いえ、大丈夫です。すぐ終わります」

美紀夫の顔を思い浮かべると、否応が無しにみおが出てくる。くそっ、こんな風に誰かに焦がれるのは初めての経験だった。俺は顔が赤くなっていやしないかと、汗を拭うふりをして誤魔化した。

line 10・高値の花

俺達の待ち合わせ場所は、常に駅の電車の最後列と自然に決まっていた。既に到着していた電車に乗り込むと、今日は座れなかったのか、美紀夫が扉にもたれかかっていた。

美紀夫の姿を確認した途端、突如胸が高鳴る。おいおい、落ち着けよ俺。顔は同じだが、あいつは美紀夫じゃないか。こんな事で緊張してどうするんだよ。自分の胸を軽く叩きつけると、自然に見えるよう手を上げた。

「……おっす、美紀夫」

美紀夫は俺の登場に少し驚き、慌ててイヤホンを外す。

「おはよう、礼二君。あれ？今日はバイトじゃなかったの？」

「早めに片付いたから一本前の電車に間に合ったんだ。お前こそ朝練はどうしたんだよ」

美紀夫は先月から俺と同じ陸上部に入った。美紀夫は走らせてみると意外に早く、短距離走の選手として部に所属したのだった。俺がバイトで朝練をサボっている事を知っているのも、美紀夫だけだ。テスト期間が終わったのだから、今日から朝練も再開するはずだった。

「あはは、実はアラーム時刻を変更するの忘れちゃって。テスト期間通りに起きちゃったんだ」

「嘘付け。どうせ携帯の電源切つてまで、朝方近くまでゲームしていたんだろ？どうして返信してこねーんだよ」

美紀夫が「あっ」と小さな声を上げて慌てて携帯電話を取り出す。画面は真っ暗だった。俺の表情を見て咄嗟に手を合わす。

「ごめんっ、本当にごめんっ！ 礼二君の言うとおり、実はゲームで夜更ししていたんだ。邪魔されたくないから携帯の電源切っていたのを、すっかり忘れていたよ」急いでメールをチェックする。「昨日電話もしてくれていたんだ……ごめんね、本当に」

少し潤んだ瞳で許しを請う。美紀夫がわざと自分を避けていたのではない事实に、俺は安堵した。

「分かったよ。お前のゲーム好きは知っているから、もういいさ」
「本当にごめんね。それでメールにも書いてあったけど、聞きたいことって、何？」

美紀夫が強ばった顔で構える。俺は美紀夫が双子だった事、それを今まで話してくれなかった事に多少なりともショックを受けていた。兄弟みたいな隠し事のない関係だと感じていたのは、実は俺の一方的な思い違いだったのか。美紀夫の表情に少し戸惑いながらも尋ねる。

「お前、実は双子なんだってな」

電車が時刻通りに発車して揺れる。美紀夫が一瞬視線を窓の外に移してから、渋々口を開いた。

「みおに……会ったんだね」

「ああ、昨日電車の中で偶然にな」

美紀夫が難しそうに眉を潜めたので、俺は茶化すように大きな手で頭を押さえ付けた。

「なんで今まで黙っていた。こら、美人なねーちゃんを俺に取られるとも思ってたか！」

重い重いと美紀夫も大げさに喚く。

「言うタイミングがなかったただけだよっ！ それにみおは……色々と難しいんだ」

「難しい？」

ようやく手を退けてやると、美紀夫が乱れた髪のを直しながら呟く。

「その……みおは、男が嫌いなんだ」

「へ？」

「本当は俺と同じG校に転入する予定だったんだけど、共学は絶対嫌だって。それでわざわざ寮に入ってまで女子校にいったんだよ」

「そ、そうだったのか」

俺は昨日みおさんの隣に座ってしまった事に罪悪感を覚えた。今になって思えば、強ばっていた表情も理解出来る。

「みおは止めといた方が良いよ。礼二君には勿体無いしね」

「な、何でだよ！」

「みおは無理なんだ……礼二君が傷つくだけだと思うよ」

「おい！ もう俺がふられる事前提かよ……そんなにみおさんは男が嫌いなのか？」

「うん……何でも昔誘拐されそうになった事があって。ほら、同じ

顔の俺が言つのもなんだけど、みおって可愛いだろ？ まさか礼二君、みおに一目惚れしたなんて言わないでよね」

美紀夫の一言に、俺は思わず顔を赤くした。それを図星ととらえた美紀夫も何故か顔を赤らめる。

「む、無理なんだって、みおは。礼二君のタイプかもしれないけど、駄目なんだって」

「そ、そんな事言われてもなあ」

俺は窓の外に目を向けた。海が見える。昨日みおが好きだと言っていた海が。

「みおよりも可愛い子はいるって。ね、みおの為にも考え直してよ」

考え直せと言われても、一度自分の中から湧いてしまった感情をなかった事には出来ない。しかしみおが男嫌いという助言と、この異常なまでの説得から、昔二人の間にひと悶着あったかのように思われた。

みおは確か自分は美紀夫に嫌われていると言っていた。同じ顔の自分にコンプレックスを抱いていると。俺は美紀夫の顔をまじまじと見つめてから、一先ここは納得しておこうと頷いた。

「分かった……忘れるように努力してみよ」

「うん、そうしたほうがいいよ。お互いに」

それから俺たちは駅に着くまで一言も言葉を交わさなかった。美紀夫が何を思っただけで反対したのか知らないが、どうやらみおは俺にとっただけの花らしい。あの容姿じゃ、誰がどう言っても納得出来る。所詮背が高いだけの雑草とは不釣り合いだな。無意識に自分のごつく

て大きな手の平を見つめた。

line 11・初メール

みおと出会ってからしばらくは、俺も美紀夫もみおの事を話題に出さなかった。美紀夫に反対されてからはタブーのように感じられたし、あまり聞いて欲しくないようにも思えたからだ。

しかし俺は日に日に双子の姉、みおに恋焦がれるようになった。もう一度会いたくて、会いたくて仕方がない。美紀夫の側に居る限り、とてもみおの事を忘れられそうにもない。むしろ不可能に思えてきた。

胸が苦しいとは、こういう事か。たった一度、しかも数分間しか一緒にいなかった相手をこうも好きになれるなんて。自然とため息をつく回数が増えていき、思わず胸まで押さえ込んでしまった。

「あんた、最近様子変よ？ あんな苦しそうな顔して走るなんて、らしくないじゃない」

及川が走り終わった俺にタオルを差し出す。走っている最中に思い出したのはみおの事だった。すかさずタオルに顔を埋める。なんだよこれ、涙が出そうだ。

「お水、隣に置いておくから。気分が悪いのなら、早めに保健室に行きなさいよ」

及川に申し訳ないと思いつつも、俺はしばらくその場から動けずにいた。まだウォーミングアップが終わったばかりじゃないか。何でこんなに息切れしているんだよ、胸が苦しいんだよ。どうにもならない感情に苛立っていると、足音が近づいて来た。

「礼二君、大丈夫？」

美紀夫だ。俺はなんとか顔を持ち上げて、苦笑いをした。

「悪いな、心配かけて。ちょっと部活サボりすぎたかな？ スタミナ落ちたなあ」

「何言っているの、礼二君！」 美紀夫が声を潜めた。「……みおの事だろ？」

俺は不貞腐れたようにそっぽを向いた。自分の心は単純に見透かされていたようだ。何だよ美紀夫の奴、自分からみおの話題を避けていた癖に。

「今更何だよ、忘れろって言ったのは、そっちだろ？」

「だけど俺、礼二君の苦しい姿なんて見たくないよ」一瞬戸惑った顔を見せたが、覚悟を決めて真っ直ぐ俺の目を見た。「だから……だから、みおに説得してみる」

美紀夫から思いもかけない言葉が出たので、俺は眉を潜めた。

「お前、反対していたじゃねえか」

「う、うん……でも、このままじゃ礼二君が辛いだけだろ？」

確かに。会いたくて、もう一度お話したくてたまらなかった。ずっと気持ちちがもやもやしていて歯がゆい。しかし、ここは美紀夫の話に縋りついてもいいのだろうか。

「でもお前、みおさんと仲が悪いんだろ？ それに……美紀夫を利用するみたいで悪いじゃないか」

ましてや同じ顔の女に惚れたのだ。美紀夫に気持ち悪がられても仕方のない立場にいるのに、当の本人は笑って答えた。

「利用じゃなくて協力と言って欲しいな。今日、みおに聞いてみるよ」

そう言われて、みおが俺の事を話していたのを思い出した。

「ちょっと待て、変に聞き出すような事はするなよ。お前、俺の事スケベ野郎だつて喋っただろ！」

「えっ？ さ、さあ、覚えてないなあ」

美紀夫の目が宙を泳ぐ。

「とぼけやがつて！」

俺は立ち上がると美紀夫の頭を鷲掴みにする。

「い、いいかつ。友達としてだぞ！ 変なこと喋ったらただじゃすまないからな」

嬉しさを紛らわそうと、ついでに激しく振ってやった。

「わかったよ、わかったから揺するのだけは止めてよ！」

俺の行動に対し、美紀夫が嬉しそうに抵抗した。

それから三日後の十一月二十一日午後九時二十三分、俺の携帯電話が鳴った。床に寝そべって漫画を読んでいた俺はその音で飛び起きると、慌てて携帯を開く。知らないアドレス表示からの、新着メッセージ。まさかと思い、俺は息を吞んでボタンを押した。

『 件名：みおです。』

本文：初めまして、久瀬みおです。弟の美紀夫から河村君の事聞きました。美紀夫とは部活まで一緒らしいですね。河村君が女の子のメル友が欲しいとの事で、私で良ければ話し相手になりますよ（笑） 』

来た！ ついにみおからのメールだ。俺は興奮しながらも、携帯の小さな画面を食い入るように見つめた。それはもう、一文一句を覚える勢いで。近くでゲームをしていた弟の考二が、俺の様子を変な目で見ようが気にしなかった。

女の子のメル友が欲しい？ 美紀夫の奴、また余計なこと喋ったんじゃないだろうな。俺は部屋の隅で縮こまりながら、慎重に返信メールを打った。

『 件名：河村礼二です。』

本文：メール、ありがとうございます。そうなんですよ、俺女の子の友達全然なくて（泣） やらしい気持ちとか全然ないんで、俺の話し相手になってください 』

待て待て、やらしいくないアピールを自分からしてどうするんだ。逆に下心あるのばればれじゃないか。俺はクリアキーを何度か押してもう一度打ち込んだ。

『 件名：河村礼二です。』

本文：メール、ありがとうございます。やはり女性の気持ちを理解出来ないと思えば、美紀夫のお姉さんのおみおさんにお願ひした始末です。』

何恋愛を語っているんだよ、俺！ 自分の文章力の無さにイライラしながら、三十回以上は書き直したであろうか。結局普通に『メールありがとうございます』と『返信出来ることで結構です。お付き合いお願いします』とだけ本文に打ち、ようやく送信する。そのまま携帯を握りしめると、俺は心臓の鼓動を押さえつけるかのよう床に這いつくばった。こんなに緊張したメールは初めてだ。

「えらく返信に時間かけていたね。そんなに凄いチェーンメールでもきたの？」

考二が顔を上げてにやにやと俺の様子を伺う。あの表情は分かっているに違いない。というか自分の行動でなければか。俺は照れながら考二に向き合った。

「何だよ、お前だって好きな子くらいいるだろ？」

「いるよ。もう彼女だけだ」

「何っ!？」

中学三年生の弟から衝撃の告白。あまりに突然だったので、開いた口が塞がらない。

「い、いつからだお前……いつからなんだ！」

「いつからって、俺も先月くらいからだよ」考二が照れくさそうに眼鏡をかけ直す。「図書室で勉強していたら、解らない所を教えて欲しいって頼まれたんだ。それから一緒に帰るようになったんだよ」

まさに夢見た制服下校デート。そう言えば上の兄貴も中学時代、自転車の後ろに女子生徒を乗せて川沿いの道を走っていた。あれも俺が夢見た『制服で自転車女子後ろ立ち乗り』ではないか。俺の中学時代はそんなドキドキワクワクするような、イベント事には一切遭遇出来なかったと言うのに。

何で兄貴や弟ばかりがいい目に合うんだ。考二を腹いせにしめ上げていると、俺の携帯電話が鳴った。も、もう返信が来たのか！慌てて孝二を突き放し、画面を開く。

『 件名：再びみおです。』

本文：わかりました、私も時間のある時に返信しますね。ところで礼二君は今何をしていたの？もしかしてもう寝る所だった？

（汗）
『 』

何をつて、まさか弟を虐めていましたとは言えまい。俺は顔を赤らめながらも、明日はバイトが無いのをいいことに夜遅くまでメールを打ち込んだ。みおも俺の話に無理せず付き合ってくれ、合計二十二通、三時間以上俺たちはメールのやり取りをした。普段ならとつくに寝ている時間帯なのだが、今しがたみおとのメールを全てチェックするや否や、深夜零時を過ぎてようやく布団に潜り込む。駄目だ、興奮で目が冴えてとても寝られそうにもない。ついでにあそこもビンビンだった。俺は弟が起きないよう携帯電話を握り締めながらトイレに向かうと、そこに全てを吐き出した。

line 12・みおの理解者

翌日。俺は寒さが身にしみる朝から上機嫌で駅へと向かう。自転車をとめ通路に出た所で、階段を上ってきた美紀夫と偶然出くわす。

「おう、美紀夫。昨日はありがとな」

「おはよう、礼二君。どう？　メールのやり取りは」

美紀夫も俺の様子を分かってか、にやにやしなから訪ねてくる。俺は昨日のメールを確認しながら、みおと二十二通もメールしたと、そして普通に会話を楽しんだ事を告げた。

「へえ、結構順調そうだね」

「お前もそう思うか？　……なあ、みおさんって、彼氏いないんだろ？」

美紀夫が複雑そうに頷く。

「うん、多分いた事もないと思うよ」

「そ、そうか」俺は恥ずかしそうに顔を赤らめて、美紀夫に尋ねる。
「俺にも……望み、あると思うか？」

美紀夫は照れくさく頭を掻きながら、慎重に言葉を選んでいう。
「うだった。」

「……わからない。そもそも、礼二君も何でみおが好きなのさ。だって、一回電車の中で会っただけなんだろう？　そんな簡単に人を好きになれるの？」

逆に聞かれて、俺は焦った。確かにみおに会ったのはあの一回きりだ。でも、同じ顔だけなら毎日見ていた。そう、俺は美紀夫が女だったら、みおだったらとあの日から自然に思い込むようになっていたのだ。勿論この事を美紀夫が知る余地もないし、むしろ知られたらまずい。俺は間違っても同性愛者ではないはずだ。

「……多分一目惚れってやつかな。俺にも正直わかんねえよ」

「ふーん……じゃあ、顔が好みのタイプだったんだね」

美紀夫が冷たく俺をあしらひ、先に改札をくぐる。確かに顔もタイプに違いないが、さっきから美紀夫が俺に対して挑発的な気がしてならない。何なんだよ、順調そうとか言った癖に。

俺とみおはそれから毎日メールを交わした。本当に些細な世間話から、将来の夢や進学まで。美紀夫や他の友人にも恥ずかしくて言えなかったが、俺は高校を卒業したらこの家を出て、働こうと考えていた。特に大学に行く理由もないし、家にそんな余裕があるとは思えない。

それに働くのも悪くはないと思い始めていた。少なくとも今のバイト先では、俺は雅美おばさんに必要とされ、頼られている。そこに自分の居場所があるように感じられる。自分一人で生きてみたい、早く自立したい。親が嫌いな訳ではないが、近頃は罪悪感の方が強く感じた。俺が朝早くバイトに出かけるせいで、母親も早く起きているのだ。俺がいるせいで、考二も集中して勉強に励めないのだ。今の俺にとって、あの家は少し窮屈だった。

□ 件名：自立っ！

本文：だから俺、美紀夫の家に遊びに行くのかも。今の家に、

俺の居場所はなさそうだしさ。先に一人で暮らしているみおさんが羨ましいよ ㇿ

ㇿ 件名：わお （笑）

本文：兄弟が多いのも大変ね。私も家族がちよつと息苦しいから寮に逃げたのかも。ほら、双子ってよくセツトで扱われるじゃない？ 私、美紀夫と一緒にされるのが何よりも嫌だったのよ。別に美紀夫の事が嫌いな訳ではないんだけど……何て言えばいいんだろう ㇿ

ㇿ 件名：うーんと

本文：何となくみおさんの言いたいことわかるよ。一個人として見て欲しいんだよね？ ㇿ

ㇿ 件名：さすが礼二君 （笑）

本文：そうそう、でも実際一人で暮らしてみると親のありがたみが凄くわかる。全部一人で家事をするのはとても面倒だし、毎日ご飯なんて作れないよ （泣） ㇿ

ㇿ 件名：ありがとう。

本文：自分で全部やりくりしていかなきゃいけないのは、大変なんだろうなあ。この家を出る前に、少しでも親孝行しておくか！

（笑） ㇿ

ㇿ 件名：そうだね。

本文：中々恥ずかしくて実行しづらいけど。そう言えば礼二君は、将来の夢とかある？ 私はまだ見つけられてないから、卒業するまでには見つかるといいな ㇿ

将来の夢か。俺は携帯の画面を閉じると、二段ベッドの上で大の

字に寝そべった。俺もみおと同じく将来自分が何をしたいか、何をしているかなんて想像も出来ない。何となく流れで高校生になってしまったので、先のことは出来るだけ考えないようにしてきただけなのかもしれない。

大学に行く？ でも目標も何もない俺が行ってどうするんだよ。

高校生活の延長線になるのは目に見えているじゃないか。

『 件名：俺も 』

本文：自分が何になりたいとか、何をしたいのとか想像出来ないや。とにかくいろんなことを経験して、自分の視野を広げたい 』

最後は格好つけ過ぎるか。俺は返信にどうしようか迷ったあげく、最後の一文を消して代わりに『おやすみなさい』と付け加えた。逃がっているだけかもしれないが、今は将来なんて考えられない。今を楽しく過ごせたのなら、みおと一緒に過ごせるのなら、俺の将来も定まるのは気のせいかな。

みおとのメールは結構真面目な内容が多い。俺もみおとなら普段はふざけて誤魔化してしまう内容でさえ、きちんと向き合える。相手が見えないせいもあるが、みおはとても話しやすい、話の分かる相手だと感じた。何をメール如きだと思うかもしれないが、女子としては文章が堅く、変に絵文字だらけのメールよりか好感が持てる。

毎日メールを交わす事で、俺はすっかりみおの理解者になったつもりでいた。少なくとも友達にはなれた気がした。しかし、いくらメールを交わした所で、俺がみおと再び出会うことはなかった。

line 13 デートプランと妥協

朝練で走りながら、俺はどうしてみおが会ってくれないかを考えていた。これまで何度かメールで『一緒に行きましょう』とか『俺も付き合いますよ』とか、さり気なく誘い文句を打ってきたつもりだ。しかしみおの返事は決まって『そうですね』の一点張りだった。そんな濁り返事に俺は我慢しきれず、ついに昨日のメールで『もう一度会いたい』と胸の内を明けたところ、朝になっても返信が帰ってこない始末だった。

「俺、下心丸見えなのかなあ」

「何？ どうしたの？」

隣で俺のペースに合わせられるようになった美紀夫が、白い息を切らしながら尋ねる。

「いや、何でみおさんは俺と会ってくれないのかなあっと……」

「そんなの、みおが警戒するに決まっているでしょ。礼二君ドスケベだし」

「スケベ情報をたらしたのはお前だろ！ 第一美紀夫だって人のこと言えないだろ。俺が高橋から回してもらったエロ本、是非貸して欲しいってせがんだじゃねえか」

「あれはっ！ ……だって、そんなに凄かったって礼二君が言うから……その……」

内容を思い出したのか、急に赤らみ声が小さくなった。

「せっかくメールする仲まで進んだのに、このまま一人でクリスマスを過ごすなんて嫌だなあ」

そうなのだ。季節はとくに十二月を迎え、世間はクリスマスムード一色に溢れかえっていた。駅前でもツリーやら変なモニュメントやらがライトアップされ始め、俺を含め世の中の独り者はどれだけ悲しい気持ちに苛まれる事だろう。

「クリスマスって、恋人同士のイベントでしょ？ みおとはメル友なだけじゃない」

「だーから、次に会った時、俺告白しようと思って」
「こ、告白っ！？」

美紀夫が驚いて思わずバランスを崩す。

「悪い、大丈夫か？」

「何馬鹿なこと考えているんだよ、まだ一回しか会ったことないのに、いきなり告白だなんて！」

「じゃあ、いつしろって言うんだよ。男嫌いで俺に会うのが嫌かもしれないけど、俺の気持ちを知ったら、みおさんだって理解してくれるかもしれないじゃないか」

「そ、そんな事言われても……」 美紀夫が困った顔で額の汗を拭う
「逆にフラれたらどうするのさ」

「フラれるのを怖がっていたら、何も進まないだろ？ 男なら当たって砕けるだ！」

「砕けちゃ駄目だって」

「ああ、そうか」

俺はんと、眉を潜めて前方を見据える。告白しようにも、みおをどこかに呼び出さなくてはならない。やはりここは、何とかデートまでこぎ着けて、最後に告白するのがセオリーだろう。

「なあ、デートするならどこがいいかな？」

「そんな事聞かないでよ！ 映画でもなんでも誘えばいいでしょ」

美紀夫が呆れたように俺を見上げる。

「美紀夫の方がみおの事知っているだろ。ほら、映画でもホラーは駄目とかさ」

「うーん……そういうのは、直接本人に聞いてみたら？ みおが行きたい所もあるかもしれないし」

「そ、そうか。でもデートプランは男が考えた方がいいよな？」

「もう、だから知らないってば！」

「おい、お前らさつきから喋りすぎだぞ」

後ろから一喝されて振り返ると、元部長の長谷川直也ががっちりとした体型を上下に揺らしながらこちらを睨んでいた。長谷川先輩含め三年生は九月の夏大会で引退したのだが、スポーツ推薦が決まった長谷川元部長は、こうして自主的に俺達とトレーニングをしているのだった。

「わっ！ 部長、すいませんでした」

「す、すみません」

俺と美紀夫が慌てて謝る。長谷川先輩は先程から話を聞いていたのか、鼻で笑って答えた。

「もう部長じゃねえよ。部長はお前だろ、河村」

そうなのだ。また肩書きのみだが、多数決で陸上部部長にさせられたのだった。

「何だ、お前及川とデートするのか？」

「ち、違いますよ、何であいつなんかと。俺はこいつのお姉さんとデートなんです」

美紀夫がちよつと、と俺の身体をつつく。

「何だ、久瀬のお姉さんか」

「それも双子ですっげえ美人なんですよ」

へえ、と長谷川先輩が久瀬の顔をまじまじと見つめる。美紀夫は恥ずかしさからか、一人ペースを上げて先に行ってしまった。

「あいつそつくりの姉なら、美人だろうな。でも、久瀬が双子だったとは初耳だ」

「あいつも最近まで黙っていたんですよ。ああ、同じ学校ならよかったのに」

「何だ、学校が違うのか。一度見てみたかったのにな」長谷川先輩が残念そうに美紀夫の背中を追う。「河村、少しペースを上げるぞ。授業に間に合わなくなる」

「へーい」

俺と長谷川先輩がプレハブの部室前につくと、先に走り終えていた美紀夫と及川から紙コップとタオルを受け取った。

「今日は久瀬君の方が早かったわね。久瀬君も、だいぶ早いペースで走れるようになったじゃない」

「そ、そうかなあ」

美紀夫が恥ずかしそうに俯く。

「久瀬が恥ずかしさのあまり、先に走って行っただけだ」

「ふん、どうせ下ネタでも喋ったんでしょ」

「うわっ、及川も俺の事そんな目で見ていいのかよ」

くすくすと及川は笑って長谷川先輩にも紙コップを渡す。

「長谷川先輩、お疲れ様です。冬休みの練習ですが、去年より増やした方がいいですかね？」

さらっとなんてことを提案しているんだ、及川。

「そうだな……でも、クリスマスイブは誰かさんの為に空けておいてやれ」

長谷川先輩がにやにやと俺の方を見て提案する。先輩め、さっきの話を全部聞いていたのかよ。俺と美紀夫がどうしたものかと顔を見合わせていると、及川が目ざとく先輩の視線を捕らえた。

「もしかして礼二、あんたイブに予定でも？　ぶっ、彼女もいないくせに」

明らかに軽蔑しきった表情の及川。俺は思わず反論した。

「何だよ、及川には関係ないだろ。そうなる予定なんだよ、予定」

「そう。ま、せいぜい頑張りなさいよね」

及川美裕陸上部マネージャーからの、上から目線のお言葉。何だよ、自分だってどうせ彼氏が出来たことないくせに。俺は及川に反論する言葉が見つからないまま、美紀夫と共に部室を後にした。

教室で席に着いてからも、俺は昨日のみおとのメールで頭がいっぱいだった。やはりストレートに送ったのがまずかったか。

みおが男嫌いなのをもう少し考慮すればよかった。こつそり携帯画面を開く。勿論返信はおるか、一通もメールは来ていないようだ。

「なあ、みおは何で男嫌いになったんだ？」

一時間目の数学の教科書を用意し終わった美紀夫に尋ねる。美紀夫はわざわざ席を立て俺の前に座った。

「昔誘拐されそうになったとか言っていたけど、やっぱりそれが原因なのか？」

美紀夫がうーんと困ったように眉をひそめる。

「俺がみおのトラウマを喋っていいかわからないよ。でも、その話題は避けてあげて」

「……だよな。でもデートにすら来てくれないんじゃ、告白のしようもないじゃないか」

「それもそうだけど……あ、及川さんだ」

美紀夫の言葉で振り返ると、そこには俺の体操着を持った及川が立っていた。もう冬服なので、彼女の下着の色が見えないのは残念だ。

「はい、部室に忘れていたわよ。これがなかったら、体育の時困るでしょ？」

「ああ、悪い。わざわざありがとな」俺はふと女子の意見も聞いて

おこうと尋ねた。「なあ、及川だったらデート、どこ行きたい？」
「えっ？」

俺が聞くや否や、及川は顔を赤くして持っていた俺のジャージで顔を殴った。

「知らないっ！ そんなの聞かないでよ！」

どずどずと足音まで聞こえてきそうな勢いで及川が教室を後にする。先程の光景を見ていた数人のクラスメートが、俺の間抜け面にくすくす笑う。

「礼二君、今妥協したよね？ 及川さんでもいいかなって」

美紀夫も呆れたように俺の心境を語る。

「ち、違う。俺はただ意見を聞きたかっただけだ。なのに殴ることはないだろ、殴ることは」

「女心がわかってないね、礼二君」チャイムが鳴ったので、美紀夫は席を立つ。「後で及川さんに謝っておきなよ」

「ざまあねえな、礼二！」

隣の席の高橋がジューズ片手に笑う。やばい、俺そんなにまずい事を聞いたのか？ 妥協？ どうして及川で妥協しなきゃいけないんだ。俺がデートしたいのはみおだぞ。

何だか腑に落ちないまま捨てられた体操着を拾う。とにかく、午後の部活が始まる前までには謝っておこう。

line 14 デートだデート！

部活が終わり、いつもどおり美紀夫と一緒にM町で降りる。その間いくら新着メールをチェックしてみても、そこにメールが届くことはなかった。

「はあ、もう一度会いたいなあ」

自分の部屋で寂しく呟く。弟の孝二は塾なのか、まだ帰ってきてはいない。部屋着のジャージに着替え、木造建ての寒さに思わず布団の中に潜る。よっぽど疲れていたのか、俺はそのまま寝入ってしまった。

しばらくして携帯電話の着信で目が覚めた。なんだ、そのまま寝ちゃっていたのか。つきたての寝癖を抑えながら携帯を開く。みおからだった。

『 件名：遅くなってごめんなさい。』

本文：やっぱりメールだけでは満足出来ませんか？ 私、礼二君に会うのが怖くて……その、決して嫌いな訳じゃないの。ただ、自分の覚悟が出来ないの。』

自分の覚悟？ それほどまでに俺の事が怖いのか。俺は眠気まなこな目を擦りながら、もう一度読み直した。どうしてそこまで怖がるのか。やっぱり俺が男だからか？ 俺は何だかみおがわからなくなってきた。

『 件名：待ちくたびれました （笑）

本文：俺の事が怖いかもしれなけど、でも、やっぱり会って話
がしたい。俺の気持ちを知って欲しい。向かい合っのが怖いのなら
隣で立っているだけでいいです 』

一か八かの妥協案を送信してみる。十分ほど携帯と睨み合った後、
みおからのメールが届いた。

『 件名：ごめんなさい

本文：……あまり私を見ないと約束してくれるのなら、考えま
す。ごめんなさい、私男の人の目が怖くて……礼二君が悪い人じゃ
ないのはわかってるのに。本当にごめんなさい 』

よし！ お決まりの『そうですね』ではなく、考えますと前向き
の答えに俺はガッツポーズをした。

『 件名：じゃあ

本文：そこまで謝らなくても （笑） じゃあ帽子、被ってき
て下さい。それでも駄目ですか？ 』

『 件名：そうだね

本文：それなら……何とかかなりそうかな？ でも、駄目だった
らごめんなさい 』

『 件名：よっしゃ

本文：ゆっくり克服してもらえば大丈夫。もし無理そうなら、
その場で帰ってもらっても結構です。だから一度、俺とデートして
ください 』

女性をデートに誘うのに、こ、こんな文章でいいのか？ 俺はま
じまじと自分の打ったメールをチェックする。それとも、もう少し

軽いノリの方が……いや、みおは真面目だからこんな感じで……いや待てよ、ちよつとストレート過ぎる気が……。

俺が送信ボタンを押そうか押さまいか考えあぐねていると、突然部屋の襖が開いた。その拍子に驚いて送信ボタンを押す。

「あー……っ!!」

即座に中止ボタンを押そうとしたが、携帯を見事落つこととして送信されてしまった。

「な、何? どうしたの?」

いつもどおり部屋に入ってきた弟の考二が戸惑った様子でこちらを見ている。俺は恥ずかしさと後悔のあまり考二に攻め寄った。

「お前入る時くらいノックしろよ! ああ、メール送信しちまったじゃねえか……」

涙目で落ちた携帯電話を見つめる。穴があつたら入りたい。まさにこの状況をさすのではないか。

「悪かったよ。ごめん、もしかして携帯壊れちゃったの?」

自分が壊してしまったのかと考二が携帯を拾い上げる。その瞬間に、画面が光った。

「わっ、よせ! これ以上俺に恥をかかせるつもりか!」

「へえ、みおって言うんだ」

考二がすかさず名前を読み上げる。俺は考二を一発殴ってから携

帯を取り返した。

「お前、今度見たらただじゃおかねえぞ」

「壊れてないか見ただけじゃないか」考二が乱れた髪を戻す。「それよりメール届いたみたいだけど」

そうだったと、俺は片目をつむってそっと本文を開けた。ときどきしながら両目で確認する。

『 件名：ふふ』

本文：わかりました。その条件をのんでくれるのなら、私も頑張ります。でも、なるべく人混みが少なく、時刻も夕方頃がいいです。』

本文を読み終えた俺は、うおーっとその場で喜びの雄叫びをあげた。やった、もう一度みおに会える！ デートだデート！ 生まれて初めてのデートだ！俺はついさっき考二を殴った事も忘れて踊りだした。その様子を考二が冷やかな目で見つめていた。

「怒ったり喜んだり……礼二兄ちゃんは忙しいね」

『 件名：日時ですけど』

本文：今年中は無理でしょうか？ 冬休みに入った方が都合いいですか？』

『 件名：えっと』

本文：期末テストもありますし、テストが終わった次の週くらいで。場所はどうしましょう？
』

期末テスト。そう言えばそんなものがあつたな。俺は恐ろしい現実を目の当たりにしたかのように、考二の机に貼られたカレンダーを睨みつけた。今日が十二月四日の月曜日で、期末テストは十二月十二日からの四日間。あれ？ でもみおとはそもそも学校が違うのだから、俺の基準で考えちゃ駄目か。

みおとどこへ行こう。先程のメールに書いてあつたように、なるべく人が少なく、夕方からでも楽しめるような所……結構条件が厳しく、限られてくるなあ。

俺は散々悩んだ結果、無難な映画しか思いつかなかつた。一緒に映画を見て、食事をし、別れ際に告白する……よし、それで行こう。自己完結後、俺はみおとメールで交渉し、日時と待ち合わせを決めた。日時は十二月十六日の土曜日、午後四時に名古屋スクエアシネマの劇場前。随分と街中な気もするが、みおが名古屋の方が出やすく、他の友達に見られたくないとの希望だったのでそこで合意した。確かに地元では、他の連中に見つかる可能性が高い。ただでさえ自分が目立つらしいので、知り合いに冷やかされるのだけはなんとかしてでも避けなければならぬ。

俺はその日を待ち望みながらおやすみメールを送った。みおはどんな格好で現れるのだろう。帽子を被ってくるだろうか、きつとそれに似合うファッションをしてくるに違いない。あの時電車で見ただような、ちょっと年上風の格好でくるだろうか。それとも可愛いふりふりな感じか。どちらにせよ、みおは何でも似合いそうだ。

俺は布団の中でたくましく妄想を働かせながら眠りについた。

line 15・ミーティング

翌朝、俺は五時に起きると学校前のアルバイトに出かけた。今日からテスト週間で部活動は休み、アルバイトも今日までで一旦お休みを貰うつもりだった。

冬はとにかく起きるのが辛い。眠い目を寒気にさらしながら、まだ日の出ていない川原道を自転車で走る。寒さで手がかじかんで痛い、俺は昨日から何度も見返したメールに心浮かれていた。ついにみおに会える。それも映画デートなのだ。ようやく俺にも春が来たのかと、鼻水をすすりながら一人にやけていた。

朝の品出しをいつもどおり終え、急いで駅へと向かう。登校時間ギリギリに間に合う電車に乗り込むと、そこには美紀夫の姿があった。

「あれ？ 美紀夫もこの電車か。珍しいな」

「おはよう、礼二君。今朝はちよつと寝坊しちゃって」

そう言いながら寒そうに体を震わす。俺は迷わず空いている美紀夫の隣に座った。ギリギリ電車ではG校の生徒も少なく、のんびりと席に座れる。その後学校まで走る羽目にはなるが。

ちらつと、隣の美紀夫の方を見る。確かみおの背丈もこれくらいだっただろうか。同じ顔の美紀夫の隣に座ることで、俺は当時の記憶を最大限に引き出そうとした。

「礼二君、今日もバイトだったの？」

「ああ、今日までで一旦テスト休みもらった……ところで聞いてくれよ」俺は思わず美紀夫の肩を掴んだ。「みおとデートにこぎつけたんだ！」

「へ？　そ、そうなの？」

美紀夫が俺から視線を逸らす。

「ああ、十六日の土曜日。二人で映画を見ることになった！　おっ
しゃあ！」

昨日の興奮が覚め切らず、その場で地団駄を踏む。そんな俺を美紀夫がなだめた。

「ちよつと落ち着きなよ、それ、本当なの？」

「ああ、ちゃんと証拠もあるぜ」

そう言つて携帯電話を取り出し、みおのデパート了承メールを見せつける。その画面をまじまじと見つめながら、美紀夫は顎に手を置いた。

「まさかみおがね……で、礼二君は本当にするの？」

「何を？」

「告白だよ。次に会ったら、否応がなしに告白するって言っていたじゃない」

告白。そうだ、そのつもりだ。

「す、するさ。告白ぐらい、俺にも出来る」

「礼二君、告白した事あるの？」

「ないよ」

「じゃあ告白された事は？」

「ない……」

はあ、と二人そろって頂垂れる。

「ああ、もうテスト勉強どころじゃないな。俺の童貞卒業がかかっているんだ、なんとしてでも告白を成功させるぞ」

「ちよつと！ その後ホテルだなんて言わないでよね！」

美紀夫が血相を抱えて怒ったので、俺は驚いた。

「そんなにびつくりすることないだろ、冗談だよ冗談。第一、高校生がそんな所入れるわけないだろ？」俺は慌てて付け加える。「男性恐怖症のみおさんに、いきなりそんな事出来るわけねえよ」

「そ、そうだよね……」

美紀夫が胸を撫でて安心する。美紀夫の過剰なまでの反応には笑えたが、実際告白もしたことない自分に出来るものかどうか不安だった。みおと二人つきりになるだけで、自分の心臓が爆発寸前になるに違いない。

電車が動き出し、俺と美紀夫も小さく揺れだす。ふと美紀夫の横顔が、みおに見えた。双子だから当たり前といえど、俺が好きなが、思わず顔が引きつる。何を考えているんだよ、俺。俺が好きなのはみおだぞ、美紀夫じゃない。やがて俺の視線に気が付いたのか、美紀夫がこちらを向いた。

「な、何？ どうしたの？」

「い、いや、何でもねえ」

俺は即座にふって湧いた感情をかき消した。美紀夫にときめいてどうする！ 顔が同じなだけだろ、顔が！

「？ 変なの」

美紀夫は鞆から参考書を取り出すと、広げて読み始める。俺は美紀夫の隣が気まずくて、通路側の生命保険と書かれたポスターのお姉さんと睨めっこし続けた。

何とか期末テストを全て終え、俺は終わりのチャイムと共に背伸びをする。名簿順で座っている為、後ろの美紀夫が迷惑そうに顔を歪める。

「ちよつと、そんなに仰け反らないでよ」

「悪い、悪い。いやーっ、やっとテストが全部終わったな！」

「で、明後日デートなんでしょ？ 礼二君、顔にやけてわかりやすいよ」

「あははは」

俺はさも照れくさそうに席を立つ。トイレに行く途中、廊下で及川とばったり出くわした。

「あ、礼二。この後部活のミーティングがあるの、忘れてないでしょうね」

今日は気合の入った、可愛い赤いピンで前髪をとめている。きっとテストも終わり、部活動もないので午後から遊びにでも行くつもりなのだろう。

「あー、そうだったか。部長の俺は絶対参加だよな？」

「当たり前でしょ！ 冬休みの練習スケジュール決めるんだから、あんたがいないと話にならないでしょうが」

眉間にしわを寄せ、そう言い放つなりさつさと教室に戻っていく。体操着で殴られて以来、及川の態度が更にきつくなったのは気のせいだと思いたい。

ホームルームを終え、美紀夫と一緒に第二教室へと向かう。既に及川が準備してくれたのか、机にはスケジュール表が置かれていた。部長の俺や美紀夫、及川も含めると部員は全員で十九名。その内九名が今年入ってきた一年生だ。中でも可愛い女子に一瞬目配りしてから、教卓の前に立つ。

「これで全員か？」

「まだ長谷川先輩と、顧問の先生が来てないわよ」

及川が部員とプリントの枚数を確認しながら告げる。また長谷川先輩が来るのか。俺は余計な事を突っ込まれやしないかと内心ひやひやししながら二人を待った。

「悪い、河村。遅くなった」

大柄の長谷川が教室の後ろから現れ、及川の隣に座る。遅れて顧問の先生も教室に入り、一番後ろに着席した。

「えー、テストも終わっただし、お腹も空いたので早めに終わります」

くすくすと一年生が笑う。よし、最初のつかみはオーケーだな。

「手元にあるのが去年のをそっくりそのまま今年の日付にしたスケ

ジュールだ」俺はそう言つてぺらぺらと掲げた。「今年もこんな感じですよしく」

「そっくりそのままじゃないわよ。一、二年の冬期補習に合わせて時間を減らした分、二日練習日を増やしたんだから」

及川が自慢げに言う。

「うわっ、本当だ」

「もう、すっかりしてよね」及川の眉毛が釣り上がる。「冬場は日没も早いから、なるべく練習は午前中にしたの。それに午前中の方が、みんなも予定入れやすいでしょ？」

よく見るとイブの日は日曜日で、補習も部活も入っていないかった。やった、ラッキーだ。もし万が一告白が成功して、みおと一緒にイブも過ごせるようになったとしても、このスケジュールなら大丈夫だ。

「礼二君、顔にやけているよ」

美紀夫が呆れた顔で突っ込む。

「さ、さすが及川だな。素敵なプランをありがとう」俺はプリントで自分の顔を隠す。「よし、他に異論はないな……今年はこれで行くぞ、解散！」

ぞろぞろと部員達が教室から出ていく。俺も荷物を持って出ていくとした矢先、及川に声をかけられた。

「そう言えば礼二、イブの予定は入ったの？」

「何だよ、お前には関係ないだろ」

「ふーん……ま、そうだけどね」

表情から悟ったのか、及川が静かに俺の前を通り過ぎる。その後ろを長谷川先輩が追いかけるように教室を出ていった。俺は何故、長谷川先輩が陸上部に顔を出し続けるのか理解した。なるほど、先輩は及川の事が――。

「早く帰ろう、礼二君」

美紀夫が先に階段を下りていく。そう言えば美紀夫も、及川が気になっていたはず。

「あ、ああ」

俺は何だか複雑な面持ちで美紀夫の背中を追った。

line 16・初めてのデート 前編

ついにデート当日。俺はその日昼過ぎまでアルバイトをこなすと、急いで昼食を平らげ、部屋で今日着ていく服の吟味に取り掛かる。午後四時に劇場前で待ち合わせなので、どんなに遅くても三時には家を出なくてはならない。俺は何度も鏡の前で服を照らし合わせながら、納得の行くチョイスを模索した。

鞆は両手の空く、シオルダーがいいだろう。そう思い勝手に考二の黒のシオルダーを引っ張り出すと、中身を取り出し、そこに自分の荷物を入れる。紺色のジーンズに、白のセーター。腰には太い革ベルトに濃いグレーのジャケットを羽織る。……よし、みおの隣に恥じない格好になったはず。最後に腕時計をはめて外に出る。自転車に乗り、見事予定より一本前の快速特急に乗り込むことに成功した。

「はあ、この格好で大丈夫だよな」

俺は滅多に見ない、扉に備え付けられている小さな鏡で確認する。ついでにワックスで整えた髪を直す。みおはもう電車に乗っただろうか。みおに会ったら、最初は「お久しぶりです」でいいのか。うるさい心臓をよそに、俺は涼しい顔のふりをして外の景色を眺めた。

劇場前に待ち合わせの三十分前に着く。少し早く来すぎたか。俺はみおらしき人物が一応いないのを確認すると、柱にもたれて自分の手に息を吹きかけて温めた。

たった一度、それもほんの数十分過ぎただけの男を、みおは覚えていたのだろうか。時刻が迫ってくるにつれ、俺は段々と不安になってきた。ましてや今日の自分は私服、せめてみおに服の特徴くらいメールで伝えておくべきだったか。俺が携帯と睨めっこしながらメールを送ろうか考えていると、突然後ろから声をかけられた。

「河村君、お待たせ」

俺がドキドキしながら振り返ると、照れくさいのか帽子をちょこんと手で押さえたみおが立っていた。白のもこもことしたキャップを深く被り、そこから黒いストリートヘアーがキャメル色のダブルコートにまでかかっている。黒のロングスカートに、その下はベージュのフリンジ付きショートブーツ。荷物は持っていないく、代わりに黒の小さなリュックを背負っていた。

可愛い。俺が今日出会った女性の中ではダントツで可愛かった。まじまじと見つめる俺の視線に、みおが顔を強ばらせながら「あんまり見ないでよ」と恥ずかしそうに呟いた。

「ごめんね、だいぶ待たせちゃったかしら？」

俺の赤くなった鼻を心配そうに見つめる。

「ああ、いや、大丈夫。寒いし、早く中に入ろうか」

人一人分は通れるであろう距離を保ちつつ、俺たちは劇場の中に入った。みおの近くにいただけで、鼓動が高鳴るのを感じる。やっとみおに出会えた。俺が恋焦がれるみおに。喜びと幸せで胸がいっぱいの俺を差し置いて、みおはさっさとチケット売り場に向かう。

今日見る映画は、みおのリクエストでSFアクション物だ。確か

ゲームの原作が劇場版としてリメイクされ、ちょっとした話題を呼んでいる。チケット代を俺が払おうとしたが、みおがお互い学生だし、割勘にしようときかなかったたので、素直にそれに従う。但し飲み物代は俺が払った。

「上映まで後三十分くらいだね……ここで待つ？」

「うん。あ、私お手洗いに行ってくるね」

みおの飲み物を預かると、トイレに向かう彼女を目で追った。手前の男子トイレに間違えて入りそうになり、出てきた男にびつくりされてわたわたしている。

意外と天然さんか？ 俺はみおの行動に笑いながら、ふと手にしたみおの飲み物を見つめた。ストローの先が、グロスか何かでいやらしく光り輝いている。

こ、これは間接キッスのチャンスっ……！？ 俺は生唾を飲み込むと、ゆっくりとストローを顔に近づける。しかし好きな子とのフアーストキスが、このような人知れずの間接キスで良いものだろうか。だ、駄目だ駄目だ！ これではリコーダーの先を舐めるのと同類ではないか！ 俺は他の人に見られていなかったかと、周囲を注意深く見回した。……よかった、俺の変態行為を見られた心配はなさそうだ。

みおが帰ってくるなり、俺たちは上映されるスクリーンへと移動した。場所はスクリーン正面の後ろから二列目。俺はみおが転んでも大丈夫なよう先に行かせる。席に着くなり、みおはダッフルコートを脱いで膝元にかけた。

「いい席が取れて、よかったね」

隠されていたCカップの胸が露になる。赤とグレーのボーダーラインの入ったタートルネックを着ており、そのラインが胸の形を緩やかに表現していて、えっちな。

俺は慌てて視線を逸らすと、自分もジャケットを脱いで、そいつで下半身を押さえ付けた。まずいまずい、こんなので興奮するようじゃ、童貞丸出しじゃないか。俺が下半身を鎮める努力をしているとも知らず、みおは隣でジューズを飲む。

その少し尖った唇にキス出来たら。映画館という薄暗い状況の中、俺とみおは密接して座っている。素晴らしい、夢にまで描いた『映画館デート』そのものだった。もしかしてこれは夢なんじゃないだろうか？ 俺は嬉しさのあまりに頬をつねってみる。痛かった。

まもなくして上映が始まり、一気に館内が暗くなる。俺はちらっとみおの横顔を盗み見た。この暗闇で安心したのか、みおの表情が少し緩んでいるように見える。やばい、可愛すぎる。俺は己の理性と闘いながら、約二時間の映画鑑賞を楽しむ。

line 17・初めてのデート 後編

「はぁー、凄く面白かったね！」

みおが頬を紅潮させて喜ぶ。確かに映画は面白かった。設定も凝っていたし、派手なアクションも十分見応えがあった。あつたが、俺はみおを盗み見ながら見ていたので、きちんとした内容まで頭に残ってなかった。

「結構アクションシーンも凄かったね。みおさんは原作のゲーム知っていたの？」

「ううん。でも、美紀夫がおすすめだからって」

「そっか」

一度俺たちは夕食を食べに駅前へと向かう。先程よりみおとの距離は縮まったが、それでも三十センチ以上はあった。手を繋ぐのは、流石に無理だろう。俺は寂しく行き場のない両手をジャケットにしまい込んだ。

「ご飯どうします？ 何か食べたいのがあったらそれにするけど」

うーんとみおが立ち止まり、考え込む。俺はその間周囲のイルミネーションに目を奪われていた。これは告白するのに、ぴったりの演出ではないか。なるべく人混みの少なそうな、少し離れた所にあるイルミネーションに目星をつけると、そこまでどうやってみおを連れて行こうか検索し始めた。

「私、ハンバーグが食べたいな」

みおのリクエスト通りにハンバーグの店を探す。やがて俺たちはセントラルタワーズ十二階、レストラン街にたどり着くと、ハンバーグ店の最終列に並んだ。土曜日の夕食時ともあって、結構どのお店も並んでいる。薄明るい照明の中、俺とみおは三十センチ以上の隙間をあけて立つ。

「結構混んでいますね、時間大丈夫ですか？」

時刻を確認する。もう夜の八時前だ。

「私は大丈夫。河村君こそ、大丈夫？」

「平気平気、明日は部活も無いし、バイトも午後からですし」

「そっか、でもなるべく早く帰った方がいいよね？ 明日疲れちゃうし」

「日頃から走って体力つけていますし、大丈夫……あの、寮の門限とかはないんですか？」

みおが「あつ」と小さく声を上げて携帯画面を見る。先月発売されたばかりの、最新型の赤い携帯だった。

「ごめんなさい、寮の門限十時なの。ここから三十分かかるから、九時半までには帰ってもいいかしら」

みおが申し訳なさそうに俺に謝る。やっぱり彼女はどこか抜けているようだ。俺はわかりましたと笑って答えた。

二十分程待った後、ようやく席へと案内される。注文を済まし、時刻を確認する。今から食べて、ここを出ると丁度いい時間だった。さっきの所まで戻って、告白する時間はともなさそうだ。

俺はどうしたものかとおしぼりで冷えた手を温めながら、みおの

方を見た。みおも俺の事を見ていたらしく、思わず目が合った。

「……………」

「……………」

みおが恥ずかしそうに慌てて顔を伏せる。俺もあまりの可愛さに直視出来ずに目を逸らす。そう言えばみおと向かい合ったのは、これが初めてだ。俺は手で顔を隠しながら、みおの顔を観察した。ずっと帽子を被ったままだが、やっぱり可愛い。両手をテーブルの下に隠して、恥ずかしそうに俯いている。

どこが美紀夫とそっくりだ、みおの方が百倍可愛いじゃないか！
そう認識すると、俺はメニュー表で自らの顔を隠した。

「わ、悪い。正面は苦手だったんだよな」

「う、うん。ごめんなさい」

みおのかすれた声に顔を上げる。すると俺はメニュー表の僅かな繋ぎ目から、みおの顔が見えるという大発見をした。

こ、これはいいぞ！ みおがこちらに気付いてないのをいいことに、俺はメニュー表に向かって喋り出した。

「あの、そう言えばみおさんは何処の女子校なんですか？」

今一番知りたい情報だった。何故なら、みおの制服姿を思い浮かぶことが出来るからだ。みおが困ったように水を飲んでから答える。

「……………さ、桜ヶ丘女学院……………」

「さ、桜ヶ丘！？」

桜ヶ丘女学院と言えば、県内でもトップクラスの有名校だ。全国

でも少しは名が知られているんじゃないだろうか。俺はあまりの学力の差に返す言葉がなかった。

「で、でも全然凄くないよ。私、その中でも落ちこぼれクラスだから……」

目を伏せ、物悲しそうに手でくると髪を巻きつける。そ、そんなにみおが賢かったとは。自分との差が歴然とし、俺はとんでもない高値の花に恋をしてしまったのだと実感した。

「そ、そうなんですか……」

「う、うん……」

気まずそうに顔を背ける。俺は桜ヶ丘の制服を細部まで思い起こそうとした。確か紺色のブレザーに、赤のリボンとシンプルなデザインだったはずだ。……うん、悪くない。悪くないぞ、俺の好きなブレザーだ。

「部活は何かしているんですか？」

みおの目が宙を泳ぎ、ただ一言「何も」と呟かれた。まずい、ここは話題を変えたほうがよさそうだ。俺は慌ててみおに興味の話をふった。

「そうね……やっぱり面白い物かな？　可愛いアクセサリーとか、ついつい欲しくなるかも」

そう言っただけ胸元にぶら下がっているペンダントをつつく。そ、それはネックレスが欲しいと言う合図なのか。俺がペンダントを凝視していると、上から声がした。

「お待たせいたしました。スペシャルハンバーグセットです」

店員の声に慌て顔を上げ、何事もなかったかのようにメニュー表をしまった。スペシャルなだけあって、結構な量だ。二人で「頂きます」と言い合ってから食べ始める。うん、肉汁がジューシーで美味い！

みおも火傷に気を付けながらゆっくり食べ始める。左手で髪の毛を押さえながら食べる仕草が、何とも愛くるしい。やがてみおもスペシャルセットをぺろりと平らげてしまった。

「みおさん、結構食べるんですね」

「あ……ご、ごめんなさい、お腹空いていたからつい……」

俺も驚いてみおの皿を見る。このセットは男の俺で丁度いいと感じた量だった。細い人に大食いは多いと聞くんが、ひよっとするとみおもその類なのかもしれない。

食事代も割勘にして外に出ると、時刻はもう九時を回ろうとしていた。みおが再びお手洗いに行き、俺も食後のブレスケアもかねてトイレへと向かう。尿意を済ませ、口臭もかき消した所で俺は覚悟を決めた。時間がないが、いくしかない。告白するしかない。今度みおがいつ会ってくれるのかも分からないし、あんなエリート校なら冬休みもまともにあるのかさえわからない。鏡を見つめ二、三発頬を叩いてからみおと合流した。

しかし、どのタイミングで言うべきなのだろうか。俺は高鳴る心臓を押さえつけながら下りのエレベーターを待った。今か今かと震えだっていると、みおが何かを発見した。

「ここ、展望台もあるんだ」

エレベーター横に彫られた文字を読み上げる。そうか、展望台か。確か十五階から名古屋駅を一望出来るお手軽スポットだが、この時間帯は下のイルミネーションも見られるかもしれない。

「時間ないけど、行くだけ行ってみる？」

うん、と恥ずかしそうに頷く。やべえ、今の俺、声が震えていたのかも知れない。手汗をみおにバレないよう、ジーパンの生地を擦りつけると、俺たちは予定を変更して上行きのエレベーターに乗り込んだ。この狭い箱では嫌でもみおに接近してしまう。俺は極力彼女に触れまいと体を仰け反らせた。

十五階の展望台までやってくると、ガラス張りの窓一面にイルミネーションが広がっていた。十五階は意外と高く、先々の住宅街はおろか、ライトアップされた名古屋城までここから伺える。みおが嬉しそうに窓辺に近づく。ムード演出の為か、照明も足元のみと必要最低限にとどめられており、周りもよく見るとカップルだらけだ。

俺は薄暗い中、ちらつと腕時計を見た。もう九時を過ぎている。ここにいられるのも、後十分くらいだろう。俺は深呼吸して鼓動を少しでも押さえ込もうとした、落ち着かせようとした。ここは行くしかない、行くしかないんだ。俺は唾を飲み込むと、隅の方で街を眺めているみおにゆっくりと近づいた。少しの距離を置いて、隣に立つ。全身に鳥肌がたった。手や、足が緊張で震え上がった。銀色の手すり越しにみおにまでこの緊張が伝わったのか、先程から全身が硬直したかのようにピクリとも動かない。俺は意を決して、周りの空気を吸い込んだ。そして、告白をしようと彼女に話しかけた。

「あ、あの……み、みおさん」

声の震えが、自分の耳に痛いほど伝わる。胃の辺りがせり上がり、先程食べたハンバーグが逆流を起こしていた。あそこもすっかり緊張で縮み上がっていた。みおは聞こえているのか、いないのか、こちらに顔を向けようとはしない。それどころか石のように動かなくなってしまった。

「そ、その……」

もう涙までこみ上げて来そうだった。最初の一文字が中々口から出てくれない。頑張れよ、俺。たった一言「好きだ」と言うだけだろうが。

やがて何分くらいお互い立ち尽くしていただろうか。みおがやつと小さな声で「何？」と聞き返してくれた。もう時間もないんだ、これ以上長引かせる訳にもいかない。俺は汗でべとべとした拳を握りしめると、ようやく自分の想いを口にした。

「す……好きです、みおさん。俺と付き合ってください！」

言えた、ついに言ったぞ。俺の告白はみおの耳に届いたのだろうか。みおは何と言って返してくれるのだろうか。緊張ですっかり収縮しっぱなしの身体を他所に、俺はどんな返事がきてもいいよう足を踏ん張らせた。

みおは何も言わない。が、微かに震えたっているのが分かった。

「も……これ以上は……無理っ……！」

おえっと、みおが気持ち悪そうに低い声を出し、口を両手で押さ

え込む。しゃがみこみ、涙を大量に流しながら何かを必死に耐えている様子だった。

「お、おい……大丈夫か」

みおの突然の行動に戸惑う。ど、どうしたんだ？ 気分が悪いのか？ 俺がみおに触れようと手を伸ばした途端、物凄い力で叩かれた。

「……………っ！！」

突如立ち上がり、顔も見ずにエレベーターへと走り出す。俺は今しがた何が起こったのか理解出来なかった。どうして？ 何故？ 何が起こったんだ？

叩かれた右手がじんじんと痛む。ただ一つ分かったのは、みおに拒絶されたという事実だけだった。

line 18・自己嫌悪

一人家の前まで着き、いつもどおり自転車をとめたが、俺は玄関の戸を開けるのを躊躇った。もう夜の十一時を過ぎている。

みおに告白した後、俺はしばらくあの場から動けずにいた。

『も……これ以上は……無理っ……』

あの言葉と行動が意味するのは、拒絶だった。気分が悪くなったのも、男嫌いのみおの条件反射なのだろうか。俺は叩かれた右手を押さえる。痛い、痛い。心が痛くて涙が溢れ出る。

悲しかった。みおの気持ちを分かってあげられなかったのが、悔しかった。自分の都合で気持ちが先走った結果、みおを傷つけてしまった。悲しませてしまった、怖がらせてしまった。

俺はもう訳がわからなくなって、人目も気にせずその場でわんわんと泣き出した。という訳か、涙が止まらなかった。やがて警備の人が駆け付けて、俺を事務室へと連れて行った。連れて行ってくれたおじさんが、何も言わずに温かいココアを出してくれ、更に泣いた。

「君、家はどの辺りかな？」

帽子を被り直しながら尋ねる。俺はしゃくり声で何とかM町だと告げると、警備の人が「終電が無くなるから早く帰った方がいい」と言った。それから有無を言わず電車に乗せられ、俺は自動的に自宅までたどり着いたのだった。

こんなに泣き枯らしたのは、初めてかもしれない。俺はふやけた臉を持ち上げ、外から自分の部屋の窓を見た。うつすらと、電気ス

タンドの照明が点いている。考二がまだ起きて勉強している証拠だった。早く寝る俺に気遣い、孝二は十時を過ぎると部屋の電気を消して、わざわざ電気スタンドの明かりで勉強する。今日は俺がまだ帰って来ていないのに、いつもの癖で勉強する考二が微笑ましかった。

この泣き腫らした無様な俺を見せるのは嫌だが、いつまでも寒空の中、突っ立っているわけにもいかない。寒さで凍え死んでしまう。俺は静かに玄関の戸を開けて中に入ると、母親が一人テレビの前で座っていた。

「礼ちゃん、随分と遅かったじゃない」

俺の姿を見るなり、母親がこたつから這い出て玄関まで駆けつけた。そして俺の無様な姿を見るなり、何も言わずに玄関の戸を閉める。

「シャワーでも浴びてらっしゃい。ご飯は食べてきたんでしょ？」

母親に何と返してよいのかわからず、そのまま黙って家に上がる。風呂場に寄ることなく二階に上がり、自分の部屋の襖を静かに開けた。

「随分遅かったね、礼二兄ちゃん。ところで僕のバッグ、勝手に使ったでしょ」

考二が顔も上げずに問う。俺は無視してショルダーと袖がぐしょぐしょになったジャケットを床に脱ぎ捨てると、着替えもせずにはッドに潜り込んだ。

翌朝、俺は十時過ぎに目を覚ますといつもより視界が狭いことに気付く。泣き腫らした一重の瞼が重くのしかかっているせいだ。下に考二がいらないのを確認して二段ベッドから降りる。昨日自分が脱ぎ捨てたジャケットはきちんと帽子掛けにかけられており、袖の所が鼻水でカピカピになっていた。

やはり昨日の出来事は夢じゃなかったのか。俺は考二のシヨルダ―バッグから携帯電話を取り出すと、画面を開きてメールを確認する。勿論みおからのメールはない。

「みおさん……」

とにかく彼女に謝っておこうと、俺は謝罪のメールを打ち出した。

『 件名：昨日はごめんなさい。』

本文：昨日はすみませんでした。みおさんの気持ちも考えずにあのような行動をしてしまつて……ごめんなさい、本当に不快な思いをさせてごめんなさい。門限には間に合つたでしょうか？ 』

全文を打ち終えて送信する。昨日の出来事からして、返信が返ってくるとは到底思えなかった。俺は携帯すら床に投げ捨てると、シヤワーを浴びに風呂場へと向かう。途中リビングで母親が心配そうに目を配らせていたが、黙って通り過ぎた。

「礼ちゃん顔、お化けみたいーい」

「おい、返事くらいしろよ！」

後ろで兄弟たちが何か言っていたが、俺は形振り構わず戸を閉める。洗面台の鏡で初めて出くわす自分の姿に、また泣きそうになっ

た。何て情けない面構えだ、何て情けない男なんだ。何が告白だ、何が当たって砕けるだ。砕けたのはみおの心じゃないか、そうだろう。どうして俺は、あの時みおの気持ちを察してあげられなかったんだ、考えられなかったんだ、無視したんだ。

激しい自己嫌悪に苛まれる。俺はがむしゃらに頭を掻きむしった。

line 19 恋なんてするものか

今日の午後はアルバイトを入れてあつたが、とても出勤する気になれない。この腫れぼった顔では行けない。母親に「今日は熱が出て行けなくなった」とバイト先に連絡を入れてもらい、俺は今日一日布団の中で過ごしていた。

「礼ちゃん、朝から何も食べてないでしょ？ お母さん何か作るから、とにかく食べなさい」

夕方になって母親がベッドの下から心配そうに声をかける。俺は顔を向けるのも面倒で無視し続けた。うるさい、もう俺に構うな、ほおつて置いてくれよ。やがて考二が来たのか、母親と一緒に黙って部屋から出ていった。

しばらくして、俺の机の上に温かいビーフシチューが静かに置かれた。朝から飲まず食わずだった俺は、ベッドから下りると急いで全部平らげてしまった。お盆に付箋メモが貼つてある。

『食事くらいはしなさい。でないと、片付けられないでしょうが』

この家にいる限り、引きこもりなんて芸当はとてもじゃないができないな。俺は母親のメモに笑うと、お盆を持ってキッチンへと向かった。

月曜日。顔の腫れも引き、今日は朝練に出るべく身支度を整える。正直学校なんて、部活なんて行く気にはなれないが、部長の俺がさぼる訳にもいかない。昨日はアルバイトすら怠けてしまったので、

もうこれ以上責任逃れはしたくなかった。

みおからの返信はなかった。わかっていた。自分は拒絶されたのだから。きっぱり断られるかより、酷い仕打ちだ。俺は自分を嘲笑うと、のろのろとペダルをこいだ。

いつも朝練時に乗る電車の中に、美紀夫の姿はなかった。寝坊か？ あいつが部活をさぼるなんて珍しいな。俺は一人ヘッドフォンをつけて、遠くを眺めた。

朝練どころか、美紀夫は学校にすら来なかった。担任の先生が言うには体調不良らしい。美紀夫が学校を休んだのも、これが初めてだった。もしかして、みおが俺の告白がきっかけで体調を崩したから、美紀夫まで一緒に寝込んでしまったのかもしれない。双子は妙にシンクロするとも言われているし、そうだとすれば原因は全て俺にある。

まだ少し赤い目元を擦り、黒板の羅列をノートに写す。俺は、みおに取り返しのつかない事をしてしまった。美紀夫にもみおは男嫌いだから、トラウマがあるからやめておけと忠告されていたにもかかわらずに。女を傷つけるなんて、男として最低だ。俺は最低な男だ。自分のことしか、自分の欲望のことしか考えられなかった最低のクズだ。叩かれた右手を責め立てるかのように、何度もボールペンで刺す。

「お、おい、礼二何やってんだよっ！」

隣の高橋が俺の自虐行為を止めに入った。もう俺は恋をしない、恋なんてするものか。誓い立てるかのように、保健室に連れて行かれる中、何度も心で呟いた。

line20・礼二の異変

おかしい、礼二のタイムが急激に落ちてきている。彼の異変に気付いた及川は、一人部室で記録ノートを見つめた。他の部員達は、ウォーミングアップに出発した頃だ。

ノートを見る限り、礼二のタイムは十二月十九日の月曜日から急に落ち始め、冬休みに入った今でも継続していた。最初は一時的にタイムが落ちただけだと思い、及川は気にもとめなかったが、流石に五日も続くと心配になる。これでは後輩のタイムと殆ど変わらないじゃない。

一人5リットルもの水筒を持って水場に向かい、部員の為に飲水を補給する。そこへスポーツドリンクの粉を一袋だけ開ける。冬場は半分で充分だった。この所、礼二に話しかけてもうんとか、はあとか、欠伸返事の一言しか返ってこない。心、ここにあらずといった状態だった。それに礼二の右手に巻かれている包帯も気になる。

自分の知らない所で、何かあったんだ。そうしか思えない。しかしそれが何なのか、礼二に直接問いただしてもよいものだろうか。及川は水筒に溜まっていく水を見つめながら、一人考え込んでいた。

「及川、こんな所にいたのか」

元部長の長谷川先輩がこちらに近づいてきた。先輩がいるって事は、もう何人かは走り終えているのか。及川は自分の仕事の遅れに気付き、慌ててグラウンドに戻ろうとした。

「すみません、遅くなってしまつて」

「ああ、大丈夫大丈夫。俺、今日は勝手に二週減らして走ったから」

そう言って及川の持っていた水筒を取り上げる。さすが先輩。男
なだけあり、こういうのを率先して手伝ってくれるのは嬉しい。

「何かあったのか？考え事していたようだけど」

先輩が心配そうに振り返る。及川は素直に礼二の状況を述べた。

「俺も少し気になっていたんだ。何だか以前の河村と違う気がして
な」水筒を部室前の椅子に置き、ついでに自分もスポーツドリンク
を飲む。「タイムもそれだけ落ちているとなれば、相当問題だな。
精神面が弱っているのかもしれない」

「精神面ですか？」

「ああ、特に長距離走なんかは気の持ちようでタイムが左右する。

河村に何かあったのは確実だな」

「……それを、本人に聞くべきでしょうか？」

先輩は難しい所だと言って紙コップを潰した。

「もう少し待ってみた方がいいかもしれない。俺からも聞けそうだ
ったら聞いてみるよ。誰だって落ち込む時はある、そう気にするな。
本人はちゃんと部活動に参加しているんだ。まあ、さぼるようにな
ったら部長失格だな」

はははと、乾いた笑い声を上げてグラウンドに戻っていく。他の
陸上部員達もウォーミングアップを終え、皆グラウンドに戻ってき
た。そろそろと部室前に集まり、みな各々水分補給を行う。

「はい、礼二。お疲れ様」

「ああ……さんきゅ」

目も合わさず紙コップを受け取る。やっぱり変よ、いつもの礼二じゃない。先輩は気にするなと言ってくれたが、自分はいても経ってもいらなかった。そういう性分なのかもしれない。及川の心配を他所に、礼二はさっさと水を飲み終わるとグラウンドへ戻ってしまった。ふと隣にいた小柄な久瀬と目が合う。彼もまた、礼二の様子を心配しているようだった。

「久瀬君、礼二と何かあったの？」

久瀬は俯き、とても悲しい顔をした。そしてその件に関しては口を開かまいと、首をふって走り去ってしまった。

久瀬は何か知っているのだ。及川は遠くから久瀬と礼二の二人を見比べる。あんなに仲がよさそうだったのに、二人の間には少し距離があるように感じられた。

喧嘩でもしたのかしら。だとしても、礼二だけのタイムが極端に落ちるのはおかしいのではないか。及川は午前の部活動が終わったら、久瀬を捕まえて直接聞いてみようと思った。

line 21・似た者同士

約四時間の体力強化メニューを終え、午後一時に陸上部は解散となった。男女交代ずつ部室で着替え終わり、部長の礼二が明日の練習開始時刻とお疲れ様を告げた。

「礼二。ちょっと部室を掃除したいから、今日は鍵、私が預かってもいいかな？」

礼二から部室の鍵をもらうと、明日には返すからと言って礼二の後ろ姿を見送る。その後を歩いて行こうとする久瀬を、及川は呼び止めた。

「久瀬君、ちよつといい？」

急に話しかけられた久瀬はどうしようと礼二に助けを求めようとしたが、彼はとつくに校門近くまで歩いてしまっていた。諦めたのか、及川の呼び止めに答える。

「何？」

「礼二の事で、話があるんだけど」

久瀬を部室の中に連れていくと、わざわざ記録ノートを広げて、礼二のページを指さす。

「礼二のタイムがここのところ酷く落ち込んでいるの。原因、何か知っているんでしょう？」

更に内側から鍵をかけ、久瀬が簡単に部室から逃げられないよう

にする。

「知っているよ。知っているけど、知ったところでどうするつもりなのさ」

あまりの徹底ぶりに気分を害したのか、久瀬が眉をひそめ、挑発的に尋ねた。

「どうするつもりって、このままタイムが落ち続けるのを黙ってみてられないわ。手助けできるようだったら、私も協力したいし」

久瀬はふん、と鼻で笑った。

「及川さんには無理だよ。僕にも無理。礼二君が自分で立ち直るのを、待つしかないんだ」

「無理って決めつけないでよ」久瀬の判断に及川は反論する。「ねえ、あなた達に何があったの？ 喧嘩でもしたわけ？」

久瀬は目を逸らすと、鞆を床に置き、一人奥の丸椅子に腰掛けた。

「喧嘩はしてないよ。僕も礼二君も、普通に接しているじゃない」「でも以前とは違う。それくらい私にもわかるわよ」

一番仲の良い久瀬にさえ、礼二はあまり顔を合わそうとしなかった。及川は仁王立ちで久瀬を見下ろす。

「何がわかるって言うのさ。いいから礼二君の事はそっとしておいであげてよ」

「ほっとくなんて出来ないわ！ 何があったのか教えて。このままじゃ、礼二は部長として失格よ！」

しばらくお互い睨み合った後、久瀬が仕方ないなといった表情で
呟く。

「じゃあ教えてあげるよ。礼二君は、ふられたんだ。僕とそっくり
な顔のおおにね」

「ふられた？ …… そっくりな顔って、どういう事よ」

「双子なんだ。学校は違うけど、僕には双子の姉、みおがいる。そ
のおおに、礼二君は告白して、ふられたんだ」

及川はびっくりしてもう一度久瀬の顔をよく見た。久瀬にそっく
りな姉がいるとは思ってもよらなかったし、初耳だ。

「ふられたって、失恋したってこと？ それであんなにへこたれて
いるの？ …… 何だ、心配して損したわ。馬鹿らしい」

及川は呆れてノートを見直した。しかし、久瀬が怒って及川を睨
みつける。

「馬鹿らしいって、あんた、告白した事あるの？ 人を傷つけて、
自分も傷ついた事あるの？ みおは男性恐怖症だったんだ。勿論止
めたよ、みおはやめとけて。どうせ敵いつこないって。でも、礼
二君はみおの事が、好きで好きでしやうがなかったんだ。気持ちを
伝えたくて、しやうがなかったんだ。その結果ふられたとしても、
それを及川さんは自業自得だって、笑うの？」

普段の久瀬からは想像出来ない敵意丸出しの目つき。及川は久瀬
にこんな一面もあったのかと、先程から驚かされてばかりだ。

「笑うわけじゃない。相手に自分の気持ちを伝えるのはとても

苦しいし、誰だって怖いわよ。でも、それをいつまでも引きずっているようでは、他の部員にも示しがつかないわ」及川はノートをしまうと、振り返った。「久瀬君だって、このままじゃ駄目なのはわかってるでしょ？」

久瀬は返す言葉がないように黙って俯く。彼もわかっていているはずだ。近くにいる人間ほど、一緒にいて苦しいはずだった。辛いはずだった。しかし、どうすることも出来ない。これは本人の問題だからだ。

それにしても久瀬の姉、みおの存在が気に食わなかった。久瀬の顔立ちからして、相当な美人なのは安易に想像出来る。要は美人のみおが、かつこよくもなく、悪くもない礼二をふっただけの話。男性恐怖症がどれほど深刻なものなのかわからないが、女の自分からすれば単なる質の悪い女だ。悲劇のヒロインでも演じているというのか。

「ねえ、そのみおって子は、今どうしているの？ ふった癖に、礼二みたいに傷ついているわけ？」

何だか許せなかった。姿の見えないみおに腹が立った。自分より綺麗で可愛いであろう人物が、礼二の心をかき乱す。それはまさに自分が礼二にしてやりたかった事、いい加減気付かせてやりかった事。なのに自分の知らないうちに先を越されてしまった。及川は悔しそくに唇を噛み締める。

久瀬は及川の質問には答えようとせず、逆に質問を投げかけた。

「及川さんも好きなんだよね？ 礼二君のこと」

お見通しだったよと言わんばかりに久瀬の口元が笑っている。先程から見せてくれる彼の表情は、どれも礼二と一緒にいる時には見せない表情だった。普段の久瀬は猫を被っていたというのか。

そうよ、確かに礼二の事が好き。久瀬の言うとおりだった。

「……質問に答えてないわよ。みおって子はどうしているわけ？」

「さあ、別に及川さんがそこまで知る必要もないでしょ」

ふん、とそっぽを向く。

「そうかも知れないけど……」

部室に連れ込んでから、久瀬が怒っているようで相手にしづらい。及川は思わず視線を逸らした。何故、彼は怒っているのだろうか。自分が礼二を必要以上に心配しているからなのか。それとも同じ顔のみおに……？

「及川さんは、礼二君の何？ 彼女でもない癖にお節介しないですよ。自分の気持ちも伝えずに、あんたがどうこう口出しするのはおかしいじゃない」

大人しい久瀬が、ここまで反論してくるとは思ってもよらなかった。確かに自分は陸上部のマナージャーであって、礼二の彼女でも何でもない。ただの友達と言うか、知り合いなのは十分に理解している。今の関係を崩したくないから、このままでもいいと思っていた。しかし、久瀬はそれを許せないらしい。友達の分際で、でしゃばるなど言いたいらしい。

もしかして久瀬は自分に、姉のみおに嫉妬しているんじゃないだろうか。女であることに対して。

及川はゆつくりと久瀬に近づいた。男にしては長いまつ毛、大きな瞳、綺麗な顔。久瀬が自分と同じ心境で怒っているのなら。怒っているのなら、答えは一つだった。

「もしかして、あんたも礼二の事……好きなの？」

line 22・負け組同士

校門から数百メートル下った所で、俺は美紀夫が後ろにいない事に気付いた。少し待ってみるが、校門から出てくる気配もない。

「あいつ、どこ行っただんだ？」

面倒だが、そのまま置いて帰る方が面倒になりそうだ。俺はもう一度坂を上り直して、校門をくぐった。部室の前まで戻ると、外の椅子に長谷川先輩が目をとじて座っている。俺に気付いたのか、目を開けて立ち上がった。

「……よお」

先輩はゆっくりとした動作で、グラウンドに出ると手で合図した。よくわからなかったが、ここは先輩の指示に従う。

「先輩、美紀夫見かけませんでしたか？」

「久瀬なら及川と部室を掃除している」何故か悲しそうに目を伏せた。「お前、最近元気ないな。どうした？」

先輩の方が元気なさそうに見えたが、俺達はゆっくりとトラックラインに沿って歩き始めた。

「すみません、ちょっとプライベートでいろいろあって……」

みおの表情を思い出す。まだはつきりと心に残っていた。

「もしかして河村、お前もふられたのか？」

先輩のストレートな質問に、俺は動揺を隠せなかった。思わず足が止まると、先輩が「まあまあ」と軽く背中を叩いて歩行を促す。

「……ふられました。いえ、傷つけました」

「そうか。こういうのは、男の方が結構引きずるとも言っしな」

苦しそうに顔を歪める。お前もってことは、先輩も及川にふられた事になる。

「……先輩も、ふられたんですか？」

「ああ、たった今な」

そう言って部室の方をちらつと見た。そうか、及川の奴、美紀夫に告白でもしたのか。鍵を渡して欲しいだなんて。まさか部室でエッチな事まではしないよな。

「河村がどんな風にふられたかは知らんが、もう少し元気出せ。みんなお前を心配している。部長のお前がへこたれていちゃ、他の部員にも示しがないだろ」

ばしっと、気合を注入されるように強く叩かれる。その手の平から無理にでも、俺を励まそうとしてくれるのが伝わった。

「……出来るだけ、早く立ち直れるように頑張ります」

「そうだ、この経験を次に生かせればいいんだ。それなら失敗しない」

「そうですね」

先輩自身も及川から立ち直ろうとしている。俺達は、仲間を見つ

けて互いを慰めるように歩いた。その場に留まれば、どちらかが泣いてしまう気さえした。男二人、肩を並べてグラウンドを歩く。傍から見たらさぞ滑稽に見えるだろう。やがて足は駐輪場の方へ行く。

「ここまで付き合わせて悪かったな。俺、自転車通学だからさ」
「いえいえ」

何だか先輩に同情している内に、校門とは正反対の所まで来てしまった。先輩が自転車のカゴに荷物を入れ、俺に乘れと顎で指す。

「駅まで乗せていってやるよ。久瀬はもう諦めな」

確かに二人の邪魔は出来ない。美紀夫にもようやく春が来たか。俺は先輩のたくましい肩をがちり掴むと、寒空の下二人乗りでみかん畑を突っ切った。

「何でそうなるのさ。あんた、頭腐ってんじゃないの！」

及川の一言に久瀬が真っ赤になって立ち上がり、鞆を持って部屋の入口へと向かった。
がちやがちやと力尽でドアを開けようとする。

「ごめん、今のは言い過ぎたわ、謝る。でも、礼二の事でどうしてそんなに怒るのよ。久瀬君も変よ」
「……………」

無理だと判断したのか、今度は窓を開け、そこから出ようと窓のさんに足をかける。

「全く……こっちの身にもなつてよ。別に及川さんの気持ちに文句を言うつもりないけど、これ以上話をややこしくしないで」鞆を抱え、悲しそうに振り返る。「この話は無かったことにしよう。僕も少しむきになりすぎた」

「……わかったわ。私も久瀬君に喧嘩売るつもりもないし。ただ、礼二が早く元気になって欲しいだけよ」

「じゃあ、お互い友達想いと言う事で」

久瀬は勢いよくさんから下の地面に飛び降りて、そのまま振り返りもせずに走って行ってしまった。流石にさっきの発言は言いすぎたか。及川は開けっ放しの窓を閉めると、静かになった部屋を見渡した。湿っぽく、空気がひんやりとして肌寒い。

久瀬が礼二の事、好きな筈もないか。久瀬は可愛い顔をしているが、一応男の子だ。特に女扱いを毛嫌いしている彼が、男を好きになるとは思えない。きっと、男性恐怖症の姉に攻め寄った礼二に対して、弟として不満を抱いていたのだろう。

及川は一人椅子に腰を下ろした。さっきまで久瀬が座っていたので、ほんのりと温かい。

「告白、かあ」

先程言われた久瀬の言葉が頭を過ぎる。悔しかった。先を越された悔しさ、所詮友達止まりでしかない自分が憎たらしかった。涙が浮かび、慌てて指先ですくう。それから鏡を取り出して、自分の姿も確認した。今日は黄色の花の付いたピン止めで、可愛くしてきたつもりだった。

告白、してみようかな。久瀬に単純に見透かされ、言われっぱなしで悔しいのもあるが、考えてもみれば礼二はふられたのだ。今がチャンスなのかもしれない。もう一度前髪を止め直すと、簡単に部屋を整理整頓し始めた。

line 23・新人アルバイト

俺は一人帰りの電車の中、複雑な気持ちで外を見つめていた。及川も、美紀夫の事が好きだったなんて。仲間はもう俺と先輩だけになっちゃったのか。

俺は美紀夫に『先に帰る』とメールを打つと、ついでに受信ボックスを開いた。みおとのメールが百件近く残っている。こんなにメールしていたのか。俺はクリアキーを押すと携帯をポケットの中にしまい込んだ。あれから、みおとは一通もメールしていない。

明日はクリスマスイブだ。先週バイトをさぼった俺は、あの後何の躊躇いもなく二十四日にシフトを入れた。とにかくもう、みおの事は忘れよう。いつまでも引きずっていては駄目だ、みんなにまで迷惑をかけてしまう。

自宅に帰った後、遅い昼食を済ませ、シャワーを浴びて私服に着替えた。紺色のダウンジャケットを着てバイト先へ向かう。冬休みは、長く働けるので稼ぐのにはもってこいだ。俺がスーパーの従業員専用出入口の近くに自転車止めると、見覚えのある黒髪の女性と目が合った。長いストレートの髪を後ろで結い上げているのは、紛れもなく副学級委員長、遠藤薫だった。

「あ、河村君。こんにちは」

「こんにちは……って、遠藤もここで働いていたのか？」

俺は驚いて遠藤の私服姿を見た。スラットした足にブーツがよく似合う。暖かそうな白のダウンジャケットを羽織っていた。

「この冬休みからね。今日は同じ時間帯だから、よろしく」

そう言うなり荷物を持って、先に中に入ってしまった。冬の短期募集で入ってきたのか？ それにしてもあの真面目な遠藤が、アルバイトを始めるなんて思いも寄らなかった。

俺と遠藤、それに雅美おさんと新人の男の子の四人が、裏のバックヤードに集まった。遠藤は先週からここで働き始めたらしい。真新しい緑のエプロンがよく似合っている。

「今日は明日のイブに向けての品出しがメインだから、なるべくこの表で個数が多い所から出していつて頂戴。礼ちゃんは、その子とお友達なのよね？」
「ええ、まあ」

友達どころか知り合いのレベルだが、俺が曖昧に笑っている内に、遠藤とペアを組むことになった。背の高さと経験からして当然の組み合わせか。

「じゃあ、早めに食品コーナーの所から補充していこう。もうすぐ店が込み合う時間帯になるから」

俺が率先してダンボールを運び、遠藤に指示していく。クラスメイトと一緒に働くなんて、妙な気分だった。それも遠藤とは中学から一緒だが、同じクラスになった事もなく、あまり話した事もない。いつもは長い髪を垂らしている為、遠藤のポニーテール姿を見られるのは大変貴重なものかもしれない。

俺がポニーテール姿に見とれていると、遠藤が俺の右手を見て気付いた。

「河村君、手怪我していたんだよね。そんなに荷物持って、大丈夫？」

「平気平気、もうそんなに痛くないからさ」

ぶんぶんと目の前で振ってみせる。あの時自虐行為に走ってしまったとはいえ、もう傷は治りかけていた。俺の心の傷の方がよっぽど重症らしい。

「あまり無理しないでね。私も河村君の分まで手伝うから」

「ありがとう。それにしても、遠藤がバイトしているとは、意外だったな」

「そう？ まあ学校自体アルバイト禁止だからね」遠藤がはっとして顔を上げた。「勿論ばらすつもりはないから安心して。河村君はいつから始めていたの？」

「俺は夏休みからだな。その延長で、学校のある日は朝だけ品出ししていたんだ」

「そうだったの。学校に来る前に、人仕事してきていたんだね。確か河村君、部活もやってなかった？」

「ああ、陸上部だ。今日も朝から走ってきた所だよ」

「すごい、よく身体が持つわね。流石男の子だわ」

さつきから俺、遠藤と楽しくお喋りしていないか？ また湧いてきそうな気持ちに、俺は目を背けた。もう恋なんてしないと、誓ったばかりではないか。また俺は、女の子を傷つけるつもりか。

そんな心中を知る余地もなく、遠藤は尊敬の眼差しで俺の指示に従う。遠藤は容量のいい奴で、もうコツを掴んだのか、次々と商品を棚に陳列していった。そのおかげもあってか、俺達のペアは予定よりも少し早めに終わった。

「それじゃ、河村君。また明日ね。お疲れ様でした」

「ああ、お疲れ様」

明日も遠藤と一緒に、何だか少しやりづらいな。俺は頭を掻くと自転車に乗り、家路を急いだ。明日は朝から昼過ぎまでバイトを入れてある。今日はもう早めに寝てしまおう。

携帯を開くと、一通新着メールが届いていた。美紀夫からだ。

『 件名：バイトお疲れ様

本文：今日は一緒に帰れなくてごめん、及川さんに捕まったよ（笑） 明日もバイトかな？ よかったら家でゲームしようよ 』

そう言えばこの所、美紀夫の家に遊びに行くのを避けていた。寮にいてみおと鉢合わせる筈もないのだが、みおを傷つけてしまった責任を感じて、何となく美紀夫にも近寄り難かった。これは、そんな俺を励ましてくれようと誘っているのか。美紀夫には詳しい経緯まで話していないが、みおから何か聞いているのかもしれない。

俺は『夕方からなら大丈夫』とメールを打つと、明日は美紀夫にケーキでも買って行ってやろうと思った。ついでに及川の事を祝つてやるつもりだ。それくらい之余裕は、持ち合わせていた方がいい。俺は右手の包帯を、きつく慎重に結び直した。

line 24・サンタの赤いブーツ

朝五時に目覚ましが鳴ると、俺は素早く止めて布団から這い出る。冷たい空気の中、下で寝ている弟が起きないように、ゆっくりと着替えてリビングに向かった。

「おはよう」

「おはよう、礼ちゃん。今日もバイト入れたのね」

母親がそう言ってカレンダーを見た。今日はクリスマスイブだ。

「まあね。親父の方は、準備出来たのか？」

俺は寝室の方に目をやった。昨日親父は下の兄弟達の為に、クリスマスプレゼントを買いに行っていたらしく、夜遅くに帰ってきていた。

「昨日散々お店回って何とかね。礼ちゃんの方もちゃんとあるから」
「俺のはいいよ、もうサンタを信じている年じゃないし」母親が焼いてくれたトーストをかじる。「回せそうだったら、下の兄弟達にあげてくれ」

「そんな事言つて、お父さん悲しむわよ。受け取るだけ受け取りなさい」

「……わかったよ」

どうせ親父の事だ、参考書なのは目に見えている。俺は適当に返事をする、バイト先へ自転車を走らせた。

今日は俺と遠藤、雅美おばさんの三人で朝の品出しをするらしい。店が開店したら、もう二人男手が来ると雅美おばさんが言った。

「じゃあ遠藤さん、昨日と同じ所をよろしくね。礼ちゃんも頑張つて！」

俺に意味ありげな視線を投げかけると、雅美おばさんは一人張り切つて、ダンボールが山積みされたワゴンを引っ張っていく。

「じゃ、俺達も運ぼうか」

残された俺達も足早に作業に取り掛かる。全く、雅美おばさんは余計な事をしてくれるなあ。俺は遠藤と適切な距離を保ちつつ、開店までにメインの品出しを終わらせようとした。

「ねえ、ここはどう陳列した方がいいかしら」

遠藤がお菓子のブーツを片手に悩んでいる。その仕草は可愛らしいが、一々陳列に戸惑つていては終わる物も終わらない。俺は仕方なく遠藤の分を先に終わらす事にした。

「そこにもう一段並べるしかないな。通路は狭くなるが、在庫を出るだけ外に出しておきたい。お菓子のブーツなんて、明日までしか出せないからな。俺も手伝うよ」

「わかった。河村君の方は大丈夫なの？」

「こつちを先に終わらせる。それから手伝ってくれ」
「了解」

遠藤が楽しそうにブーツを陳列させていく。子供の頃は、こんな

子供騙しの詰め合わせでも喜んでいたっけ。

「これ、ずるいと思わない？　だってブーツの筒の部分にしか、お菓子は入っていないのよ？」

遠藤が笑いながらお菓子の袋を数えている。

「確かに。でも、子供の頃は買ってもらえて嬉しかったなあ」

「こんな素敵なブーツに入っていたら、今でも欲しくなっちゃう。最近のは底上げされているのもあるけど、これはどうかしら」

ブーツを振ったりして、確かめようとする。その時手が滑ったのか、ブーツが向かいの商品棚の方へ飛んでいってしまった。

「あっ」

「おいおい、一応商品なんだから丁寧に扱えよ」俺は笑いながらブーツを拾った。「遊んでもらっちゃ困るな」

「ごめんなさい、つい懐かしくて」遠藤はちらつと俺とブーツを見比べた。「河村君、何か似合うね。家でもサンタの役目をしているとか」

「まさか、それは毎年親父の役目だよ。昨日はプレゼントを買いまわって、ひーひー言っていたけど」

「そっか。確か河村君家、兄弟多かったものね。お兄さんも大変じゃない？」

「まあ、それなりに。遠藤は兄弟いないのか？」

「私は妹が一人だけ。でも、凄くわがままだから大変かな」

ブーツの陳列を終え、俺達は協力して二人分のダンボールの山を片付けていった。遠藤とこんなに話したのは始めてだ。真面目な女子かと思いきや、当の本人にはそんな気はさらさらないらしい。

「遠藤さんって、結構可愛らしい子じゃない。今の内に唾つけておかないと、礼ちゃん取られちゃうわよ」

雅美おばさんがこっそり耳打ちする。今時唾を付けたとか古臭い表現だが、確かに遠藤は可愛かった。その証拠に後から合流した二人も、先程からちらちらと遠藤に目を配らせていた。

全く、男という人種は俺も含めこうも情けないとは。他の連中が鼻を伸ばす一方で、俺は次々と品出しをしながら遠藤との距離を伸ばす。遠藤とこれ以上親しくなるのは、何となく避けたかった。傷つくのが怖いせいかもしれない。恐れているせいかもしれない。どちらにしても、もう少し時間が欲しかった。俺は雅美おばさんを手伝いながら、今日の仕事を切り上げた。

line 25・アクシデント

スーパーで昼食の弁当と、美紀夫への手土産のケーキを二つ買って帰る。このまま一度自宅に帰ろうと思ったが、ケーキは弟達に食われてしまうかもしれない。俺は美紀夫に連絡すると、そのまま美紀夫の家に向かった。

美紀夫はジーンズにチェックの赤いシャツとラフな格好で俺を出迎えた。ケーキがそんなに予想外だったのか、喜んで冷蔵庫にしまい込んだ。

「悪いな、随分早く来て」

「うっん、大丈夫。あれ？ お昼もまだだったの？」

美紀夫が弁当の袋を覗き込む。俺は美紀夫の許可を得て、電子レンジを使わせてもらうことにした。今日は美紀夫以外に誰もいないのか、家全体が静まり返っている。

「今日はお母さん、いないのか？」

「うん、お爺ちゃんも町内のクリスマス会に出かけたよ」美紀夫が笑いながらカレンダーを見た。「そう言えば今日、クリスマスイブだったね。男二人寂しいなあ」

「それを言っなよ。でもお前、こないだ告白されたんじゃないのか？」

「誰に？」

「及川に」

及川の名を出した途端、美紀夫は眉をひそめた。

「されてないよ。誰？ そんな適当な噂流したの」

「えっ？　だつて長谷川先輩がふられたつて」

「それは思い込みだよ」美紀夫が困ったように顔を顰める。「あの話、聞かれていたんだ……先輩からどこまで聞いたの？　僕の事、何か言っていた？」

美紀夫が詰め寄って聞いてくるので、俺は思わず後退る。

「ふられたしか聞いてねえよ。部活が終わった後、美紀夫がいない事に気付いて部室まで戻ったんだ」昨日の出来事を思い出そうと思考を巡らす。「でも、部室の前には先輩がいて、俺はグラウンドに連れて行かれたただだ」

「……………」

美紀夫も昨日の出来事を思い出そうと顎に手をそえる。やがて電子レンジが軽快に鳴った。

「まあいいや、及川さんの事は知っているの？」

「及川？　……いや、何かあったのか？」

「知らないなら、いいよ。僕の部屋に行こう」飲み物を入れたグラスを二つ持って、廊下に出た。「この前新作のゲーム買ったんだ、礼二君もやるでしょ」

有無を言わせない美紀夫の背中に、俺はそれ以上何も聞けなかった。二人は喧嘩でもしたのか？　俺は疑わしいと思いつつも、黙って美紀夫の後について行った。

「さっきまで宿題していたんだ。もうすぐ終わるから、ちょっと待っていて」

テレビを点け、美紀夫が奥に立て掛けてあった折り畳み式のテー

ブルを持ち出す。用意してくれた席に、俺は弁当と共に腰を下ろした。

「偉いな、ちゃんと宿題やって」

「あはは、礼二君はいつも僕のを写しているからね」美紀夫が机に向いながら話す。「でも、テストの点数はそこまで悪くないよね？赤点採ったところ、見たことないし」

「ぎりぎりだけだな。一応、秘密の勉強法で復習しているし」

「秘密の勉強法？……まさか単語を女の子に当てはめて覚えているとか？」

「ばーか、そんなに可愛い女子がいねえよ」

美紀夫も「そうだね」と言っただけで俺の答えに笑った。俺もつられて笑う。美紀夫は生意気だけど、こうして俺を励まそうとしてくれる良い奴だ。無理に何があつたのか聞き出そうともせず、俺からの出方を待っているのがわかる。

『もう少し元気出せ。みんなお前を心配している』

先輩の言葉が頭を過ぎる。友達の中では、美紀夫が一番心配してくれたはずだった。迷惑をかけたはずだった。俺は軽く咳払いをして、感謝の言葉を述べた。

「美紀夫……心配させて悪かったな。今日は誘ってくれてありがとう」

恥ずかしさに弁当を食べて誤魔化する。そんな背中を悟られたのか、美紀夫がくすくすと笑った。

「何だか礼二君らしくないね」
「うるせー」

「でも、少しは元気になったみたいでよかった」美紀夫がちらつと振り返る。「ふられた時は、どうなる事かと思っただよ」

「あはは、確かにシヨックだったけど、そういつまでもくよくよしていられないしな」一息着こうとお茶を飲む。「……みおさんは元気か？」

あれからみおと連絡がつかず、彼女の状況を知る手段もなかった。みおの言葉に反応して、美紀夫が椅子ごと振り返る。

「……大丈夫、元気だよ。少なくとも礼二君よりかはね」

「そ、そうか。よかった」

「ただ、今はそつとしておいて欲しい。みおも礼二君を傷つけようとして、傷つけたんじゃない」

美紀夫が悲しそうに呟く。あの時のみおは、怯えた瞳に涙をいっぱい浮かばせて、嗚咽していた……少なくとも食事をした所までは、俺もみおも楽しかったはず。きっと、俺の気持ちを受け入れる体制が出来ていなかったんだ。その時間すら与えてやらなかったのは、他の誰でもないこの俺だ。

「美紀夫は怒らないのか？」

「どうして？」

「だって俺は……お前の姉を、男嫌いだと知りながらも告白して、傷つけたんだぞ」

美紀夫に怒られても、恨まれてもしょうがないと思った。まさか自分だけではなく、みおまで傷つくとは思わなかった。泣き出すとは思ってもよらなかった。

「みおの事で僕が口出す権利はないよ。むしろみおに告白した礼二」

君は、凄いと思った」

美紀夫が照れくさそうに褒める。俺は「そうか？」と頭を掻いた。

「礼二君には酷だったかもしれないけど、みおはかなり特殊。本当に気にしない方がいいよ、僕にもみおがわからないんだからさ」そう言っただけをすくめる。「……もう、みおの事は忘れなよ。ちゃんと向き合ってくれる相手を、これから探そう」

男の俺に同情して肩を叩く。好きになった相手が悪かったのか、それとも考えもせずに告白した俺が悪かったのか。どちらにしてもあの出来事から立ち上がらなければならぬ。俺は「そうだな」と曖昧に頷くと、美紀夫という友人に感謝しながら弁当を平らげた。

その後、俺達はいつも通りゲームで遊んだ。俺がプレイして、その横から美紀夫がアドバイスをする。この関係が、今の俺にはとても心地よかった。

「礼二君、上手くなったね」

「そうか？」

「でも、このステージはクリア出来るかな？」

隣で美紀夫が意地悪くほくそ笑む。こういう顔をした時の美紀夫は、本気で俺を潰しにかかる合図だった。てことは、相当難しい事を意味する。その証拠に、先程から三十分以上もこのステージから進めずにいた。しびれを切らしたのか、美紀夫がアドバイスを中断する。

「礼二君かわって、僕がやるから」

「やだよ、もう少しだけやらせてくれよ」

「さっきからそう言って進まないじゃない、ほら、ちょっとだけだからさ」

美紀夫が俺からコントローラーを奪おうとする。俺もむきになって、美紀夫に取られまいと死守する。やがて押し引き合いになり、小柄な美紀夫が後ろにひっくり返りそうになった。

「あぶねえ」

後ろにテーブルがあつた事に気付き、俺は慌てて美紀夫の身体を掴んだ。思いもよらず抱きしめる格好になり、俺は美紀夫を抱いたままテーブルの角で頭を打ちつけた。

「いってえ……」

頭を押さえつけながら、ゆっくりと身体を起こす。美紀夫が俺の腕の中で、真っ赤な顔をしてこちらを見つめていた。

「……………っ！」

その表情は、みおそっくりだった。というより、みおそのものだった。俺はすっかり気が動転して、痺れたようにしばらく動けずになっていた。

「ぼ、僕っ、ケーキ持って来るね」

真っ赤な顔のまま俺の腕をすり抜けると、美紀夫は慌てて部屋か

ら出ていった。頭がじんじんと痛むが、それより胸の鼓動がうるさいのが気になった。

おいおい、相手は美紀夫だぞ、男だぞ。いくら女顔だからって、これはまずいだろ。俺は落ち着きを取り戻そうと座り直したが、同時に下半身が勃っているのに気付く。

「何でだよっ！」

股間を両手で押さえつけながら、その場で蹲った。落ち着け、落ち着くん、俺。これはきつと、びっくりしたせいだ。深呼吸をして、少しでも正常を取り戻そうとする。

大体、何で美紀夫も照れるんだよ。確かに不本意とはいえ、美紀夫を押し倒した感じになってしまったが、あんなに恥ずかしがることもねえだろうが。俺は美紀夫に理不尽な怒りをぶつけながらも、反応してしまった事実には羞恥心を覚えた。

line 26・変化

あれからお互いに距離を置きつつ、しばらくゲームをしてから帰ることにした。何となく気まずくて、俺も美紀夫もゲームに集中することが出来なかったからだ。

「その、さっきはありがとう。ごめんね、怪我大丈夫だった？」

玄関先でしゃがみこんで靴を履く俺に、美紀夫が申し訳なさそうに謝る。

「大丈夫、美紀夫は心配し過ぎだつて。俺、石頭だしさ」立ち上がると、振り返って美紀夫を見下ろした。「じゃあ、また明日な」

「うん、また明日ね」

美紀夫が小さく手を振る。その仕草に見覚えがあったが、俺は無視して自転車に乗ると、美紀夫から逃げるように急いで帰った。

まさか男の美紀夫に反応するとは思ってもよらなかった。初めての感覚に、俺は戸惑いを隠せなかった。自分は美紀夫をみおとして、女として見てしまったのか。みおに拒絶されたからと言って、男の美紀夫の方に気持ち傾いてしまっているのか。まさか！ そんな馬鹿な、俺はホモじゃない。

何度か美紀夫が女の子だったら、みおだったらと想像したことはある。しかし男を、よもやそういう目では一度も見たことはなかった。なかったはずだ。

俺は今しがた湧いた感情に疑問を抱きながらも、家の戸を開けた。ちょうど皆がリビングに集まって、夕食を食べている最中だった。兄弟が食い散らかしているのは、ケンタッキーフライドチキン。床

には赤白の空箱と袋が転がっていた。

「おかえり。ちゃんと礼ちゃんの方は置いてあるから」母親が食器を片付けながら俺に尋ねる。「すぐ食べる？」

「いや、先にシャワー浴びてから食べるわ」

「おい、礼二！ お前ケーキくらい買ってこいよ」

小学四年生の弟がいきなりタツクルをかまして文句を言う。

「無駄よ、礼ちゃんに期待なんてしちゃ。そんな気の利く男じゃないでしょ？」

と、その下の小学三年生の妹。俺は「悪かったな」と兄弟達を一掃すると、リビングを通り過ぎて風呂場へと向かった。本当はもう少し美紀夫の家で粘る予定だったが、あんな事があってからは、お互いに気まずくしてしまうがけない。

美紀夫に悪いことさせちゃったな。俺はシャワーを思いっきり捻って、冷えた身体を綻ばせた。まだ少し、身体が興奮している。どうしてだ？俺はそつと自分のを掴むと、先程の出来事をみおにすり替えて吐き出した。

俺は最低だな。出し終えてからの罪悪感に苛まれる。右手を見るともう傷は塞がっていて、赤黒いシミが幾つも点在していてグロテスクだった。完全に消えるには、まだ時間がかかりそうだ。俺は風呂場から出て髪を乾かすと、携帯電話を開いた。もう一度だけ、みおにメールしてみようか。これで返信が来なかったら、もう諦めよう。最後のかげだ。

『 件名：元気ですか？ 』

本文：体調の方は大丈夫ですか？あの時の事は何度でも謝ります。だからもう一度、俺と会ってくれませんか？返信、待ってます。

います
』

みおからしたら、未練たらたらな男だと思われるのかもしれない。送信するのを少し躊躇ったが、この際はつきりさせようと決定ボタンを強く押す。返ってこなかったら、この想いに踏ん切りをつけよう。所詮高値の花だったんだ。俺はため息をつく、ケンタッキーを貰いにリビングへと向かった。

二十五日のクリスマスの朝、兄弟たちはここぞとばかりに早起きをする、早速枕元に用意されていたプレゼントで遊んでいた。

「やったぜ！ 超級ヒーローのフィギアだ！」

「私はメルルのおままごとセットだあ！」

嬉しそうな兄弟を尻目に、俺はもともと朝食のパンを食べていた。今日は朝から学校の冬期補習があり、そのまま午後は部活だ。進学校にはクリスマスも関係ないらしい。ちなみに今年のクリスマスプレゼントは、やっぱり参考書だった。

「いつてきます」

いつもと同じように自転車にまたがり、駅へと急ぐ。みおからの返信は来ないままだった。俺は携帯電話をしまい、ため息をつく凍てついた頬を叩いた。こんな顔、みんなの前で見せちゃ駄目だ。俺は前を向くと美紀夫が乗っている車両に乗り込んだ。

「おはよう」

走ってきたのか、少し頬を紅潮させた美紀夫が立っていた。可愛い。みおも映画を見終わった時はこんな表情だったな。まじまじと美紀夫の顔を見つめ、俺は可愛いと思った自分に疑問を抱いた。

「どうしたの？ ぼーっとして」

美紀夫が怪訝そうに見上げる。俺は何となく美紀夫の頭を鷲掴みにした。

「ちよつ、ちよつと！ 突然どうしたの！」

目の前にいる男は生意気な美紀夫だ、間違いない。こいつはみおじゃない。俺は美紀夫を確かめるように手をにぎにぎした。

「やめてよ！」突然頭を鷲掴みにされた美紀夫は当然怒る。「急に何？ どうしたんだよ」

「……ごめん、ちよつと掴みたくなった」

「はあ？」

美紀夫は「変なの」と言ってそっぽを向いてしまった。俺は美紀夫を意識している？ そんな馬鹿な。たとえそうであったとしても、昨日の今日で一時的なものだろう。俺は自分の感情を合理化すると、美紀夫から三十センチ以上離れた。

line 27 ライバルな関係

「裕美も部活で残って行くよね？ だったら一緒に食べようよ」

クラスメートで友達の亜希に呼ばれて、及川は顔を上げた。ちょうど午前中の冬期補習が終わり、これから部室に向かおうと荷物をまとめていた所だった。

「いいわよ。でも、冬休み中は購買も閉まってなかったかしら」

亜希はバレーボール部に所属しており、短髪に長身とまさにスポーツ少女さながらだ。その亜希がいつも購買でパンやお菓子を買って食べているのを、及川は知っていた。

「そうなんだよねー。だからまずコンビニまで付き合って欲しいんだ」

教室にかけられた時計を見る。昼の十二時前。部活は一時からだから、今からコンビニへ行ってお昼を食べるとなると、結構ぎりぎりの時間になるかもしれない。

「いいけど、その前に三組に寄っていい？ 部室の鍵を渡したいから」

礼二のクラスはここの一つ下の階だ。金曜日に部室の鍵を預かったままなので、今日は自分が一番に行って鍵を開けるつもりだった。しかしコンビニまで行くとなれば、先に誰かに開けてもらうしかない。学校から一番近いコンビニでも、自転車で五分はかかる。亜希は自転車通学だから、そんな手段も選べれるのだろう。

「悪いね、付き合わせて。代わりにデザート一つ奢るからさ」

「じゃあプリンで」鞆から財布と鍵を取り出し、寒いのでスカートの下にジャージを履く。「時間もないし、早く行こう」

同じくジャージを履いた亜希と共に三組の教室へと向かう。教室にはこの後部活があるであろう生徒が数名、弁当を広げて食べていた。その中でも背の高い礼二を探す。後ろの席の方で、礼二は女子と喋っているようだった。ストレートの黒髪で、すらっとした女子。誰よ、あの子。

「鍵、誰に渡すの？」

中々教室に入ろうとしない及川の後ろで亜希が尋ねる。後ろを向いている礼二がこちらに気付くことはなく、代わりに黒髪の女子と目が合った。気まずそうに自分から顔を背ける。

どうしよう。とても鍵を渡しに行ける雰囲気じゃない。

「及川さん、僕のクラスに何か用？」

振り返ると自分と差ほど背丈の変わらない久瀬が、にやにやしながら廊下に立っていた。久瀬は自分と礼二の状況を見て悟ったのか、納得したように頷く。

「どうやら及川さんだけじゃないみたいだね、礼二君狙っているの」

そう呟くなり、久瀬は及川が持っていた部室の鍵を取り上げた。

「これ渡しに来たんでしょ？ 僕から渡しておくよ。じゃ、また後

で」

なにくわぬ顔で久瀬が教室に入っていく。及川は悔しくて、踵を返すようにその場から離れた。

「裕美、待つてよ」

亜希が後ろから追いかけて来たが、気に止める事なく一気に昇降口まで階段をかけ降りる。息を切らして立ち止まると、後ろから亜希に肩を叩かれた。

「あんた、案外足早いだね。とにかく外に出よう」

唇を噛んで、涙を堪えている自分に亜希は優しく背中を押した。むかつく。久瀬の奴、礼二がいないと態度変えやがって。この間のホモ発言の仕返しに違いない。及川は久瀬がどういう人物なのか理解し始めていた。見た目は小柄で、顔も女の子の様に可愛らしいが、性格は陰険で、執念深く鬱陶しい。どこの姑ババアよ。

「あのチビ、人の気持ちを逆撫でしやがって」

亜希も久瀬に腹が立つたらしく、眉間に思いつきりしわを寄せていた。亜希は自分が礼二を好きなのを知っている。知っているからこそ、親身になって話を聞いてくれる良き友達だった。

「言われっぱなしなんて、裕美らしくないじゃない」靴を履き、自転車の鍵を振り回しながら振り返る。「あいつに弱みでも握られているわけ？」

「……………」

弱みは握られていないと思う。何も言えなかったのは、久瀬の発言が的を射ていたからだ。礼二と話していたあの子が、自分と同じ表情をしていたからだ。好意の目、よく見ればわかる。敵は久瀬とその姉だけじゃないということか。

「後ろに乗って、時間ないから飛ばすよ」

自転車の後ろに乗り、二人でみかん畑を突っ切る。冬を迎え、裸同然になった木々達は寒そうに身を寄せ合っていた。自分も誰かと身を寄せ合えたのなら。亜希の細い腰に掴まりながら、及川は漠然とそんな事を考えた。

「ねえ、亜希は好きな人がいたら、自分から告白する方？」

「何よ突然」亜希が白い息を吐きながら笑う。「あんた告白でもするの？」

「……まだわからない。でも、女から告白するのって、変？」

「このご時世に男からとか、女からとか関係ないでしょ」緩やかな坂に亜希が腰を浮かせた。「自分の、素直な気持ちを、相手に、伝えればいいんだよ」

「素直な気持ち……」

自分は、果たして礼二の前で素直になれるだろうか。及川はこの気持ちをどうしたものかと空を見上げた。冬の天気らしく薄暗くぱつとしない。自分の心境の様だ。友達のまま、今の関係のまま卒業してしまうのは、あまりにもやるせないと思った。

「でも、早くしないとあの女に先越されるかもよ。確か遠藤さんだったかな？ 去年同じクラスだったけど」車が通っていないのいいことに、赤信号を無視して渡る。「大人しくて真面目な子だったかな。男はああいうのが好きなのかねー」

陸上部のマネージャーになって、もう一年と半年が過ぎようとしていた。自分も真面目に部員達のサポートをしてきたつもりだ。各種目の準備に片付け、飲水の手配、選手のタイム測定と記録に応援。必要ならば顧問の先生を捕まえて、アドバイスを頂くこともしていた。

「私も結構真面目だと思うけど」

及川の独り言に亜希は笑った。

「そうだね、確かにあんたも真面目だよ。汗臭い連中の為に、いろいろ動き回ってくれているしね」

汗臭いとの言葉で即座に長谷川先輩の顔が浮かぶ。陸上部員の半数以上は男子だから、亜希の所属する女子バレーボール部からしたら男臭いのは当たり前だ。亜希がコンビ二の前に自転車を止めると、二人で慌てて暖房の効いた建物の中に入った。

例の男臭い部室に及川は足を踏み入れると、早速ウォーミングアップに出かけた部員の為に飲水を用意してやる。お昼を食べ終え、結局時間ぎりぎりに部室前に来たときには、既に各自準備体操をしていた。

「遅かったね、及川さん」

久瀬がわかったような顔で声をかけてくる。及川はそれを無視すると、代わりに礼二が声をかけてきた。

「鍵、受け取ったぜ。殆ど一番乗りで来るのに珍しいな」

はい、と首にかけていたタオルを直接手渡す。及川はそれを不思議そうに見つめた。このタオルには礼二の、男臭い汗が染み込んでいる。そう考えると思わず赤面した。

「じゃ、そろそろウォーミングアップに出かけるぞ」

部長の礼二の一声で、皆がそろそろと校門の方に移動し始める。一瞬長谷川先輩と目が合ったが、何だか気まずそうに俯かれてしまった。

部室に一人になった及川は、いつも通りに飲水を用意し終わると、礼二から受け取ったタオルを自分の首にもかけてみた。今は冬場なので汗の臭いはしなかったが、代わりに整髪剤の甘い匂いがする。何だか変態みたい。及川は自分の行動に恥じて笑った。

「及川、いるか？」

急に部室のドアが空いたので、及川は慌ててタオルを後ろに隠した。礼二が怪訝そうにこちらを見ている。

「何してんだ？ お前」

「何も。礼二こそどうしたのよ」

「いや、ちよつとな……」恥ずかしそうに頭を掻く。「お前にも謝っておこうと思って」

謝る？ 及川は照れくさそうにしている礼二の表情につられて赤くなった。何に対して謝るといいのか。自分は礼二に悪いことをさ

れた覚えがない。部室に二人つきりという状況に緊張し、思わずタオルを握りしめる。

「謝るって、何を」

「俺、この所元氣なくてさ……及川にまでそっけない態度をとって悪かった。心配させてごめん、もう大丈夫だから」

顔の前で手を合わせて礼二が頭を下げる。先週の態度は本人にも自覚があつたらしい。及川はしょうがないなと微笑むと、手にしていたタオルを差し出した。

「そんなの気にしないわよ。それよりちゃんとウォーミングアップしてきたの？」

礼二は「まあ」と曖昧な返事でタオルを受け取ると、何だか言いにくいように言葉を切り出した。

「あのさ、お前美紀夫と何かあつたのか？ この前部室を二人で掃除してくれたみたいだけど……」

どうやら久瀬に問い詰めた事を言いたいらしい。久瀬の奴、お互い無かつた事にしようって言った癖に。及川は久瀬の顔を思い出して眉をひそめた。

「何もないわよ。久瀬君から聞いたの？」

「いや、あいつは何も言ってくれなかった。少し二人の仲が悪そうに見えて……気になっただけだ。何もないならそれでいい」

礼二はそう告げると部室から出ていった。今度は礼二が久瀬のお節介かしら。及川は緊張がとけたように椅子に座り込んだ。久瀬と

は仲が悪いと言うより、お互いに礼二を取られまいと張り合うライバルのような関係だ。礼二が一番久瀬と仲が良いが、あの厭みっらしい性格まで見抜いているのだろうか。及川は腹いせに久瀬の鞆を蹴たぐった。

line 28 ・マナージャーとして

全員がウォーミングアップを終え、各種目の基礎練習に入った。及川は紙コップを回収するとボールペンとノート、ストップウォッチを持って外に出る。各選手の記録を測るのもマナージャーの仕事だった。基礎練習の間は特にすることがないので、グラウンド前の石ブロックで作られた階段に腰を下ろす。ここからはグラウンドが一望でき、陸上部の他に野球部やサッカー部、フットサル部にテニス部といつもと変わらない部活動の姿がそこにはあった。

寒い中よくやるわね。及川はジャージの裾からセーターを少しでも長く引っぱり出すと、手に絡ませてポケットの中に突っ込んだ。日が出ているとはいえ、北風が頬を撫で付けて痛い。鼻を嚙りながら及川は礼二を探した。ちょうどトラックを十周走り始めていた所だった。

及川は礼二の走る姿が好きだった。彼のフォームは比較的に綺麗で、歩幅も大きいせいか力強さがある。あの走りにいつから自分は惹かれたのだろう。及川は基礎練習の間ずっと、礼二から目が放せなかった。

礼二と出会ったのは、高校入学式の時だった。その時には既に身長百八十センチはあっただろうか。クラスで一番背が高いという理由だけで彼は目立っていた。

「あいつ、高いなあ。うちのバスケットに入ってくれないかな」

廊下で新入生を見に来た先輩が、礼二の身長を羨ましそうに見つ

めていた。男子は背が高いたくでもかなり得だ。スポーツでも背が高いのは大いに有利だろう。当時部活動に入る予定のなかった及川は、人事のようにそれらを聞き流していた。

それからしばらくして、校門の前の坂道で礼二の走っている姿を何度も見かけるようになった。クラスメートが言うには陸上部に入ったらしい。彼の後ろを追うように、他の部員達もそれぞれのペースで走って行く。

「はい、あと二周！ 頑張つて！」

校門前でノートをメガホンの様に丸めて叫ぶ女子生徒と目があつた。ジャージに入っているラインの色からして、上の学年だとすぐに知れた。

「ごめんね、うちの部員が邪魔しちゃつて。あいつらにもつと外側走るよう言っておくから」

「皆さん陸上部の方ですか？」

「そうだよ、よくわかつたね。走り方から叩き込んであるから、フォームも綺麗でしょう？」

礼二がいたので陸上部だとわかつたのだが、言われて見れば他の部員は礼二より綺麗に走っている。凄くカッコ良く見えた。

「あなた、マネージャーやってみない？」

ミドルの髪を後ろに結い上げて、偉そうに仁王立ちして尋ねる。この人が前の陸上部のマネージャーであり、及川に色々教えてくれた先輩だった。先輩は三年生だったので既に卒業してないが、こうして及川が陸上部のマネージャーになったのも、礼二が綺麗に走る姿を見たかつたからかもしれない。

「練習終了！ 短距離から測定するわよ」

ノートを丸めて叫ぶ。及川は石段をかけ降りると、短距離選手の久瀬に近寄った。

「あんたの姉には負けないからね」

言われっぱなしでは腑に落ちない。及川は仁王立ちで久瀬に対抗した。

「……どうぞ、ご自由に」

久瀬はふん、とそっぽを向くとスタートラインにつく。及川はゴールラインまで走って行くとストップウォッチを構え、右手を空高く掲げた。

line 29・心の不調？

美紀夫を押し倒してしまった日から、俺は少しずつ美紀夫を意識するようになっていた。自然と目が追ってしまふ。どうしてだ？

俺は美紀夫の事が好きなのか？ いや、そんな筈はない。

寒空の下、ウォーミングアップの外周を走り終え、部室前で及川から紙コップを受け取る。

「礼二、さつきから久瀬君の事見てない？」

突然言われて、俺は口に含んでいたスポーツドリンクを吹き出した。

「ちよつと、汚いわね！」

及川が迷惑そうに俺から遠ざかる。

「お前がいきなり変な事言うからだろ！」美紀夫が近くにいないのを確認すると、焦りを誤魔化そうと手で口を拭う。「……別に見てねえよ。ちよつと確認したただけだ」

「何を？」

「何でもいいだろ」

及川に気付かれてしまったのを、苛立ちながら恥じる。そんなに分かりやすいのか？ 俺って。残っていたドリンクを一気に飲み干した。

「前にも話したけど、久瀬君とは別に喧嘩したわけじゃないから。ちよつと馬が合わないだけなのよ」

及川が気難しそうに顔をしかめる。俺の視線を友人として捕らえた奴の意見だった。

「……わかってるよ。あいつ、結構意地悪だからな。俺が確認したのは、その事じゃない」
「……ふーん」

疑り深そうに俺を見ながら、紙コップを取り上げる。そのまま及川は他の部員の所に行ってしまった。何なんだよ、及川の奴。俺がよっぽど変な顔をして、美紀夫を見ていたとでも言いたいのかよ。何だか腑に落ちないまま、俺は基礎練習に励んだ。

今年最後の部活動を終え、美紀夫と一緒に夕方のみかん畑を歩く。今日は十二月二十九日の金曜日。面倒だった冬期補習も終わり、後はバイトで稼ぎながら年越しを待つのみとなった。

「ちょっと、礼二君聞いているの？」

隣を歩く美紀夫に声をかけられて、俺は自分がぼーっとしていたのに気が付く。

「え？ ……ああ、悪い悪い。初詣の話だったわけ？」
「そうだよ。近所の神社にでも行こうかって話していたじゃない」

美紀夫が不貞腐れたように怒る。俺はその横顔を黙って見つめた。やっぱりみおに似過ぎている。俺は、美紀夫の中にみおを見出そうとしているのか。何故？ そっくりな双子だからか？ ここの所、自分の身体がおかしい。いや、心の不調とも言おうか。自分自身制御出来ない感情に踊らされている。

「最近ばーつとしたりして、変だよ。また何かあったの？」

今度は心配そうな顔で俺を見つめてくる。やめるよ、みおにそっくりな顔でこつちを見るなよ。俺は美紀夫にまで意識している自分に苛立ちながら「何でもねえよ」とそっぽを向いた。

どうしたんだよ、俺の身体。どうしちゃったんだよ、俺の心。みおから返信が来ず、それでも諦めきれない自分に腹が立つ。俺はみおが好きなんだ。俺が好きなのはみおなんだ。その反動からか美紀夫を邪険に扱ってしまう。違うんだ、俺は友達として美紀夫が好きただけなんだ。

「じゃあ、次に会う時は来年だね。またメールするよ」

「ああ、わかった」

駅の階段下で美紀夫と別れる。俺は複雑な表情で自転車にまたがった。少し美紀夫と距離を置いた方がいいかもしれない。美紀夫の側にいる限り、常にみおの影が付き添ってくる。きつと、混乱しているだけなんだ。だから美紀夫とみおの行動が重なって見えてしまった。俺は深呼吸すると、初詣は断ろうと心に決めた。

不味そうに箸を進めながら、俺は家で遅い晩ご飯を食べ終わると、リビングで騒いでいる兄弟達を他所に二階の自室へと上がった。部屋では考二が相変わらず勉強していたが、俺の姿を見るなり顔を上げた。

「どうしたの、変な顔して。最近落ち込んだり、悩んだり激しいね」

こいつは人の顔から心を読み取れる能力があるともいうのか。
俺は「ほっとけ」と考二の視線をかわすと、二段ベッドの下にもう
一式布団が用意されているのに気付いた。

「明日、優二ちゃんが帰ってくるんだって。お盆以来だね、お年
玉でもくれないかなあ」

眼鏡を外し、休憩でもするのかぐつと背伸びをする。優二は俺達
兄弟の最年長で、東北にある農科大学の三年生だ。俺や考二を含め
て兄弟全員、優二兄の事が好きだった。面倒見が良くて優しく、
その上賢い。兄弟達の尊敬の的だった。

「そうか、優二兄が帰ってくるのか。俺もお年玉もらえるかな？」

「礼二兄ちゃんは、バイトしているからいいじゃん」

「よくねえよ。まだまだ欲しい物がいっぱいあるしな」

「どうせゲームや漫画本でしょ？」呆れたように俺の机に積まれ
た漫画を見る。「弟の俺が言うのもなんだけど、もう少し勉強した
ら？ その方がモテるかもよ」

あまりにも考二が生意気なので、座っている後ろから軽くスリ―
パーホルドをくらわしてやる。

「痛い、痛い、ギブギブ！」

「どうだ、参ったか」

「もう、図星だからって、すぐ力業でねじ伏せるんだから」ぜえぜ
えと大げさに喚く。「ほら、携帯光っているよ！」

一瞬俺の注意を促す嘘かと思ったが、本当に携帯が光っていた。
マナーモードにして鞆に入れていたため、考二に言われるまで気が
付かなかった。面倒臭そうに携帯を開くと、美紀夫からだ。

「 件名：部活お疲れ様

本文：大晦日もバイトかな？ 良かったら家でゲームでもして、そのまま初詣に行こうよ。お母さんも年越しそば作ってくれるってさ」

大晦日までゲームか。美紀夫のゲーム好きはよっぽどだな。俺は美紀夫からのメールに笑うと、優二兄の帰省を理由に断った。今まで俺も美紀夫に依存しすぎていたんだ。年明けの部活動まで、不用意に会うのはよそう。美紀夫に申し訳ないと思いながらメールを送信すると、そのまま携帯をベッドに投げ入れた。

line 30・焦りと兄の帰省

翌日、俺は朝からバイトに出かけ、いつも通りに商品の入ったダンボール箱をさばいていく。開店時には遠藤も出勤し、気が付けば二人同じ売り場で品出しをしていた。

「河村君って、明日も出勤するの？」

「ああ、確か今日と同じようにシフトを入れたと思ったけど」「そっか、じゃあまた来年だね。今年はお世話様です」

遠藤が笑って頷く。俺は「まだ今年の仕事も終えてないだろ」と軽く突っ込んだ。

「……なかなか右手、治らないんだね」

遠藤が心配そうに俺の右手を見つめる。本当は完治しているのだが、跡が完全に消えるまでは包帯を巻いておこうと思っているだけだ。同じクラスの遠藤は、俺が右手を痛めつけた現場を目撃しているはずだった。理由も聞かずに心配してくれるのは、遠藤なりの気遣いなのだろう。

「まあな。でも日常生活に支障はないよ」

俺は一息つくとダンボール箱を片付けて、遠藤から離れようとした。

「あら？　もしかして久瀬君かな？」

久瀬の二文字で思わず足が止まる。そうか、地元のスーパーなの

で美紀夫が買い物に来てもおかしくはないのだ。俺は慌てて美紀夫に見つかるまいと隠れようとしたが、身長が仇になりすぐに発見されてしまった。遠藤もクラスメートに見られて気まずそうに商品を並べる。

「隠れなくてもいいでしょ、礼二君……あ、もしかして遠藤さん？」

どうもと、恥ずかしそうに軽く頭を下げる。

「こんにちは、久瀬君。こんなところで会うなんて奇遇ね。お買い物？」

「うん、夕飯の買い物を頼まれちゃってさ」美紀夫が俺と遠藤の顔を見比べる。「へえ、最近話すと思ったら、そういう事だったの」

そう言って不敵な笑を浮かべる。これだから遠藤と一緒にの所を見られたくなかったのに。俺は逃げ道を探すように目を泳がせた。遠藤も何事もなかったかのように黙々と陳列を続ける。瞬時に状況判断をした美紀夫が、にやにやしながら言った。

「お邪魔っばいし、もう行くよ。じゃ、二人ともお疲れ様」

あっさり立ち去って行く美紀夫の肩を、俺は咄嗟に掴んだ。

「待てって、美紀夫！ 違うんだってば」

何が違うのか。美紀夫もびっくりして振り返る。

「な、何が？」

「あ……いや、その……」

どうして今、美紀夫の肩を掴んでしまったのか。自分は何を弁解しようと言っただ。俺の焦りをはき違えた美紀夫が「まあまあ」となだめる。

「安心してよ、誰にも言わないからさ」

違う。俺の言いたかったことは、そうじゃない。美紀夫に遠藤と出来ていると誤解されたくない。そう言おうとしたが、上手く言葉にならなかった。

「じゃ、頑張つてね」

遠藤にも意味ありげな視線を送ると、美紀夫は青果コーナーへと歩いて行ってしまった。俺は美紀夫を引き止めてしまった右手を見る。

美紀夫に誤解されてしまった。まずい。しかし、何故？ 心拍数がやたら激しい。何をこんなに焦っているのだ。美紀夫に遠藤と一緒にいる所を見られたから、焦っているともいうのか。別に俺が誰というが、美紀夫には関係ないじゃないか。なのに、どうして

俺は今の出来事から逃げるようにダンボール箱を抱えると、裏のバックヤードに飛び込んだ。

その日の仕事を終え、俺は更衣室で携帯を開く。美紀夫からのメールは来ていないか。緑のエプロンを脱ぎ、代わりにダウンジャケットを羽織ると従業員専用出入口から外に出る。外の自転車置き場でまた遠藤と会った。美紀夫に見つかってからは、お互い遠慮がち

に品出しをしていたのだった。

「……お疲れ様」

「ああ、お疲れ」

「あの……ごめんなさい、気まずい思いをさせちゃって」ポニーテールを解いた髪が風でなびく。「私……河村君の事は、尊敬しているだけだから。その、気にしないで」

「……わかった、じゃあな」

これ以上遠藤と話すことはない、と、自転車と共に足早に切り上げる。まだ遠藤は何か言いたそうにこちらを見ていたが、俺は構うことなくペダルを進めた。

尊敬、か。今のは俗に言う『貴方は恋愛対象じゃないの、だから勘違いしないでね』と宣言されたのと同じではないか。安心しろよ、遠藤。俺が好きなのはみおだけだからさ。独りでにカッコつけて、寒さにもへっちゃらな顔をする。美紀夫に見つかったからって、それがどうした。別に隠すような事でもなかっただろ。憂さ晴らしに俺は右手を何度かベルにぶつけた。

家に入ると、玄関に黒のスニーカーが置いてあるのに気付く。優二兄が帰ってきたんだ。俺が慌ててリビングに上がると、兄弟達を中心に座っていた兄貴と目が合った。

「よお、礼二。久しぶりだな」

つんつん頭のたくましい顔をした優二兄。頼れる男らしい体付きをしており、その真っ直ぐな瞳は昔から変わらない。俺は嬉しくて笑をこぼした。

「優二兄久しぶり、元気だったか？」

「まあ、何とかね」ゆっくりと立ち上がると、俺の隣に立つ。「お前、また背が伸びたんじゃないのか？ 随分と負けたなあ」

悔しそうに俺を見上げる。優二兄も俺より少し低いだけで、男の中では背が高い方の部類だった。

「何だ、手怪我したのか？」

優二兄が俺の右手を掴もうとしたので、慌てて後ろに引つ込めた。

「ちょっとな。でも大した事ない」

「そうか。それにしても今日は、晚にお寿司の出前をとってくれるんだとさ。わざわざ出前なんてとらなくてもいいのにな」

照れくさそうに優二兄は頭を掻く。その仕草はどことなく俺と似ていて、やっぱり兄弟なんだと思ひ知らされた。

「早くお寿司食べたーい！」

小学一年生の妹がぶりっこぶってクツションを抱きしめる。こいつ、俺の前ではキモイとか散々毒づいた癖に。

「優ちゃん、それよりゲームして遊ぼうよ」

「待てよ、俺が先に兄ちゃんと遊んでいたんだぞ！」

五年生と四年生の二人がいがみ合う。優二兄が「おいおい」と言っつて仲裁に入った。相変わらず優二兄は兄弟達にモテモテだな。俺は荷物を置きに部屋に入ると、考二が待ちきれない様子で椅子に座

っていた。机にはノートと参考書がいくつも広げてある。

「おかえり。優二兄さん、まだ下で遊んでいる感じだった？」

「ああ、まだしばらく時間かかりそうだぜ」

「ちえっ、わからない所聞きたいのになあ」

そう言って椅子の上であぐらをかき、つまらなさそうにシャーペンを回す。考二はよっぽどの勉強熱心らしい。俺は携帯を取り出すと、優二兄の為に用意された布団の上で寝そべった。美紀夫にさっきの出来事は誤解だと、メールを打っておくべきだろうか。いや、ただの友達にそこまで知らせなくてもいいはずだ。美紀夫は遠藤の事が好きな訳じゃないのだから。だが、しかし――。

俺は携帯を開いたままその場でのたうち回った。やっぱり俺は、美紀夫の事が気になっているのか？ 好きなのか？ わからない。自分の事なのに、どうしてもそれがわからない。俺は美紀夫にどうしたいというのだ。

「あーっ！ もう！」

頭を掻きむしり、携帯電話をベッドに投げつける。俺はそのまま優二兄の布団の上でうつ伏せになった。

「さっきからうるさいなあ。そんなに構って欲しい訳？」考二がうるさいと俺の上にのしかかった。「聞くだけ聞いてあげるよ。第三者のアドバイスが意外と参考になったりするしね」

「ほっとけ！」

俺と考二が布団の上で取っ組み合いをしていると、いつからそこにいたのか優二兄が声をかけた。

「当ててやろうか。さては恋の悩みだな？」

優二兄まで参戦して俺の上へのしかかる。流石に二体一は無理だ。俺は「ギブギブ！」と情けない声をあげた。

「礼二は昔っから素直じゃない所があつたからなあ」優二兄が笑いながら立ち退ける。「彼女と喧嘩でもしたのか？」

「まだ彼女でもないんだよね。優二兄さん聞いてよ、こいつ俺の方が先に彼女が出来たからって——」

「余計な事言っとなっ！」

俺は真っ赤になりながら考二の口を両手で塞いでやる。隣で優二兄が大笑いした。

「相変わらずだなあ、礼二も考二も。こういう姿を見ると、実家に帰ってきたって思うよ」自分の部屋を懐かしむように眺める。「勉強、見て欲しいってどこだ？ 覚えている範囲で教えるよ」

考二が「やったね」と言っただけで俺を跳ね除ける。二人が机に向かって勉強会を始めた為、暇になった俺は一人携帯ゲームで時間を潰していた。

「礼二はもう進路決めたのか？ 随分と余裕みたいけど」

優二兄が寝そべっている俺を見下ろす。

「俺は……働くから、いいんだよ」

そう突っぱねて背を向ける。後ろで二人のため息が聞こえた気が

したが、俺は何も聞こえなかったふりをした。

line 31・大晦日、兄と川原にて

大晦日。俺は朝早くからバイト先に向かう。今日は遠藤がいないので、まだ気が楽だった。雅美おばさんと今年最後の仕事を終えると、別れ際に可愛いイラストの入った小袋を貰った。お年玉だ。

「少し早いけど、みんなには内緒だからね。礼ちゃん、また来年もよろしく！」

「あ、ありがとうございます。こちらこそよろしくお願いします」

寒い中元気に手を振って別れる。思いがけない収入に心が弾み、俺は思わず袋の中を見た。何と五千円も入っていた。

もう雅美おばさんに迷惑かけられないな。俺は口元を緩ませると、それを大事そうに財布の中にしまった。

年末年始恒例の紅白歌番組を見ながら、皆で年越し蕎麦を食べる。こうして家族総出で年明けを迎えられるのは、実は幸せなことかもしれない。俺は当たり前前の光景をしみじみと思いながら、蕎麦つゆを啜った。午後十一時も過ぎると、小学生の兄弟達は眠気に負けたのか、次々とリタイヤしていった。俺と優二兄、考二の三人で一つのテレビを囲む。両親達は寝室の方で、こっそり晩酌をしているようだった。

「礼二、ちよつと散歩に行かないか？」

優二兄がこたつから出ると、俺の返事も聞かずにコートを羽織る。俺も仕方なく立ち上がり、自分の部屋からダウンジャケットを持つ

てくると、一人テレビの前に座っている考二に声をかけた。

「お前は行かないのか？」

「寒いし、遠慮しておくよ。二人でどうぞ」

優二兄の方を見ながらやんわりと断る。考二の奴、いつちよ前に人の顔色伺いやがって。俺達はすました考二をおいて外に出た。今夜は風があまり吹いていないとはいえ、やはり寒い。俺と優二兄はポケットに手をつ突っ込みながら、肩を並べて川沿いの道を駅とは反対方面に進む。

「やつぱりこつちも寒いな。まあ、雪が降っていないだけましか」

白い息を吐きながら、雲一つない夜空を見上げる。兄貴は現在東北で一人暮らしたから、この季節は毎日雪を拝めていることだろう。それに引き換えこちらは太平洋側だから、滅多に雪は降らない。俺達はしばらく川のせせらぎを聴きながら歩いた。

「最近、お前の様子が変わったさ。考二が俺に任せるって」

考二め。やはり一枚噛んでいたか。俺は軽く舌打ちすると「そうかもしれない」と素直に呟いた。

「確かに少し元気なさそうだな。俺でよかったら、話くらい聞いてやるよ」

ぼん、と背中を叩かれて一瞬泣きそうになる。この気持ちを、正直に話してもよいものだろうか。兄貴に引かれやしないか。しばらく躊躇っていたが、自分でもどうしようもない気持ちだと気が付き、正直に白状する事にした。

「優二兄、笑わないか？」

「笑つかよ。とんでもない話以外ならな」

「……俺、男が好きかもしれない」

改めて口に出してみても、俺は自分の情けなさから顔を背けた。認めたくなかった美紀夫に対する感情。しかし、確実に芽生えつつある感情。俺は唇を噛んで、恥ずかしさを必死に堪えた。

「そうか……って、俺じゃないよな？　悪いけど間に合っているぜ？」

冗談まじりに笑い飛ばす。俺は慌てて否定した。

「違う、同じクラスの奴で……最初は、双子の姉の方が好きだったんだ」

俺は兄貴に美紀夫とみおの事、そしてふられて今度は美紀夫に傾きそうな気持ちを事細かく説明した。その間兄貴は黙って頷き、何か考えついたように口を開いた。

「お前は多分、混乱しているんだ。美紀夫君は常に一緒にいる友達だから、情が移りやすいかもしれない。しかし肝心のみおさんの方は、お前も二度しか会っていない。いくらメールで事前にやり取りがあつたにしろ、実際に会って話すのとは違う。礼二はまだ、みおさんが見えていないんだ。まずは相手の事をきちんと知るべきだな。それから結論を出すのも遅くはないと思うぞ」

相手の事を知る。確かにみおとは二度会っただけで、まだ全てを把握出来た訳ではない。それに引き換え美紀夫とは、毎日と言って

いいほど一緒にいる。兄貴が言うには、顔が同じ事から既にややこしいのだから、多少二人が重なって見えてしまうのも仕方がないのだろうとの事。

「でも、俺はみおさんに会えないと思う。最後にもう一度会って謝りたいって、メールを送ったけど、結局返信は返ってこなかった」

「番号も知らないのか？」

「……教えてくれなかった」

俺はため息をつく、立ち止まった。兄貴がどうしたのかと振り返る。

「兄貴は引かないのかよ。俺、男の美紀夫の方が好きなのかもしれないんだぜ？」涙が出て、思わず右手で覆った。「でも、美紀夫と一緒にだと、楽しい自分がいるんだ。それが友達としてなのか、恋人としてなのかよくわからないんだよ……！」

苦しくてその場で嗚咽する。ふと自分もみおと同じ事をしているのに気付いた。あの時のみおも、このような気持ちだったとでも言うのか。

「少し落ち着け、礼二」

優二兄が俺を抱きかかえるように道路の端まで誘導すると、そこから一段下りたコンクリートの堤防に俺を座らせた。その隣に兄貴も腰をかける。街灯の僅かな光で、お互いの顔が辛うじて見える薄暗い場所だった。

「お前が誰を好きになろうが、俺は立派だと思っけどな」石を拾うと、手の上で転がして遊ぶ。「人を好きになるってことは、時には

自分が考えている以上に難しい事だ。誰かを好きになると言うことは、その相手の全てを受け入れなければならない。勿論100%自分の理に叶う事は、まずない。どこかで必ず妥協しなければならないし、相手が見えない時は、自分が信じてやるしかない……礼二はまだ、彼女の事が好きなんだろう？」

わかるようでわからない兄貴の言葉に、泣きながら頷く。

「……ふられたけど、諦めきれない」

「それは理由もなく、一方的に断られたからだな。とにかくもう一度本人と会って、納得のいく理由を聞かせてもらえ」優二兄が俺の頭をわしゃわしゃと撫でた。「それにしてもお前は、また妙な相手を好きになつたな」

しゃくり声をあげながら、俺は涙を拭いた。

「言われてみれば、確かに」

「彼女の男性恐怖症がどれほど深刻なものか、恐らく男の俺達にはわからない。だから、そのトラウマも含めて全部を受け止める必要があるんじゃないのか？」持っていた石を、川に投げ入れる。「苦しい事かもしれないが、まずは彼女を知って、きちんと好きになるように努力しろ。美紀夫君の事はそれから考える。同時に二つのことは無理だ」

今度は勢いをつけて投げたのか、ぼちゃんと大きな音がした。俺も兄貴のマネをして石を投げ入れる。川には入らずに、遠くの方で草むらが鳴った。

「優二兄の言いたいこと、何となくわかった。俺、二人を同時に見ていたから、美紀夫の事まで好きなのかと錯覚していたのかもしれない

ない」

「それが、錯覚じゃなかったりしてな」

人ごとだと優二兄が笑う。俺は「そうじゃないと困る」と力づくで石を川に投げ入れた。どぼんと、深くまで潜った音がする。

「ま、どっちにしる頑張れ。遠くから応援してやるからさ」ぼん、と俺の頭を叩いて立ち上がる。「そうだな……礼二には先に言っておこうかな」

「何を？」

「俺、大学を卒業したら、結婚しようと思う」

「結婚!？」

俺は驚いて優二兄を見上げた。兄貴の表情は薄暗くてよくわからなかったが、恥ずかしそうに頭を掻いている。兄貴の彼女は、確か中学時代から長年付き合ってきた人だったはず。その相手と、結婚まで考えていたなんて。スケールの違いに、俺は開いた口が塞がらなかった。

「お、おめでとう……兄貴達は付き合って相当長いもんな。遠距離でも続いているんだから、凄いよ」

「へへ、ありがとう」照れくさそうに笑う。「あいつは今、後遺症と戦いながら絵を描き続けている……俺はそんなあいつの側にいてやりたいんだ。お姉さんが強敵だけだな」

真剣な瞳で真っ直ぐ未来を見据えている。かつこいい兄貴だと、俺は心底思った。普通の男なら、面倒な相手を嫁にもらおうとは思わない。しかし、目の前にいる兄貴はそれですら受け止めて、二人で前に進むうとしていた。

「今の話は、親にも兄弟達にも内緒な。お前のホモ発言も内緒にしておいてやるから」

「まだホモと決まった訳じゃねえよ！」

笑いながら優二兄にパンチをくらわす。先程までの、自分の悩みが嘘のように笑い合えた。やっぱり、優二兄に相談して正解だった。もう一度、みおを好きになろう。もう一度、彼女に会おう。そう決心がついた時、遠くの方から除夜の鐘が聞こえた。新しい年の幕開けだった。俺と優二兄は思わず顔を見合わす。

「ほら、このまま初詣と行こうぜ。明けましておめでとう」

優二兄が手を差し出す。俺は迷わず右手を差し出した。

「……明けましておめでとう」

照れくさそうに言うと、兄貴が思いつきり俺の手を掴んだ。

「いてえ！」

「お前……本当は怪我治っているだろ」そのまま俺の腕を引っ張り、前腕で素早く首を締め付ける。「下手に心配させやがって！」

「うわっ、ギブギブ！ すいませんでしたあ！」

「ばーか」

笑いながら何度か絞め技をくらった後、俺達はのろのと近くの神社に向かって歩きだした。家に帰る頃には、すっかり初日の出が顔を出していた。

line 32・及川の覚悟とみおの嘘

礼二の確認したこと。それは双子の姉、みおと美紀夫の違いではないだろうか。

及川は睨みを効かせた目で、礼二と久瀬の両方の練習風景を見ていた。やはり彼は、時折久瀬の姿を目で追っている。ふられた女にまだ未練でもあるのかしら。何てわかりやすい男なのだろう。一方で久瀬は素知らぬ顔でダツシユの練習をしている。その表情は男らしくもあり、また幼い少女のようでもあった。

憎たらしい男。礼二も何であんな奴と仲がいいのかしら。このところ、二人を見比べるのが日課となっていた。

「でさ、あんた告白したの？」

新年度に入り、授業が始まってすぐの昼休み早々、亜希が菓子パンを片手に嬉しそうに話す。

「してないわよ」

「何だ、てつきりあの帰りにでも告ったのかと思ったよ」残念そうに紙パックのジュースをすする。「意外と上手くいきそうない気がするのになあ」

この状況を樂觀視している亜希に思わず苛立つ。

「どこが？ 亜希にも説明したでしょ、久瀬君には双子の姉がいて、礼二はその姉に告ってふられたけど、未練がましく久瀬君の姿を追っているんだってば」

これが冬休みの間で及川なりに分かった事だった。亜希がうーん

と眉をひそめる。

「そんなの気にしていたら、いつまでたってもこのままじゃない」
「それは、そうだけど……」

亜希に痛い所を突かれ、及川は押し黙った。確かに手をこまねいているだけじゃ、何も変わらない。ずるずるとこのまま卒業してしまうのは目に見えていた。だからと言って、告白した所で陸上部とマネージャーの関係が崩れてしまうのが怖い。

「ま、部活が一緒だから余計にしりごみするか。流石に今まで通り
について訳にはいなくなるだろうし」

そう言っただザートのヨーグルトを美味しそうに食べる。もし礼
二と来年、同じクラスにでもなれば気まずい事このうえない。及川
は自分を追い込むように弁当を平らげた。

「じゃあ、バレンタインに告白するのはどう？ 男子も意識してい
るしさ、成功しやすいんじゃない？」

まだ新年が明けたばかりだと言うのに、もうバレンタインの話題
か。及川は教室にかけられたカレンダーを見てため息をついた。後
一ヶ月以上はある。

「バレンタイン、ねえ」

「とりあえず渡すだけ渡して、駄目だったら義理でしーって、ボ
ケれば気まずさも半減されると思わない？」

「ちよっと、勝手に駄目だって決めつけないでよ！ ……一応、候
補としては考えておくけど」

「うん、それがいいって。時期的にもピッタリだしさ。で、作った

「あたしにも頂戴ね」

「結局自分が食べたいのね……」及川は亜希に呆れて仰け反った。

「亜希もバレンタインに渡せば？」

「誰によ」

「同じバレー部の高橋君に。結構好みって言ってなかったっけ？」

高橋とは去年同じクラスだったので、及川も面識はあった。ただ、かなりのお調子者なので関わることはなかったが。

「冗談言っねー。彼はスポーツマンとして好きなだけ。あんなちゃらい男、こっちから願い下げよ」

けっ、と渋い顔でジュースを飲み干す。亜希は白けたように立ち上がると、ゴミをまとめて捨てに行ってしまった。

バレンタインに告白か。ありきたりだけど、向こうも意識しているだろうし、良い考えかもしれない。滞った気持ちを打開出来るかもしれない。この際はつきりさせてやろうじゃないの、自分にも礼二の彼女になれる権利があるかどうか。彼の心を揺さぶれるかどうか。及川は早速本屋に寄って帰ろうと意気込んだ。

新年を迎え、優二兄も東北に帰ってしまうと、俺の日常はいつも通りに戻った。部活動も再開し、今日は美紀夫の少し後ろを走っていた。美紀夫のか弱そうな背中を凝視する。……大丈夫だ。緊張してない、意識しないぞ、俺は。自分に暗示をかけながら走り続ける。もう一度みおと会う為には、メールを待っているだけじゃ駄目だ。みおは桜ヶ丘女学院の生徒だった。いつそのこと、みおが住んでい

る女子寮に押しかけてみてはどうだろうか。俺は美紀夫にも相談すべきかと考えたが、やめた。みおの肩を持つ美紀夫は絶対反対するに違いない。

部活動が終わり、バイトも何も予定のなかった俺だが、美紀夫のゲームの誘いを断ると真っ直ぐ家に帰った。これから一人でみおの寮を訪ねてみようと考えていた。メールは未だに返ってこない。このまま相手の出方を待っていては、らちがあかない。

携帯で桜ヶ丘女学院の寮の場所を調べてまわる。学校が所有している寮だけでも四件はあった。どうする？ 一件一件訪ねて回るか？ 俺は部屋の時計と睨めっこしながら考え、直接学校に電話してやろうと思った。美紀夫の名前を出して、姉のみおに取り次いでもらうなんて事は出来ないだろうか。せめて連絡先だけでも手に入りたい。俺は美紀夫に申し訳ないと思いながらも、学校の電話番号を入力して、かけた。

『はい、こちらは桜ヶ丘女学院総合受付係りの者です』

甲高い女性の声が切り返すように応答する。俺は緊張しながらも、嘘の用件を伝えた。

「そちらの生徒の、久瀬みおさんに電話を取り次いでもらうことは出来るでしょうか？ 弟の久瀬美紀夫と申します。昨日から姉と連絡がつかないので、非常に困っております」

自分でも驚く程すらすらと言葉が出た。少しの間を置いて女性が『少々お待ち下さい』と述べ、グリーンスリープスの保留音が流れる。もしみおが学校にいたら、このまま代わってもらえるかもしれない。淡い期待を胸に携帯を握りしめる。みおが出たらまっ先に謝ろうと思っていた。

五分ほど待っただろうか、繰り返された曲が途絶え、先程の女性が電話に出た。

『お待たせ致しました。お名前は久瀬、みおで間違えないでしょうか？』

俺は変だなと思いながらも「はい、そうです」と答える。その後、電話から思ってもみなかった返事が返ってきた。

『うちの学院の生徒に、そのような名前の生徒はいらっしゃらないのですが』

俺は驚きのあまりに携帯を落としそうになった。久瀬みおがいらない？ そんな馬鹿な。

「そんな……学校の寮に住んでいるはずです、もう一度調べてもらえませんか？」

『……ですからお調べしました所、そのような名前の生徒はいらっしゃいません』

きつぱりとそう告げられた。俺はカラカラに乾いた口で「そうですか、ありがとうございます」と答えるのがやっとだった。みおは、桜ヶ丘女学院の生徒ではなかったのだ。

俺は今聞かされた事実、どう対処すればいいのかわからなかった。みおは、俺に嘘をついていたのだ。そこまでして、見栄を張りたかったのか。それとも単に学校を教えたくなかったのか。どちらにせよ、みおが嘘を付いていたのには違いなかった。

line 33・美紀夫との距離

翌日。俺は昨日の出来事を引きずったまま、美紀夫と待ち合わせの電車に乗った。みおとの連絡手段がメールのみになってしまふとは。予想外の出来事だったが、昨日美紀夫に相談しなくて良かった。こうなったら弟の美紀夫から直接聞き出すしかないか。俺は腹をくくると、軽く咳払いをした。

「あのさ、ちょっと聞いてもいいか？」

「何？」

寒そうに手を擦り合わせながら美紀夫が顔をあげた。

「みおさんって、何処の学校に通っているんだっけ？」

もしかしたら俺の聞き間違いもあったかもしれない。向かい合って食事をしたあの時はお互いに緊張していたし、何しろ一ヶ月近く前の記憶だ。俺は確認の意を込めて尋ねたつもりだった。

「えっと……ほら、あの有名な女子校だよ」

美紀夫の目が言葉を探している。その様子にわざとらしく間を置いてから手助けした。

「ひよつとして……桜ヶ丘女学院か？」

「そうそう、そこだよ」

そっけなく返事をした美紀夫に心が痛んだ。吊り革を握る手が汗ばんでいく。美紀夫も嘘を付いている。二人でぐるになって俺を騙

そうとしているのか。しれっとした態度の美紀夫にもう一度問いかけた。

「本当に、そこに通っているのか？」

「……………」

この距離で聞こえていない訳がない。答えたくないのだ。俺は美紀夫にも、みおにも腹が立った。二人とも俺を会わせる気はないのだ。美紀夫は協力すると言ってくれたではないか。それすらも口からのでまかせだったのか。

「お前ら、嘘付いているだろ」

美紀夫の顔が一瞬にして強ばった。その瞬間を俺は見逃さなかった。

「昨日桜ヶ丘女学院に問い合わせてみたんだ。そしたら、そんな名前の生徒はいないってよ。嘘付いてまで、俺に会わせたくないのかよ……美紀夫、はつきり言えよ！」

そのまま頭を押さえ付けてやる。美紀夫は抵抗しようともせず、ただ黙って俯いているだけだった。傍から見たら、俺は単なるいじめっ子じゃねえか。美紀夫が何も言わないので、そのまま頭を突き飛ばしてやった。軽い美紀夫がよろけてドアにぶつかる。

「ごめん……礼二君、ごめん……」

今にも泣きそうな顔で呟く。いつそ殴ってやりたい気分だった。何でみおも、美紀夫も嘘を付くんだ。これ以上俺に関わらせないつもりなのか。そんなにみおも関わりたくないのかよ。怒りのやり場

が見つからない俺は、大きなため息をついた。

「みおさんに何か言われたのか？」

「……………」

美紀夫は何も答えない。

「協力してくれるんじゃないかったのかよ」

「……………」

これでは話にならない。俺は美紀夫から三十センチ以上離れると、こう言った。

「しばらく距離を置かせてくれ。お前の側にいる限り、みおさんを忘れられそうにない」

最寄り駅に停車すると、美紀夫を置いて先に降車した。礼二兄の助言でもう一度みおに会いたかったのだが、美紀夫が協力してくれない限り無理だろう。ひたすら返事の来ないメールを送り続けると言うのか。

男嫌いも含めて好きになろうと思ったが、会えなければ話にもならない。正体の掴めないみおに振り回されるのはもう沢山だ。同じ顔の美紀夫に動揺するのは、もっと御免だった。少し離れよう。みおからも、美紀夫からも。

「待つて、礼二君待つてよ！」

美紀夫の声が聞こえたが、俺は気付いていないふりをして足を早める。不貞腐れたように美紀夫と、みおの影から逃れるように学校へ向かった。

line 34・疎遠

俺は美紀夫を避けるようになった。朝練がある日は一本早いのに乗る、部活動中でも最低限の会話をお互いに守る。美紀夫も何も言わず、自分に与えられた罰かのように、ただ黙々と基礎練習に励むようになった。自分で招いた結果だが、これで良かったのだと言い聞かす。二人が許せないと思ったし、単に嘘をつかれたのも悲しかった。俺は美紀夫の事を親友だと思っていたが、それは思いあがりだったらしい。二人に俺の感情は振り回されてばかりだと気付いた。今は側にいたくない。

やがて教室でも殆ど顔を合わす機会が無くなり、弁当や教室移動の時などは同じ中学校出身の、高橋や山本とつるむようになっていた。

「礼二！ 早く着替えて体育館に行こうぜ」

高橋がそわそわした面持ちで、まだ教室に女子が残っているにも関わらず着替え始めた。この時期、体育ではバレーボールの授業を行っている。バレー部の高橋にとって、唯一の見せ場なのだろう。俺は笑いながら二人に遅れまいと学ランを脱ぎ捨てた。

美紀夫と喧嘩したのかと言われるけど、実際はそうじゃない。挨拶は勿論お互いに交わすし、日常会話もする。ただ一緒に登校したり、一緒に弁当を食べたり、一緒に美紀夫の家でゲームをしなくなっただけだ。つまり俺達の関係は、転校してきた当初の頃に逆戻りしていた。きっと今までの俺が、美紀夫に依存し過ぎていただけなのだ。あの日のデートの事も、俺は素直に受け入れられるようになっていた。俺は女にふられた、それだけだ。それ以上でも、それ以下でもない。

二月に入り、俺を含めた男子全員が淡い期待を抱く『バレンタイン』なるものが近づいてきていた。駅やバイト先のスーパーでもバレンタインフェアなんて物を開いているし、教室でも女子が料理本を片手に騒いでいる。最近では『友チヨコ』と言って女の友達にも渡す習慣が出来たらしい。俺は楽しそうにお喋りしている女子を尻目に、冷たい紙パックのジュースを啜った。

「今年もバレンタインの季節がやってきたなあ」

高橋が女子のスカートから覗く白い太腿を吟味しながら、にやにやと肘をついている。この時期に考える事は皆同じらしい。俺は昼休みの教室を見渡すと、楽しそうに弁当を広げている遠藤と目が合った。いつになくすらっとした彼女の腕からは黒のセーターが顔を覗かせている。紺色のベストから絶妙にはみ出たそのライン。遠藤の細い指先は、何事もなかったかのように箸を動かして続いていた。バイト先は同じなのだ。俺は勝手に遠藤から義理チヨコくらいは貰えるだろうと踏んでいた。

「なあ、勝負しねえか？ 誰が一番多くチヨコを貰えるかどうか」

高橋が俺の視線を戻した。

「お前、宛てでもあるのかよ」

「何、バイト先の女をちよっと引っ掛けてやるまでさ」

「酷いなあ。貰った分、お返しはどうするつもりなんだよ」

「いいねえ」俺の話を無視して山本がノツてきた。「で、罰ゲームは？」

「三人分全員のお返しを用意するってのはどうだ？　これなら文句ねえだろ」

自分が勝つ気満々で高橋が笑う。母親から貰うチョコレートは果たしてカウントされるのだろうか。半ば乗る気のしないまま、俺は強制的に勝負に参加させられる事になった。

「そう言えばお前、最近ちっこいのといたないよな。喧嘩でもしたのかよ」

高橋の顔が急に真面目になったので、俺は面倒くさそうに弁解した。

「喧嘩まではしてねえよ。挨拶くらいはしているだろ？　……あいつとは、ちよつと距離を置いているだけだ」

「距離ねえ。ま、俺らから見ても確かに近い部分はあったよな」

高橋と山本、二人そろってくすくすと笑う。からかうように山本が続けた。

「傍から見ても、お前らちよつとホモ臭かったぜ。離れたのは正解だったかもな。いくら久瀬が女顔だからって、流石の礼二も男には勃たなかったか！」

「あはは、違いねえ！」

山本の言葉が、俺の心臓に鋭く突き刺さった。傍から見たらホモ？　俺が？　そんな風に俺と美紀夫は見られていたのかよ。怒りと恥が幾重にも混じり合って、胃がひっくり返りそうな程煮えたぎっていた。胃液がせり上がって来るのを、無理矢理唾液で押し返す。気分が悪いのを堪えるのに必死だった。同時に、美紀夫を押し倒し

てしまった出来事がフラッシュバックされる。男にしては色っぽかった。乱れた前髪、少し腫れぼった唇、恥ずかしそうに潤んだ大きな瞳に、はだけたシャツ。

「どうした礼二？ お前も山本の言う事を一々真に受けるなよ」

ばしばしと俺の背中を叩きながら高橋が笑っているが、その下の下半身は確実に反応していた。

line35・返信メール

美紀夫と距離を置くことで、俺はみおの事を諦められる、忘れられると思っていた。双子で同じ顔の二人。しかし、実際そう上手くはいかないらしい。俺は美紀夫の姿をますます目で追うようになっていた。

自分は気が付いていないだけで、本当は同性愛者なのではないだろうか。そんな疑念が頭の中を鳴り響いて止まない。それとも自分はまだ混乱していて、二人を同一人物として捉えてしまっているのか。どちらにせよ、俺は美紀夫を恐れるようになっていた。自分の気持ちを知りたくなかった。臆病になっていた。

そんな俺の気持ちをそそのかすように、夜分遅くに一通のメールが届いた。部屋で珍しく宿題をしていた俺は、一体誰からだろうと携帯を開いた。

『 件名：こんばんは。』

本文：お久しぶりです、みおです 』

何とみおからだった。思わず心臓が跳ね上がる。眠気まなこで取り掛かっていた宿題を放置すると、考二に見られないようにと自分のベッドに上がった。毛布を被り、完全にそこの世界をシャットダウンさせてから画面をスクロールさせていく。

『 あの時取り乱したりしてごめんなさい。まさか礼二君に告白されると思ってもみなかったの。あれから自分なりに考えに考えて、正直な気持ちを今ここで綴ろうと思います。長文になりますが読んで下さい。私は礼二君の事、一目見た時から好きでした。もの凄く惹かれる物を感じました。でも、やっぱり怖い。私にとって男

性は恐怖の対象でもあります。それでも礼二君は、私にあれこれ気を遣い、何とか側にいられるようにと考えてくれました。私に合わせてくれました。なのに結果的に私がふったような形で別れてしまい、今までメールすら返せなかった自分をお許し下さい。随分と厚かましいお願いかもしれませんが、もう一度、デートからやり直しませんか？」

俺は三回程読み返した後、どう返信するべきかと考えあぐねいて画面を閉じた。今更みおからのメールが届くとは。しかも俺の事が好きだと書かれている。俺はあの時、ふられたのではなかったのか？ みおに拒絶されたのではなかったのか？

俺はもう一度メールを見直す。みおの真意がわからない。ここに来て、どうして態度を変えてきたのか。本当に俺の事が好きなのか。もしかしたらこれも美紀夫の差し金ではないだろうか。疑いたくはないが、二人は嘘を付いてまで居場所を教えてくれなかった。あまり信用出来ない。

返信はもう少し考えてからにしよう。俺は高鳴る心臓を押さえつけながら、なんとか眠りについた。

バレンタインまで後一週間。及川は休日につめた試作品を、早速亜希にプレゼントした。大きなタッパに入った、ハート型のチョコクッキー。クッキーの生地ココアパウダーを混ぜて焼いたただけの、初心者にも優しい簡単手作りクッキーだ。

「ん！ 普通に美味しい。あんだ料理したことないって言ってたか

ら、もつと酷いの食わされるかと思っていたよ」

「失礼ね、本さえあればレシピ通り作れるわよ」自分も味見にとクッキーを食べる。「うん、そこそこイケてるじゃない」

「試作品でここまで作れたなら、合格じゃないの？ 次はガトーシヨコラでも作ってよ」

及川は持ってきた料理本からガトーシヨコラのページを開いた。手順が多く、見るからに面倒くさそうだ。

「うーん……そんなこと言って、亜希は自分が食べただけじゃないの？」

「あ、バレた？」

「やっぱり」

及川は目の前ではくばく食べる亜希を無視して本をめくった。どのページも美味しそうなお菓子が載せられている。ガトーシヨコラなんて、義理にしては重すぎやしないか。当日は失敗の少ないクッキーを渡した方が無難かもしれない。ラッピングの袋もそろそろ買わなくては。及川はウキウキしながら何度もページをめくった。

line 36・保健室での二人

授業が終わり、いつも通りに部活動が始まる。ウォーミングアップに出かける皆を、及川は押し出すように声援してやった。

「今日は風も強いし、寒いけど頑張っていきましょう！」

ぼん、とたまたま近くにいた久瀬の背中を押してやる。何だよ、と一瞬嫌そうにこちらに顔を向けてから久瀬も走り出した。礼二はとつくに走りに行ってしまったらしく、姿は見えない。

最近二人の仲が離れていることに、及川は気付いていた。辛うじて一緒に帰っているものの、この所礼二は朝練に早く顔を出すようになっていたし、二人でいる姿をあまり見かけなくなった。喧嘩したのかとも思ったが、普通に挨拶や会話はしているようだし、本人達も嫌そうな顔を見せていない。他に気になる事があるとすれば、礼二が久瀬を目で追う回数が増えたくらいか。

及川はやり切れない気持ちで二人に紙コップを手渡した。礼二も気になるが、最近久瀬の表情に覇気が無いのも気にかかる。久瀬に直接尋ねた所で、あの性格だから素直に喋ってくれるとは思わないが、やはり部員の体調管理も受け持っているマネージャーとしては何とかしてあげたい所。しょうがない、帰りに久瀬を呼びつけて、今度はクッキーの試食でもしてもらおうか。

そんな野暮な事を考えながらハードルをセッティングし、基礎練習が終わるのを待った。今日は五十メートルハードルのタイム測定を行う予定だ。タイムウオッチを片手に及川がゴールラインへと立つ。久瀬ともう一人の選手二名がスタートラインで構える。及川が

笛を吹き、両者は一斉に走り出した。二人とも走り出しは綺麗だった。

及川は徐々に近づいてくる二人を目で凝視しながら、タイムも確認する。その、自分がちょっと目を放した瞬間だった。ドシャッとハードルが勢い良く倒れる音と同時に、久瀬が地面に叩きつけられていた。

「久瀬君っ！」

派手に転んだ音がしたが、測定中に離れる訳にはいかない。もう一人が息を切らしてゴールしたのと同時に、及川は走り出していた。

「美紀夫、大丈夫か！」

久瀬の元に先にたどり着いた礼二が声をかけていた。久瀬はゆっくりと砂埃を払いながら立ち上がる。

「大丈夫、ちょっと転んだだけ」

「久瀬君、大丈夫？」

追いついた及川が久瀬の背中に付いた砂を払いのけてやる。どうやら膝を擦りむいたらしく、血が滲んでいた。

「擦りむいているわね、保健室に行って消毒してもらいましょう。」

礼二、ちよっと手を貸してよ」

「あ……ああ」

突っ立っている礼二に声をかけたが、何やら久瀬に触れるのを躊躇しているらしく、あどけない素振りを見せる。及川は情けない礼二に苛立ちを覚えた。

「何を躊躇っているのよ！ もういい、私が連れていくわ」

「いいよ、及川さん。僕一人で行けるから」

悲しそうに笑うと、久瀬はひょこひょここと左足を引きずりながらグラウンドから出て行く。そう言われても引き下がれない及川は、礼二を置いて久瀬の元に駆け寄った。

「悪いね、測定出来なくて」

「何言っているのよ！ つまんない事言っていないで、早く行くわよ」

しおらしい久瀬に戸惑いながらも、二人は保健室に外から入った。椅子に座らせ、保健室の先生が擦りむいた箇所を消毒していく。久瀬は擦り傷だけでなく、何と左足首に捻挫まで起こしていた。

「随分と派手に転んだのね。軽い捻挫もしているわ。足元拭いてから包帯巻くから、じっとしてなさい」

少し肥えた保健室の先生が、久瀬のか細い足を丁寧に拭き、シツプの上から包帯を巻こうとした。が、タイミングの悪い事に電話のコールがけたたましく響く。

「私、包帯巻けますから、遠慮せず電話に出て下さい」

「そう、悪いわね」

及川は先生から包帯を受け取ると、代わりに久瀬の足元に跪く。捻挫した部分を労わるように、優しく巻いてやった。

「あなた、結構器用なんだね」

「これくらいは出来るわよ」

「そっか……ありがとう」

お礼を言われるとは意外だ。及川が顔を上げると、久瀬と目が合った。

「何だよ」

「……別に。あんたがお礼を言うなんて珍しいと思っただけよ」

保健室の先生は電話に出た後、久瀬のご両親に迎えに来てもらいましょと、職員室に行ってしまった。久瀬と二人つきりになった及川は、立ち上がるとしょぼくれている久瀬を見下ろした。

「捻挫は左足だけ？ つまらない意地はつてないでしょうね」

「はつてないよ」久瀬が顔をあげた。「自分にまで意地悪する馬鹿がどこにいるのさ」

強がって笑う久瀬の表情に、及川は胸を痛めた。

「ねえ、聞いてもいい？ 答えたくないのなら教えてくれなくてもいいわ。礼二と何かあったんでしょ？……最近、二人でいる所を見かけなくなっただわ」

久瀬は面倒くさそうに顔をしかめると、視線をそらして答えた。

「少し距離を置いているだけだよ。僕が招いた結果だから、及川さんまで気にすることはない」

「でも……あんた、とても悲しそうな顔しているわよ。喧嘩したとかじゃなくて？」

「……………」

喧嘩じゃないなら、何なのよ。男同士って、そんなに面倒臭いものかしら。及川はイライラしながら久瀬の言葉を待った。

「喧嘩までは……いかないと思う。全部僕のせいなんだ。だから、仕方ないんだよ」

「それは、謝って許してくれそうな問題なの？」

「……わからない」

久瀬は椅子から立ち上がるとよろよろと外へ出て行こうとした。

「ちょっと、何処へ行くつもりなの」

「荷物を取ってこようと思って」

「そんなの私に取りに行ってあげるから、あんたはベッドにでも寝てなさい！」

煙たがる久瀬を無理矢理ベッドに寝かしつけると、及川は靴を引っ掛けて部室へと走った。素早く彼の制服と荷物を持って戻って来ると、ちょうど保健室の先生も帰って来た所だった。

「ご両親に連絡した所、すぐこちらに迎えに来られるそうよ。久瀬君はお家どの辺かしら？」

「M町です」

「なら、後三十分もすれば着くわね。あなたも彼の荷物を届けてくれて、ありがとう」

「いえ……」

及川は恥ずかしそうに照れると、久瀬が寝ているベッドの横に荷物を置いた。

「荷物、これで良かった？」

「うん。悪いね、及川さん」

すっかり弱りきっている久瀬に、張り合う気持ちにはなれない。

及川は椅子をベッドの近くまで持つていくと、そこに腰を下ろした。

「もう大丈夫だよ。それより部活に戻った方が良いんじゃないの？」

「あっちには礼二がいるし、大丈夫よ。両親が迎えにくるまで、私がここにいてあげるから」

何となく今の久瀬には、誰かが側にいてあげた方がいゝ気がする。それが余計なお世話だとしても、及川は保健室から出る気にならなかった。

「そんな事言つて、部活さぼりたいだけなんじゃないの？」

迷惑そうに久瀬が笑う。及川は「失礼ね」と一喝した。

「ごめんごめん。及川さんが珍しく優しいから、ちよつと気持ち悪いと思つただけだよ」

捻挫しても、相変わらずの毒舌は健在のようだ。及川はため息をついた。

「前から思っていたんだけど、あんたつて遠慮して物を言わないのね」

「そうだね。ま、昔から優しい方じゃないけど」久瀬がちらつと及川の方を見た。「何？もしかして優しくして欲しいとか？」

綺麗な横顔の久瀬に一瞬ドキツとした。何て台詞をさらつと吐く男なのだろう。及川は咳払いをして空気を正した。

「素直になつて欲しいわね。あんた、だいぶひねくれ者だし」

「それはどうも。ねえ、もうすぐバレンタインだけどき、礼二君に告白でもするの？」

意地悪そうな顔で尋ねてくる。わかっている癖に。及川は「そのつもりだけど」と言つて突っぱねた。

「そう、上手くいくといいね」

意外な答えが返つて来たので、思わず眉をひそめた。

「あんた、私のこと嫌っていたんじゃないの？」

「嫌いだよ。でも、羨ましい」

そう言つた久瀬の瞳は、とても悲しげだった。彼に何があつたのだろうか。これ以上かける言葉が見つからず、お互い静かに迎えを待つ。しばらくして久瀬は母親と共にお礼を告げて歸つて行った。母親に支えられて歩く彼の後ろ姿は、とても切なかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6150v/>

ボーダーライン

2011年11月28日09時51分発行